291.99-Sh41ウ
+76W10210

琉球百話

嶋袋源一郎著

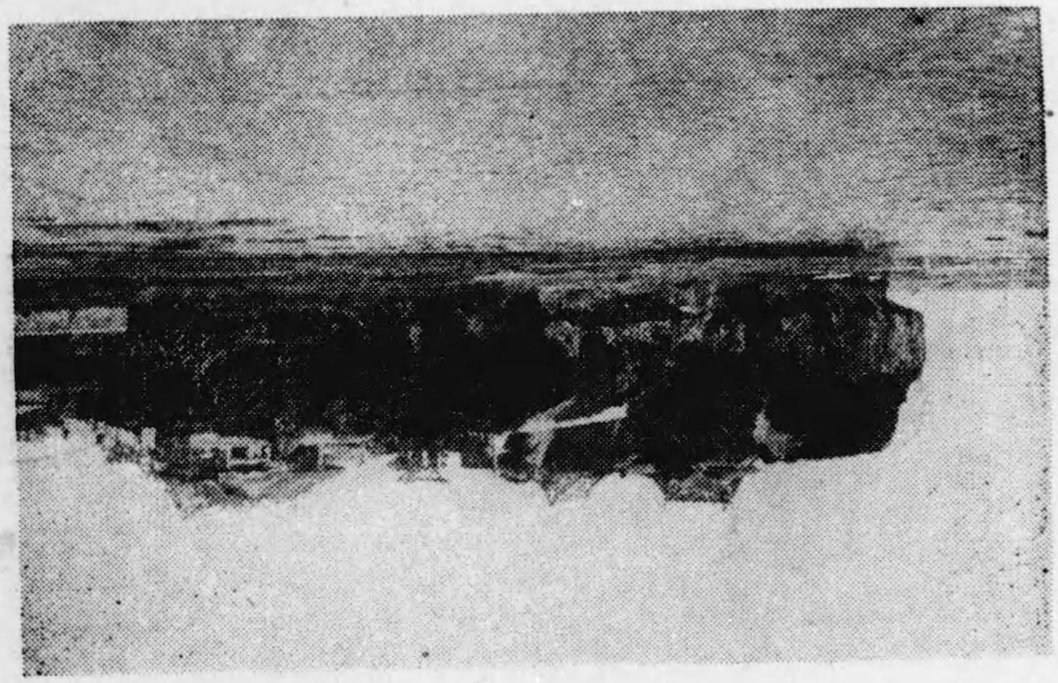
始

291.99
SH41
4

鳴袋源一郎著

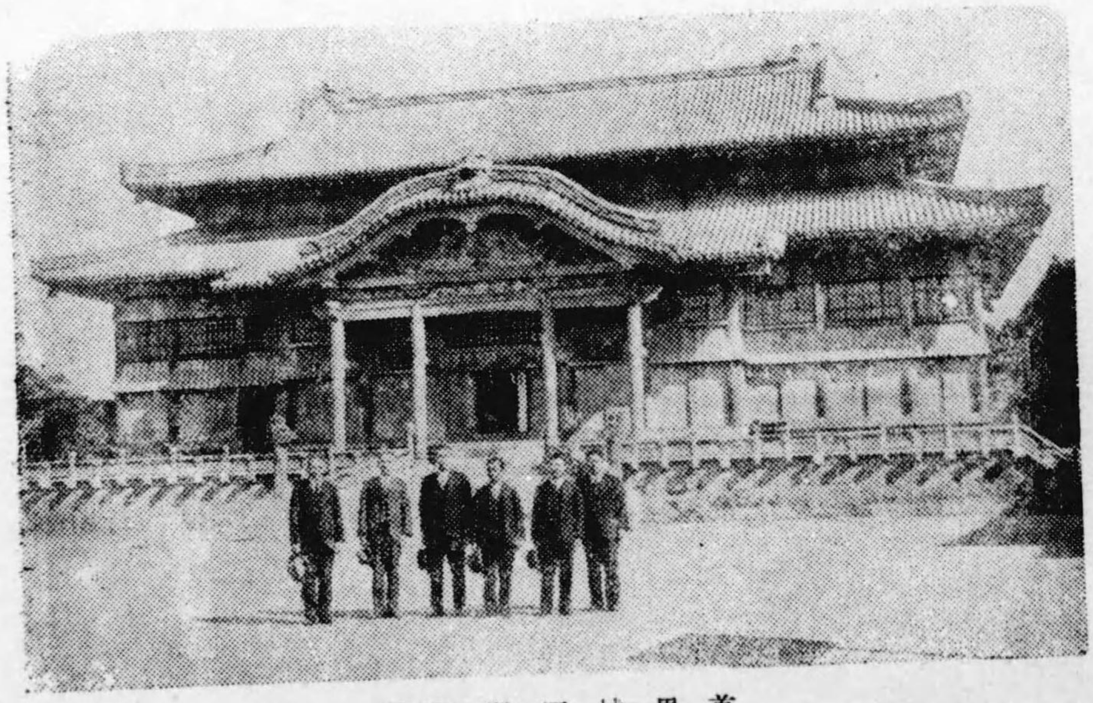
琉球百話

琉



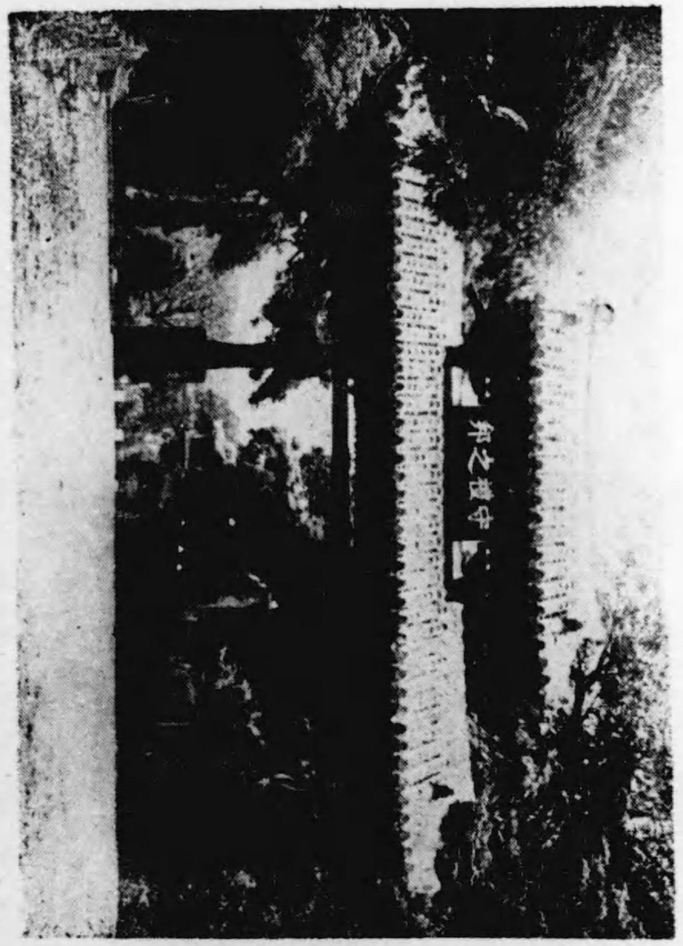
京上波瓶小磐官

76W10210

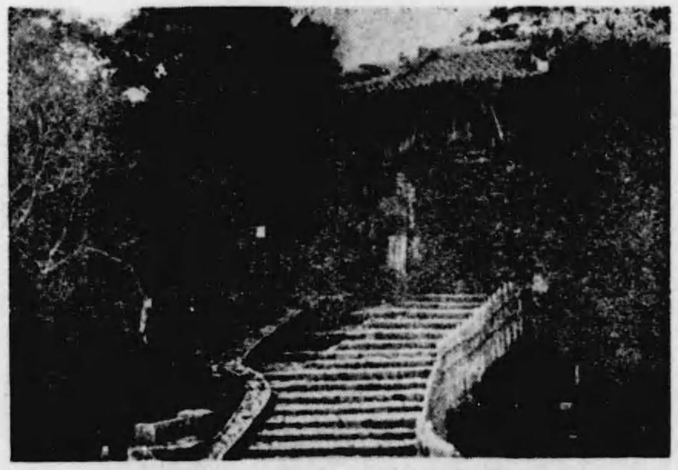


首里城正殿（國寶）

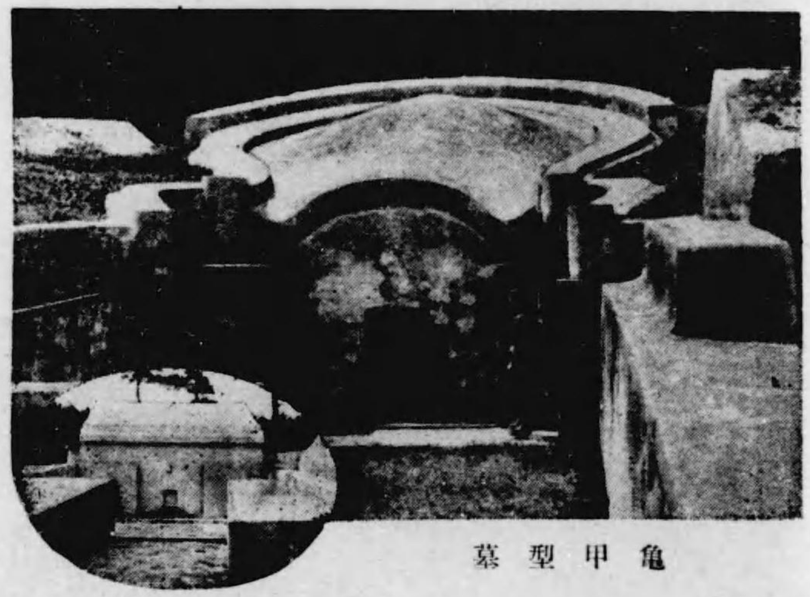
龍潭より首里城を望む



首里城外守禮門（寶國）

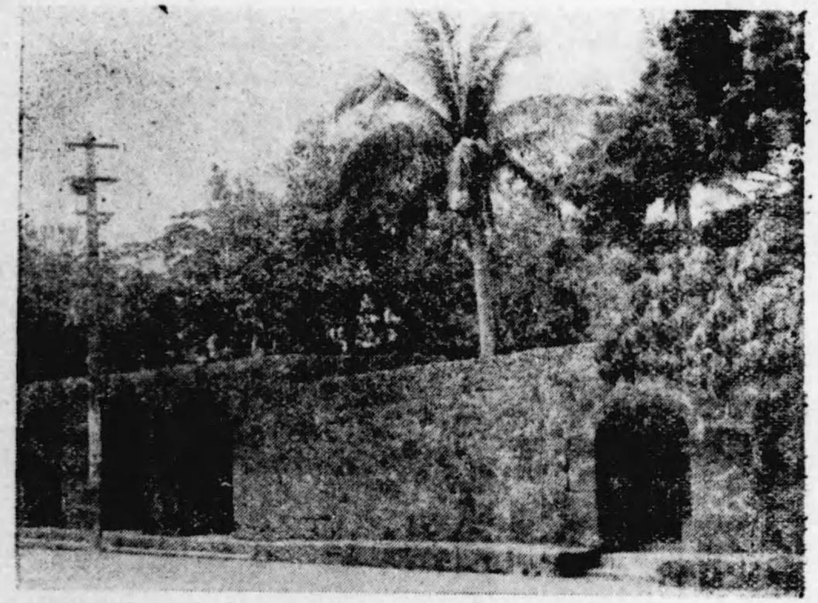


首里城瑞泉門（國寶）

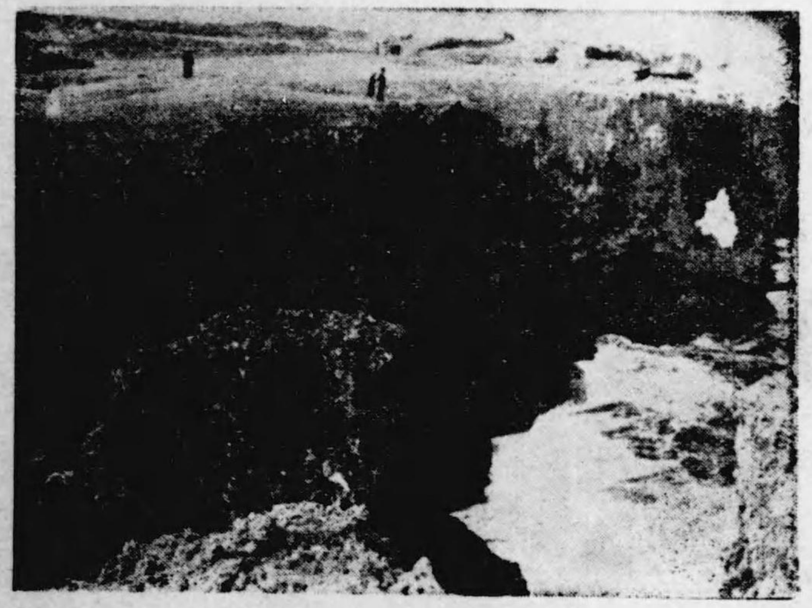


龜甲型墓

搏風墓家型式



崇元寺(琉球歴代國主廟)



隆起珊瑚礁の萬座毛(恩納村)

931
9

序

畏友島袋源一郎君、その著「琉球百話」を印刷に附する前に予に一讀せしめて讀後の感想を徵された。これを繙くに神話傳說・地理歴史・歌舞音曲・民謠俚諺・名勝舊跡・建築彫刻・人情風俗等、各方面より南島を宛らに描出して、座して觀光ルートを巡遊するの想あらしめ、縱横の達筆はまた親しく君が滔々たる快辯を聽くの感あらしめる。

沖縄に於ける古今獨歩の政治家と稱される蔡温を始め、一流の偉人の傳記も盛られてゐるが、蓋し南島の精粹を天下に紹介する上に於て、著者亦古今獨歩の地位を占むる者と謂ふべく、知見該博、博覽强記、嘗つて海南下村博士を驚嘆せしめて圓齋居士の雅號を贈らるゝに至つた一事を想記せざるを得ない。

本書は君の舊著新版「沖縄案内」の姉妹篇であり、主として縣外來訪客の便に備ふるために執筆されたものではあるが、一般縣民にとつても恰好の鄕土讀本であり、肩の凝らぬ趣味的伴侶であつて、年少子弟を啓蒙する資料も決して尠くないと信ずる。

君の謙遜なる、鄉土博物館に就いて語ること少きは何か物足りず、慾を言へば、その熱心と手腕とにより、著者が多年に亘つて蒐集された逸品名什の重なるものに就き解說されたらばと思ふのであるが、採訪研究に從事する人士は、寧ろ直接君の謦咳に接しつゝ微細な說明を聽問するのが忠實實明な方法だとも思はれる。本書はそれ迄の手引草のやうなものであらう。

君の純學術的業蹟としては別に沖繩縣下部落調査の大事業があり、そのために足跡殆ど島內に到らざるなく、考察亦精緻を極めてゐる。願はくは益々健康に留意して、將來の大成を期せられむことを、聊か希望を添へて序となす。

昭和十六年盛夏

濤韻莊にて

島袋全發

自序

昭和十年の夏、本邦甲冑の研究者山上八郎氏が漂然と渡海して來られた。三十歲を過ぎたばかりの元氣旺盛率直な白面の靑年である。聞けば彼は、東京帝大の總長をして居られた農學博士の令息であるが、山上家の嗣子と爲り、中學生時代已に鎧の研究に沒頭し、之を發表して斯界の權威者を驚かせたといふ變り種である。

折角八重の潮路を經て來られたものの、琉球は四百年前尙眞王時代に刀劍其他の武具を廢してしまつたといふので、只護佐丸の後裔なる首里豐見城家に三百年前其の祖先盛續が、命を受けて西之平の謝名を滅ぼした時に用ひたと傳ふる鎧が一領あるのみで、其他には餘り見るべきものがなく、遠來の珍客に對して寔にお生憎樣であつた。

けれども山上氏は其の趣味が仲々に廣く、琉球の話なら何でも根掘り葉掘り聽かれるばかりでなく、繪畫のスケッチに堪能であり、どんな話でも鉛筆で超人的に書取つてしまふ。おまけに勢力絕倫と來てゐるからたまつたものでない。流石に私も呆れてしまつた。「山上さん、貴君は甲冑

の研究で六十餘州を跋渉してゐるが、そんなに全國の物語を筆寫してゐたら本職の鎧の研究よりもその副產物を纒めた方が尨大なものになるではないか」といつた。

數日の後、山上氏は退縣するに臨んで予に向ひ

「貴君に一つ註文がある。あなたの知つてゐる琉球の話を百種だけ纒め、琉球百話とでも題して出版したら來島者を裨益する所鮮少ではあるまい。是非實行して貰ひたい、之が貴君に對する御禮の言葉だ」

と言つて倉皇として去つてしまつた。そこで其の年の冬、予は徹宵禿筆を叱して一氣に八十だけ書いた。然るに「何事も八分目が半分」とはよくも言つたもので。其後公私の多忙に追はれて原稿は漸次筐底深くめ入り込んでしまひ、昭和十一年夏大阪朝日九州版に「話題を鄕土に求めて」と題し、七種だけ發表したことがある。

目下各方面人士の來縣頻繁なる折柄全般的沖繩紹介の圖書皆無の狀態に鑑み、寸暇を割いて殘りの部分を埋合せ漸く「百話」に到達することを得たので之を上梓することにした。是れ全く山上氏慫慂の賜物である。只淺學を憾むのみ、若し、聊かにても鄕土沖繩の紹介に資する所あれば望外の幸とする。茲に執筆の動機を述ぶると共に、愈々斯道の權威者と爲り、最近「日本の甲冑」なる著述を出版した山上氏に感謝の意を表して序と爲す次第である。

昭和十六年八月

城嶽の寓居にて

著者　島袋源一郎

凡例

一、本書は鄉土の歷史・神話傳說・言語・風俗習慣・童謠俚諺・呪禁・歌舞音曲・氣候風土・人物傳記・美術工藝・動植物・地質・行政政治・產業教育・史蹟名勝其他有ゆる方面より特に興味深い材料を取上げ、しかも琉球の研究上知つて置くべき事項及び知らんと欲する事柄は凡そ之を網羅して百種を採錄することにした。

一、材料の配列に就いては大體に於て之を年代順とし、それに硬軟を加味した積りであるが、續き物ではないから船の中や汽車の中で、どの題目からお讀みになつても都合のよいやうにして置いた。

一、本書の取材に就いては琉球正史・遺老說傳・琉球國由來記を初め、伊波・眞境名・東恩納三先輩の著述及研究に負ふ所多く、亦已刊の拙著は勿論著者多年の調査研究等廣汎に涉るので、爰に一々書名を列擧することを差し控へ、先人及び諸先輩に深謝する次第である。

一、出版に際し著者の敬愛せる伊波・東恩納兩先生には一應御批正を願ふのが禮でもあり、序文を請うて卷頭を飾りたいとは思つたが、最近出版界の機構改變の爲め上梓を急ぐ必要に迫られたので、友人前縣立圖書館長島袋全發君の閲覽を請ふことにした。君は多端の折柄拙稿を一通り校閲せられ且つ序文を寄せて本書を世に推奬せらるゝと共に予の畢生の事業として遂行しつゝある鄉土調査に關し多大の鞭撻を忝うせしことは著者の衷心感謝に堪へない所である。

郷土自慢の歌

（一）

俺等の郷土は琉球藩
沖に連なるうるま島
ふるき言葉や風習の
神代に火遠理の尊様
門前龍樋の玉の井
之が御縁でお后に
潮満潮干の寶珠
豊玉姫がお産の時
皇子生れまし葺不合と

薩摩潟よりみんなみの
上古　平安　鎌倉の
今でも殘る夢の國
鈎さがしに龍宮城
映る尊の水かがみ
豊玉姫と御契り
形見に御歸り遊ばした
産殿の未だ成らざるに
御名付給ひし由緣にて

今も妊婦のお家では
鎭西八郎爲朝が
一子舜天　業を繼ぎ
それから下つて鎖國の世
日本本土を始とし
瓜哇スマトラの極にまで
よろづの品を商ひて
沈香　伽羅香　青磁燒
七珍萬寶　滿ち集ひ
黄金の花を咲かせたる
剛健進取の血を承けて
布哇アメリカ南洋へ
天地の果　吾が家ぞと

屋根葺き殘す風がある
弓杖ついた運天港
島も長閑に治まつた
獨り　海南琉球は
支那や朝鮮　安南シヤム
船を渡りの津梁となし
金襴どんすに綾錦
高麗人蔘　南蠻壺
琉球文化を織りなして
光輝く歴史がある
世界に誇る糸滿漁夫
十數萬の拓士群
荒波蹶つて勇みゆく

（二）

お國名物數ふれば
琉球紅型天下の珍
郷土藝能日本一
詩の國　歌の國　舞の國
古典舞踊に新派では
鳩間　天川　千鳥節
「旅の出立觀音堂
千手觀音ふし拜み
黄金酌取て立ち別る」
覺えぬ仁は御座るまい
徒手空拳のカラ手道
棒術　釵術　爬龍船
沖縄名產黑砂糖
泡盛酒の香も高く
琉球絣に上布織
漆器に陶器パナマ帽
琉球料理の珍味には
中味の吸物　猪のもどき
結び素麵　豆腐飫
あげ餅　田樂　なんとう味噌
菓子は金楚糕　花ボール
鷄卵糕に桔餅漬
花は梯梧に佛桑華
葉はクロトンに實はパパヤ

蝶々の羽の美しさ
皇太子様の御乘馬は
色鮮かな貝もやう
空は紺青　海は瑠璃
うるま漲水　琉球小馬
「月の美しゃや十日三日
眞珠きらめく星月夜
女童美しゃや十七つ」
海底の眞底の景觀は
さながら龍宮覗くやう
餘所で見られぬ珊瑚礁
殘波　萬座の大自然
飛行機上より見た島は
繪にも描けないパラダイス
それにも勝る人情美
心の花も赤く咲く

（三）

昔の領主は尙侯爵
羽地按司向象賢
具志頭親方蔡温は
六諭衍義を全國に
史上の人物擧げるなら
藩の仕置を定めおき
國建て直した大政治家
廣めた聖人程順則

甘藷を移した野國大主　　砂糖を創めた儀間眞常
バルチック艦隊報せたる　　宮古の久松五勇士
内外の船舶を救ひたる　　博愛許多ある中に
獨逸皇帝ウイルヘルム　　一世陛下の謝恩の碑
琉球名橋眞玉橋　　崇元廟の石の門
首里城正殿　圓覺寺　　桃原農園　識名園
史蹟名勝　數多く　　國寶すでに十餘点
學者　文人　墨客も　　押すな〳〵とやつて來る
神戸鹿兒島どちらでも　　三日目に着く那覇港
草鞋はくには及ぶまい　　鋪裝道路に上水道
琉球の土ふまぬ仁は　　語るに足らぬ御時勢だ
百聞は一見に如かず　　論より證據參り候へ
やがて東亞の新秩序　　島は國立公園に

機は八方に飛び通ひ　　日滿華　南洋　各地より
來り會する交歡地　　サア〳〵お出俺等の鄉土
乙姫樣も待つてゐる　　不老長壽の蓬萊島

琉球百話目次

序
自序
凡例
鄉土自慢の歌
一、沖繩への旅路……一
二、沖繩の初印象……四
三、琉球の童謠……六
四、龍宮の話……一〇
五、沖繩人の祖先は何處から來たか……一三
六、沖繩方言……一六
七、懷しい沖繩と宣傳的な琉球……二〇
八、行政區劃と沿革……二三
九、偕老同穴……二六
一〇、琉球の開闢神話……二九
一一、琉球の古神道……三〇
一二、出產の土俗に現はれたる我が國上代の遺風……三三
一三、面白い蛇除けの呪禁……三七
一四、古事記と琉球の葬儀……三九
一五、三線の地質より成る琉球アーク……四二
一六、日本本土との交通……四五
一七、爲朝は果して琉球へ來たか……四七
一八、南島に於ける平家の遺跡……五〇
一九、百合若物語……五三
二〇、國主六たび變革す……五六

二一、悲戀に泣きし島の娘……五九
二二、琉球の群雄割據時代……六二
二三、久高島傳說「黃金の瓜種」……六五
二四、土地共有制度の久高島……六八
二五、琉球羽衣物語……七三
二六、支那との關係……七五
二七、勇壯無比の爬龍舟……七九
二八、冠船の渡來と褌……八一
二九、石敢當と焚字爐……八四
三〇、黃金の島大琉球……八六
三一、由緒も古い琉球八社……八九
三二、琉球の貨幣……九一
三三、都人の度胸を拔いた琉球使臣……九三
三四、琉球浦島物語……九四
三五、武備の撤廢と中央集權……九七
三六、寶刀物語……九九
三七、面白い琉球の辭令……一〇三
三八、琉球の位階と冠……一〇七
三九、珍らしい古琉球の石碑……一〇八
四〇、驚くべき崇元廟の石門……一一三
四一、琉球を經由した大陸文物……一一四
四二、琉球瘡の傳播……一一六
四三、豪快な秀吉の書翰……一一八
四四、古琉球人の詠める和歌……一二一
四五、薩摩と琉球……一二六
四六、尙寧王東上して將軍に謁す……一二八

四七、沖繩の俚諺……一三三
四八、琉球の疲弊……一三四
四九、支那の革命と琉球の態度……一三六
五〇、勇敢なる通事林氏の話……一三七
五一、貿易船の歸來と那覇港の騒動……一三八
五二、伸びるいもづる……一四一
五三、空手道の起原と其の沿革……一四四
五四、砂糖の歴史……一四九
五五、果して男逸女勞か……一五一
五六、有名な白銀堂の傳說……一五四
五七、糸滿漁民は果して異人種か……一五七
五八、異國風に見えるキリシタン帳……一六〇
五九、琉球藩の無線電信……一六二
六〇、琉球の地名及び姓名……一六四
六一、黑白の對立……一六四
六二、復興の礎を築いた向象賢……一六八
六三、六諭衍義を廣めた聖人程順則……一七〇
六四、三府三十六島……一七三
六五、傑出せる大政治家蔡温……一七四
六六、琉球政治の要訣……一七七
六七、琉球藩の庶民教科書「教條」……一七九
六八、入墨は成女のしるし……一八三
六九、古琉球の飢饉對策……一八六
七〇、共存共榮と相互扶助……一八九
七一、絢爛たる琉球紅型……一九一
七二、琉球國劇の創始……一九四

七三、優雅な琉球古典舞踊……一九六
七四、女護ヶ島の話……一九九
七五、南島の馬と日本犬……二〇三
七六、ペルリ提督と琉米條約……二〇五
七七、波上の眼鏡ペッテルハイム……二〇九
七八、獨逸皇帝建立の謝恩碑……二一三
七九、日本最初の琉球國勳章……二一六
八〇、ナポレオンを驚かした琉球……二一九
八一、和歌に堪能な維新慶賀使……二二一
八二、一視同仁皇恩に均霑す……二二三
八三、ペルチック艦隊を通報した宮古五勇士……二二五
八四、識名園と名橋眞玉橋……二二八
八五、常夏の國の氣候……二三〇
八六、飯匙蛇とマングース……二三四
八七、沖縄產業總まくり……二三七
八八、沖縄名產……二四一
八九、獨特の農林奬勵法「原勝負」……二四四
九〇、辻の歴史と今後の問題……二四六
九一、風變りな辻の氏神祭……二四七
九二、那覇市見物……二五〇
九三、首里は京都・那覇は大阪……二五三
九四、舊都首里見物……二五五
九五、普天間宮詣で（中頭郡名所案内）……二五九
九六、山紫水明の國頭巡り……二六一
九七、風光明媚な久米島……二六五
九八、細上布と五勇士で名高い宮古島……二六八

九九、歌の國舞の國八重山……二七〇
一〇〇、八重山概觀……二七三

琉球百話

一、沖繩への旅路

琉球へおちやるなら草鞋はいておちやれ
琉球は　石原　小石原
島人おちやるなら草鞋はいておちやれ
島は　石原　小石原

といふ俗謠はよく人口に膾炙してゐるが、之は元來櫻島にかけて詠んだ俗謠での原作を焼き直して琉球節としたのである。

琉球と鹿兒島と地續きならば
　通てさかづき　して見たい

之も矢張り薩摩の俗謠である。多くの人は、沖繩へゆくには昔のやうに鹿兒島でのみ船に乘ると

思つてゐる。しかし今では關東關西方面の客は大抵大阪神戸で四五千噸級の大型優秀船浮島丸などに乘ると、翌々日は那覇へ入港が出來、一方亦福岡の「雁の巣」で内台飛行機に乘ると運賃六十圓、たつた三時間そこら翔破して那覇へ安着する。さても便利な世の中になつたものである。

飛行機は殆んど毎日飛んでゐるが、大阪起点の船は那覇と兩方から毎月六・十二・十八・二十四・三十日の五回定期出帆することになつてゐる。但大阪發の船は右定日の翌朝神戸を出で、土佐沖を通り、右に四國九州の翠巒を眺めつゝ一路奄美大島の名瀬に向ひ一寸寄港して又その翌朝那覇へ着く。

鹿兒島那覇間の定期船は二三千噸級で兩方より一・五・八の日毎月九回二夜の浪枕、午后五時鹿兒島を解纜、櫻島を左に、秀麗な薩摩富士開聞岳を右前方に眺めつゝ、湖水の如き錦江灣を悠々と進行する。灣口猶ほ程遠くして早くも日沒となり、船客は甲板上より姿を消してしまふ。夜の中に屋久、種子など薩南諸島を過ぎ、翌朝夜明けに、十島村の諏訪瀬島、惡石島、寶島などを遙か西方に見つゝ午前十時頃大島名瀬に入る。鹿兒島より二〇九浬、船は此處に二時間位碇泊するから上陸も出來る。

名瀬は三方山岳に圍繞せられ、人口二萬餘、土地甚だ狹隘を告げてゐる。大島諸島は慶長年間迄、琉球王の所轄であつたから、今でも言語風俗等相類似してゐる。船が着くと大きな風呂敷包を抱へた男女が入り込んで來て名產大島紬を鬻ぐ。午后船は再び錨を載せて愈々沖繩へ向ふ。此の航路で最も驚くのは青空の色が如何にも美しく澄んでゐるのと、琉球群島の岸を洗つて流るゝ黑潮が、紺碧藍の如く、南へ南へと進むにつれて一入鮮かになつて行くことである。殊に日沒に於ける彩雲の光景は、或は紅蓮の焰の如く、忽ちにして碧玉となり、瑠璃と化して千變萬化窮りなく、全く想像に絶する南國の奇觀である。工學博士伊藤忠太先生が言はれたやうに、昔日本本土の人が南島に航して此の偉大なる自然の大技巧、驚くべき神秘の大藝術を眺めた時は恰も龍宮城から立ち昇る瑞雲と觀じ、或は亦仙境に近づいたといふ感じを抱いたであらう。

やがて大島の連山を見送り、夜に入りて德、永良部、與論の諸島を過ぎ、黎明朝靄の模糊たる中に沖繩管内の伊平屋島、伊江島近海を通過する。左手に沖繩本島の山々が連互して島の姿が横はつて見える。嘗て索莫無味にして蕞爾たる一小孤島と思つてゐた沖繩島が、意外にも風光明媚翠色滴るが如く、然かも南北蜿蜒四十里、周回百數十里もあるとは豫想を裏切る最初の事實である。

ザンバ岬を過ぎる頃から島が第三紀層で低平になり、海岸に珊瑚礁の景觀が現はれて來る。程なく、龍宮城とおぼしき首里城の正殿が聳えてゐるのを望見する。遠近に無線電信の鐵塔が林立し沖繩關門の偉觀を呈してゐる。

左方隆起珊瑚礁の斷崖の上に儼立してゐるのは琉球總鎭守官幣社波上宮で、恰も其の名の如く岩諸共社殿が波上に浮んでゐるやうに見える。其の左右丘上に累々として白壁の土藏と見ゆるは沖繩名物の墓である。

船は忽ちにして針路を轉じ、右に四百年前、倭寇擊退のために築いたヤラザ森城、左に三重城を眺めつゝ、兩古壘の間を縫うて一路那覇港へ入る。

二、沖繩の初印象

那覇港は想像外の良港で、棧橋には三四千噸級以上の巨船が數隻横付けにされてゐる。之は明治四十年帝國議會に於て修築費通過、第一期工費八十万圓、歳を閲すること八星霜にして全く面目を一新したが、更に大正十年より第二期工事を施行し、工費百五十萬圓を投じて大擴張を行つた結果四五千噸級を繫留することが出來たのである。

いよ〳〵港に入ると、屋根瓦の赤いのや、その皆本瓦葺になつてゐるのが一番目につく、暴風の多い土地だけに瓦と瓦の間はすべて漆喰でぬり固めて雨漏りを防ぐのである。棧橋構内を出ると、數十臺の人力車が蝟集してゐて便利がよい。

珍らしい植物　旅館の庭前には見馴れぬ植物が栽ゑてある　萬綠叢中紅一点の佛桑花や蘭に似た羊齒類の大谷渡り、都會で大流行の竹に似た觀音竹、枝振りのよい鉢植の蘇鐵、南洋から傳來したクロトン、中空に孔雀の羽を廣げたやうな棕櫚、大きな團扇を翳したやうな蒲葵（方言クバ）草が其の儘木になつたと思はるゝバパヤ樹は天人の掌みたいな大きな葉を廣げ、榕樹は地上に氣根を垂れてゐる。葉の大きく厚い福木は單に防風によいばかりでなく、時に防火の役にも立つ。梯梧は荳科植物中の巨樹で、五六月頃火を吐くやうな眞紅の花が、あの珊瑚のやうな枝についてゐる。之は南島ならでは見ることの出來ぬ風景で、枯木に花が咲くとは此の事かと思はれる。その木材は琉球漆器の材料として用ひられ、輕くて狂ひの生じないのが特徴である。

水道と鋪裝道路　以前は水に不自由であつたが、昭和八年上水道施設が出來、續いて下水工事

ザンパ岬を過ぎる頃から島が第三紀層で低平になり、海岸に珊瑚礁の景觀が現はれて來る。程なく、龍宮城とおぼしき首里城の正殿が聳えてゐるのを望見する。遠近に無線電信の鐵塔が林立し沖縄關門の偉觀を呈してゐる。

左方隆起珊瑚礁の斷崖の上に儼立してゐるのは琉球總鎭守官幣社波上宮で、恰も其の名の如く岩諸共社殿が波上に浮んでゐるやうに見える。其の左右丘上に累々として白壁の土藏と見ゆるは沖縄名物の墓である。

船は忽ちにして針路を轉じ、右に四百年前、倭寇擊退のために築いたヤラザ森城、左に三重城を眺めつゝ、兩古壘の間を縫うて一路那覇港へ入る。

二、沖縄の初印象

那覇港は想像外の良港で、棧橋には三四千噸級以上の巨船が數隻横付けにされてゐる。之は明治四十年帝國議會に於て修築費通過、第一期工費八十万圓、歳を閲すること八星霜にして全く面目を一新したが、更に大正十年より第二期工事を施行し、工費百五十萬圓を投じて大擴張を行つ

た結果四五千噸級を繫留することが出來たのである。

いよ〳〵港に入ると、屋根瓦の赤いのや、その皆本瓦葺になつてゐるのが一番目につく、暴風の多い土地だけに瓦と瓦の間はすべて漆喰でぬり固めて雨漏りを防ぐのである。棧橋構内を出ると、數十臺の人力車が蝟集してゐて便利がよい。

珍らしい植物　旅館の庭前には見馴れぬ植物が栽ゑてある。萬綠叢中紅一点の佛桑花や蘭に似た羊齒類の大谷渡り、都會で大流行の竹に似た觀音竹、枝振りのよい鉢植の蘇鐵、南洋から傳來したクロトン、中空に孔雀の羽を廣げたやうな棕櫚、大きな團扇を翳したやうな蒲葵（方言クバ）草が其の儘木になつたと思はるゝパパヤ樹は天人の掌みたいな大きな葉を廣げ、榕樹は地上に氣根を垂れてゐる。葉の大きく厚い福木は單に防風によいばかりでなく、時に防火の役にも立つ。梯梧は荳科植物中の巨樹で、五六月頃火を吐くやうな眞紅の花が、あの珊瑚のやうな枝についてゐる。之は南島ならでは見ることの出來ぬ風景で、枯木に花が咲くとは此の事かと思はれる。その木材は琉球漆器の材料として用ひられ、輕くて狂ひの生じないのが特徴である。

水道と鋪裝道路　以前は水に不自由であつたが、昭和八年上水道施設が出來、續いて下水工事

が行はれることになり、今では市内目抜の通路は鋪裝されて便利になつた。

婦人の服裝　男子の服裝は本土と何一つ變りもないが、老婦女子の琉裝や髪の結び方は實に異樣に見える。着物は袖が短く、帶は我國上古の儘前結になつて居り、冬などは打掛と稱して上より羽織つてゐる、夏の頃は亦帶を用ひず、ウシンチーと稱して着物の合せた所を揉ぢ込んでゐるのを多く見受ける。田舍から出て來た女などには左衽も時たまにある。之は我國奈良朝以前の古俗で、本土では疾うの昔大陸文化の影響をうけて右あはせに改めたのである。

三、琉球の童謠

蝸牛

一、ちんなんもうもう、大ぐたもうもう、新垣山かい、とんのぼれ

（大意）かたつむりの牛〳〵さんよ、大きな角のかたつむりさんよ、新垣山へ、飛びのぼれよ

（語意）ちんなんは「つのなめむし」のこと、ちんは角、なんは嘗めの訛り、もうもうは牛の兒童語、大ぐたは大きな角。

蟬

一、上んかいのぼれー、烏の喰はいんどー、下かいおりれー、何のん喰はんどー

（大意）蟬さん〳〵「上にのぼれば烏が喰ふぞ、下におりれば何にも喰はれぬぞ」と唱へて蟬がだん〳〵下へおりて來た時に捕へようといふ兒童心理である。

烏

一、烏よ、烏よ、汝のあとから、大和の人の、鐵砲かためて、汝を、射りが來うんどー、阿旦の中行ぢ、蘇鐵の中んぢ、かつくい早かー、かつくい早かー

（大意）烏さんよ、烏さんよ、お前の後から、大和人（本土の人）が、鐵砲をかついでお前を射に來るぞ、アダン樹の中に、蘇鐵の中に、早く隱れよう（之は置縣前後に出來た童謠であらう）

お月樣

一、たうたう前され、たうたう前、大餅、やと餅、御賜べめしよわれ、うまぐる拾て御差上げやべら

（大意）お月様よ、お月様よ、大餅を下さいナ、でつかい餅を下さいナ、貝殻を拾つて差し上げませう（之は古宇利島開闢の童謡であるが、他の今歸仁地方にては、下句は「來年の此の節には小馬を飼らーて御差上げやびら」と謡つてゐる）

（語意）お月様を「たう〳〵前」と稱するは、尊とい御前の意。

雨

一、上の山にや大馬繋んちゅて、下の山にや小馬くんちゅて、うり取る間、雨晴れれめさうれヨ、ベン、ベーン

（大意）之は國頭郡の童謡で、上の山には大きな馬をつないであり、下の山には小馬をつないであるから、それを取つて來るまでは雨を晴らせて下さいヨ、ベン、ベーンはしと〳〵と降る雨の音であらう。

子守歌の一

一、天から下りたるいちゅまん小、幾人つれて、下てたがへー、三人づれて下てたんへー、うりが下てたる所や何處やがやー、波上城の突立ちゅー（一に、なん〳〵城のちーたっちゅー）

（大意）天から下りたといふ糸繭（絹）のやうな美しい子は、何人連れて下りたであらう？三人連れて下りたとサ、それが下りた所は何處であらう？波上城の突立岩のあたりとさ。

俗に、いちゅまん小は糸滿子とも解せられてゐる。此の童謡は餘程古くから、沖縄本島各地に傳へられ、琉球開闢神話アマミキヨ傳説とも一脈のつながりがあるとも考へられて居り、國頭郡にては波上城をなん〳〵城と謡つてゐる。

子守歌の二

一、汝達、母様、何處かいが、山羊の草刈いが、山羊の、甘さ草や、しばば、ゆし木の葉（一にしばばべんぎ。又一にべん木若葉）

（大意）貴方の母ちゃんは何處へ行つたの、山羊の草刈りに行つたのよ、山羊のお好きな草は、野にある蕗（しばば）の葉と、いすの木（ゆし木）の葉ですよ（ベーベーは山羊の兒童語）

子守歌の三

一、吾が抱ち抱ち、成長うーさば、地頭代の主が嫁なれヨ、草履もバチ〳〵履めヨーヨー、下駄もカラ〳〵履めヨーヨー、私が來うはも、誰が來うはも、御茶受、作とて、待つちょれヨー

（大意）私がお守して大きな人にして上げたなら、地頭代様のお嫁さんになつておくれヨ、そして私がお訪ねしても、誰が來ても、御茶受を作つてお待ちする身分になつておくれよ（今歸仁、本部の子守歌）

〔語意〕地頭代は地頭に代つて村を支配する役人で庄屋さんに當り、土地の百姓中功勞多き人を拔擢して任命せらるる出世頭で、村民最高の地位であつた。

四、龍宮の話

昔々、天孫瓊々杵尊（ニニギノミコト）が或日、日向の笠沙（カササ）の岬で美しい女神に御出會ひになり「お前は誰の娘であるか」と御尋ねになると女神は「私は大山津見神の女で木花咲耶姫（コノハナノサクヤヒメ）と申す者で御座います」と御答へ申上げた。其の後尊は大山津見神の處へ使をおやりになつて咲耶姫を御嫁に貰はれ、三人の御子樣がお出來になつたが、一番始めにお生れになつたのが此處に述べようとする火照命（ホテリ）、次が火遠理（ホヲリ）命即ち又の御名は彦火々出見命と申上げる方である。

御長子の火照命は海で漁をすることが大層お好きでしたから海幸彦と申上げ、御弟の火遠理命は山の獵がお上手で山幸彦と申してゐた。或時、御弟の山幸彦は御兄君樣に向ひ「今日は一つお互に道具を取換へて漁獵をして見ようでは御座いませんか」と申されたが、御兄の命は仲々御承知にならなかつた。しかし御弟の命が三度もお賴みになつたので兄君も厭々ながらそれを御許しになるやうになつた。火遠理命は早速御兄さまの御道具を持つて海へ御出掛けになり釣をお始めになつたが、いつ迄たつても魚がかゝらぬばかりか、大切な兄君の釣鈎（ツリバリ）まで魚に取られて、すご〳〵とお歸りになつた。御兄さまも獵が思はしく行かず「さあ此の弓矢を返すから、私の釣道具を返してお呉れ」と仰せられた。御弟の命は釣鈎を失くされたことを申述べると、兄君樣は大變御立腹になつて是非それを返せと嚴しく催促をせられた。

御弟の命は大層お困りになつて、仕方なく御自分の佩劍を壞して五百本の釣鈎を作らせて差上げられたが兄君はお取りにならぬ。今度は千本拵らへて差上げたが矢張り元のものを返せといつてお許しにならなかつた。火遠理命は全く困り拔いて一人海邊をしよぼ〳〵と泣きながら探して居られると、塩椎神（シホツチノカミ）と申す方が現はれ、其の譯をお聞きして大變お氣毒に思ひ「それでは私がよい工夫をして上げませう」と言つて、目無籠といふ小舟を作つて差上げ、さあ之にお乘りになつて

龍宮へお出になり、綿津見神に御相談遊ばせと、教へて上げた。命がだん〳〵沖へ沖へと漕いで行かれると幾棟も立並んだ大きな重層の美しい御殿が現はれ、やがて龍宮に御着きになり御宮の門前へ行かれた。すると門の傍に井戸があつて、海神の娘豊玉姫の侍女が立派な玉の御碗を持つて水を汲まうとした。命は「お水を貰ひたい」といつて近寄られ、首に佩いて居られた珠をお外しになつて碗の中へ入れてやられた。侍女は早速此の旨を豊玉姫に申上げると、姫は之を父君にお告げした。すると綿津見神は命を奥座敷へお通しいたし「貴方は天神の御子様ではありませんか」といつて大層叮寧に御饗應を申し其の上豊玉姫をお妃様に差上げた。

命は此處で三年の日子を樂しくお過しになつたが、或時釣鈎のことを思出し急にふさぎ込んで居られると、綿津見神は之を聞き、早速魚族を集め鈎を探り出してお返しいたし、命が御歸國の時潮滿珠、潮乾珠を御土産に差上げた。命は戀しい國へお歸りになり、鈎をお返しいたさうとすると御兄君はお受けにならない。何處迄も御弟の命をいぢめようとされるので、命は遂に潮滿珠を捧げられた。兄君は渦に卷込まれて只管助命を乞はるゝまゝに御弟の命は潮乾珠をさし上げて之をお救ひになつた。それから御兄君は御自分の非行をお詫びになり、子々孫々水に溺れた身振の舞踊をなしてお仕へすることになつたとのことである。

偖て此のお話にある龍宮城は樓閣が整然として備はり、門前には玲瓏たる一井があり、周圍は石壁を繞らし、正殿が巍然として山巓に峙つなど全く琉球王城（首里城）のそれに符合して居り又昔から琉球では津々浦々海神祭を執行してニライ、カナイの神を祀り、雨乞の祈りに「龍王がなし、雨賜ばうれ」などと稱へてゐるのも相應しいから、古來本土でも或は龍宮は琉球のことであらうといふ說があつた。

藩政時代浦添王子朝薫の歌に（柳營へ拜謁し奉りける日）

わたつみの底より出てて日の本の
光を仰く龍の宮人

と詠めるが如きは當地の人々にも古くからさうした思想のあつたことが窺はれて面白い。

五、沖繩人の祖先は何處から來たか

琉球が久しく日支兩屬の觀を呈してゐたといふ歷史的事實から、沖繩人は支那民族でもある

かのやうな疑念を挾む人が尠なくない。全く認識不足といはねばならぬ。

學問の進歩した今日に於ては、言語學、人種學、血淸學、民俗學其他有ゆる方面から調査して明かに日本民族の一集團であるといふことが定論になつてゐる。

言語、宗教、土俗等に就いては夫々別の項に於て述べることとし、其他俚諺、童謠、辭令、石碑等の各項を參照されたら直ちに氷解する問題であるが爰にはそれ等に屬せざる方面の一、二に就いて記すことにする。

明治三十七年東京帝大人類學教室の鳥居龍藏氏が沖繩人の皮膚等について調査の結果は日本內地人のそれと大同小異だと發表され、次に大正八年來縣した東京帝大の松村瞭氏は人種學上最も重要視せらるゝ頭骨の構造につき、縱橫の長さを測定して其の指數を算定したる結果「頭形上より見たる琉球人の人種的位置については、日本人中の一集團と解するを至當とする」と結論し、「其の平均指數が九州南部と北部の差よりも、九州南部と琉球との差が少ない」と結論してゐる。

又大正十四年來縣、血淸學的立場より桐原眞一博士の計出した人種係數に依ると九州は一・七九で東京附近が一・七〇、沖繩島が一・六一、仙台が一・五〇になつて居り、之を滿洲人の〇・八一

や直隷及山東人即ち漢民族の〇・五九に比すれば一目瞭然と沖繩人の祖先が大和民族の一分派であつたことがわかるであらう。

京大人類學教室で研究してゐた新進の學者三宅宗悅氏は、從來ベルツ博士などが「奄美大島人の毛深いのはアイヌの混血のためである」といつた古い說を覆して「それは却つて日本民族の原種に近いためである」とさへいつてゐる。

然らば昔から土地の人は如何に解してゐるかといふに、之は開闢神話の項に於て述べてあるやうに、祖神アマミキヨは東方より最初沖繩島の東岸久高島に渡來し、それから向ふ岸なる玉城に繁榮し漸次全島に廣がつたといふ傳承と信仰になつて居り、島民は「東御廻り」と稱し民族發祥地の玉城村方面へ巡禮をする風習がある。

而して最も早く琉球民族の日本渡來說を唱道した人は新井白石でもなく、二百五六十年前「疲弊琉球復興の礎を築いた向象賢」で彼は、

此國人生の初は日本より渡りたる儀疑無御座候

といつてゐる。西歷一千八百五十年（嘉永三年）琉球を訪問した英國ヴィクトリヤの僧侶は「琉球

人は日本から移動して來たものであるから、其の人相、容貌、風俗等非常によく似て居る」と觀察し、更に嘉永六年に來たペリー提督の記錄にも「琉球の言語、衣服、道德、習慣は日本のそれと合致して居り、殊に言語や人種學上から最も滿足すべき證左を提供して居る」と記してゐる。

六、沖繩方言

明治四十二年來縣調査した言語學者亀田次郎氏は、次のやうに發表してゐる。

沖繩語は熊本語、鹿兒島方言などといふ如く只地方の方言に止まるので、一寸我々が沖繩の言葉を聞けば全く日本內地語とは別種のものの樣な氣がするけれども能く研究すれば何等の差異もないのである。只沖繩の土地は大海中の島嶼であり且從來他の土地との交通も開けなかつた結果其地だけで變轉發達をなし一種特異の言語の如く耳に感ぜらる樣に至つたのである。

又仝年來縣した金澤庄三郎博士は

日本語で東をヒンガシといふのは、日に向ふの意味であるから日本人は東に向つて進んだことがわかる。又ニシ（西）といふのはイニシ（往にし＝過去）といふことであるから自分達が通つて來た所といふ意味である。沖繩語で東をアガリ、西をイリといつてゐるが之は太陽の出入りをいふのは論ずる迄もない。然るに北のことをニシといふのは妙なことの樣に思はれる。之も前にいつた通りニシはイニシ（過去）といふ意味であるから、之によつて沖繩人が北より南に向つて進んだことが明かである。更に沖繩人が大和民族であるといふ第二の證據は沖繩語の名詞を研究すると分る。沖繩で城のことをグスクといつてゐる。グは敬語の御で、シクは朝鮮語の村（スキ）、敷島のシキと同意でシは住、キは圍即ち圍の中といふ義で高い所に在つて石の壁で取卷かれて居る所といふ意である。之で沖繩は敷島の一部分であることは爭ふべからざる事實である。歷史がなくとも、傳說がなくとも、記錄がなくとも、神話がなくとも、沖繩人の祖先は日本人のそれと同じくシキの內に住んで居たことが證明される。云々

又大正九年來縣した言語學者大阪醫大講師北里闌氏は、

目を閉ぢて時と所を忘るれば
　神代に近き聲の聞ゆる

と、現在沖繩語の中に、我が神代及び上古の言葉の尠からず聽取されることを詠じてゐる。事實

沖縄方言中には古記萬葉の古い言葉が隨分殘つてゐる。明治初年琉球の三司官を勤めてゐた宜灣朝保氏は「古事記萬葉集等を見るに日本上古の言葉爰には今も多く殘れり」といつて之を比較輯錄して居る。（仝氏及伊波文學士採集の中より例をあげる）

あけづ（蜻　蛉）　いめ（　夢　）　いくところ（幾　人）
はびる（　蝶　）　とぬち（殿　内）　ぬうじ（　虹　）
なね（地　震）　わ（　吾　）　た（　誰　）
よこし（讒　言）　たねね（男　根）　くそまる（糞　まる）
ししばり（　尿　）　つびる（　尻　）　しし（　肉　）
ほそ（　臍　）　よむ（算　へる）　なす（產　む）
かなし（愛する）　しただみ（しちゃだん）　なへぐ（蹇　ぐ）
さくり（　咳　）　ことい（牡　牛）　かぶち（枳　棋）
ゆひまはる（雇　廻る）　さだる（先へゆく）

沖縄語の音韻　沖縄語は大體ア、イ、ウの三母韻より成り、エ、オの二母韻は短母韻としては殆んどなく、エ列はイ列に轉じ、オ列はウ列に轉じてゐる。つまり標準語が開口音であるのに比べて沖縄方言は口を閉ぢてエをイに、オをウに發音するのである。しかし日本の古語に於ても古記や萬葉では黄金（クガネ）上つ毛野、春の野、小野、石に躅り（ふれ）など同じ傾向が見える。之を分りやすく説明すれば、五十音圖中のオ列即ちオコソトノホモヨロヲはすべてウ列のウクスツヌフムユルウに發音する。

奥（ウク）　御（ウン）　鬼（ウニ）　紺（クン）　腰（クシ）　箱（ハク）　損（スン）　磯（イス）
底（スク）　星（フシ）　門（ムン）　粉（ムミ）　下（シム）　夜（ユル）　色（イル）

の如く、又エ列即ちエケセテネヘメエレヱはすべて之をイキシチニヒミイリヰに發音してゐる。

繪（キ）　緣（キン）　毛（キ）　酒（サキ）　千（シン）　癖（クシ）　念（ニン）　稻（イニ）　目（ミ）
飯（ミシ）　嫁（ユミ）　蓮（リン）　面（ミン）

次にア、イ又はア、エの二重母韻が約つた場合はイェーと發音し、エの長母韻に變化する。

藍（イェー）　相手（イェーティ）　貝（ケー）　世界（シケー）　三階（サンケー）　厄介（ヤッケー）
細工（セーク）　大工（デーク）　代價（デー）　内法（ネーホウ）　前（メー）　八重（エー）

歸る（ケール）　毎日（メーニチ）

又ア、オの二母韻は單にオーといふ長母韻に變る。

青（オー）　青山（オーヤマ）　青草（オークサ）　竿（ソー）

次に著しい特徴としてはツ、キの二音は首里などの正音を除き殆んど全島に渉りチに發音してゐる。

罪（チミ）　鶴（チル）　綱（チナ）　土（チチ）　君（チミ）　菊（チク）　角（チヌ）　金（チン）

岸（チシ）　先（サチ）　秋（アチ）　浮草（ウチクサ）　月（チチ）　引き（ヒチ）

猶ほ奥羽地方と同樣カ行をロ蓋化してチャ行に發音する。

東京（トーチ・ー）　教員（チ・ーイン）　烏賊（イチャ）　舊（チュー）　客（チャク）　石川（イシチャー）

等例多く其他は餘りに煩はしいから拙著沖縄案内參照せられたい。

七、懷しい沖縄と宣傳的な琉球

他府縣では琉球といつた方が通じが早いけれど、縣内では沖縄と言はねば一般には通じない。

琉球とは封建時代の琉球國とか琉球藩とかいふ總稱的名稱或は其の時代の文化を指す琉球美術工藝とか琉球音樂舞踊とかいふ場合に使用せられ其他は主島の名をとつて沖縄と呼ぶのが普通である。然らば此の二つの名稱は如何にして起つたか？幣原博士の「南島沿革史論」に據ると、

「琉球の名稱は今より一千三百年ばかり昔隋の煬帝（やうだい）の大業元年に海師何蠻等が東方海上遙に煙霧の氣あるを見て之を奏上したので、仝三年帝は羽騎尉朱寛に命じて何蠻と共に東海に航して國を求めしめた。朱寛等果して波濤の間に島影を發見し、其の形蟠旋蜿蜒恰も虬龍の水中に浮遊するに似たるを以て始めて之を流虬と名づけた。其後轉じて流求となり、唐時代には留求、流球、流鬼などと書し、宋の時代には流求に復し、元の世祖の至元年中瑠求となしてゐる。

然し今では此の元時代迄の流求、瑠求などは何れも台灣島を指してゐたものであるといふのが學界多數の說になつて居り、前記幣原博士（前台北帝大總長）御自身さへ最近の著述「南方文化の建設へ」の中に之を肯定して居られる。

要するに、五百五六十年前、明の太祖の洪武年間此の方「琉球」といふ文字を使用してゐるのは此の沖縄を指してゐることは議論の餘地はなく、それ以前の名稱は台灣のことであらう。

餘談ながら袋中上人は「日本より琉球を呼びて右流間の島といへり千載集に

おぼつかなうるまの島の人なれや
わが言の葉を知らず顔なる

大貳三位の狹衣に、右流間の島とあり、下紐にうるまの島とは琉球なりとあるにて明かなりと、琉球語にて「うるま」とは珊瑚礁の意「うる」珊瑚枝石、間は島の意にて慶良間、池間、來間、多良間等十指を屈すべく、波照間も「果てうるま」の意であらうといはれてゐる。昔から當地の人々も自分の島の名を「うるま」と稱してゐる。國頭親方朝齋の詠める和歌のはしがきに「四月二十四日福州へ立ちかへりけるに、わがうるまの友とち鳳山橋といふ所に出でむかひ北京のことを問ふに」とあるにても知ることが出來よう。

偖て沖繩の名稱が史上に現はれたのは奈良朝時代孝謙天皇の天平勝寶五年（皇紀一四一三）の冬、遣唐大使藤原清河、副使大伴古麿、吉備眞備、僧鑒眞等が唐より歸國の際、海上暴風に遇つて阿兒奈波島に漂着したと見えてゐるのが其の嚆矢であるから、兩者の時代を比較すると琉球の名の起つた大業三年は、百四十六年古いことになる。しかし其の始見を以て直ちに之を判定することは必らずしも妥當ではあるまい。兎角其の名稱の上から見て琉球は唐名であり沖繩は和名であることには異存がないわけで、島人自ら古來沖繩と傳承してゐるのから見れば、寧ろ沖繩が古い名稱であらうと思はれる」といふのである。而して沖繩の語源に就いては未だ適確な說はないが、九州南端、薩摩灣に近い島を「口之島」「口之永良部」などと稱へるのに比して、もつと南の島に「沖の永良部」など「沖」の文字を冠してゐるのから考ふれば「沖繩」も「沖の島」といつたやうな意味であらう。

八、行政區劃と沿革

沖繩縣は現在人口六十萬に近く、出稼者を加ふれば凡そ七十萬で地域は二市五郡に分れてゐる。即ち縣廳所在地たる那覇と、舊都首里とが市で、此の外に島尻、中頭、國頭の三郡が沖繩本島にあつて、宮古、八重山の二郡は台灣との間に二群島をなして居り、五郡は更に五町五十ケ村に分れてゐる。之を郡別にすれば、

島尻郡――一町二十三ケ村（內八ケ村は離島）

中頭郡＝十一ヶ村（何れも沖縄本島）
國郡頭＝二町八ヶ村（一ヶ村は離島）
宮古郡＝一町四ヶ村（内一町二ヶ村は宮古本島、二ヶ村は離島）
八重山郡＝一町三ヶ村（内一町一村は石垣島、二村は離島）

沿革　九州台灣間に羅列せる數十の島嶼は所謂琉球列島で、古來總稱して南島といつてゐる。而して島彙に依つて之を大隅群島・吐噶喇群島・奄美群島・沖縄群島・先島群島の五つに分ける就中奄美・沖縄・先島の三群島は古へ琉球王の所轄であつたが、慶長年間奄美群島は島津氏の所領に編入せられ、爾來沖縄・先島の二群島を以て琉球國の分域と爲し、以て現今の沖縄縣となるに至つた。

大島七間切、鬼界五間切

徳、永良部、與論、那覇の地の内（琉歌）

といふ古歌は當時の有様を詠んだもので、泊地頭職は大島諸島を管掌してゐた。

由來沖縄島及附近の離島は昔から首里府の所管であつたが、今より六百年前南北朝の頃より、

五百年前室町時代迄一世紀の間は、中山・南山・北山に分裂し、中山王は僅に首里、那覇附近と中頭の全部を領するに過ぎなかつた。

三山統一後も琉球王を一に中山王と稱してゐるのは此の歴史を物語つて居る。南山・北山を山南・山北といふのは支那式の呼稱法で漢文等に使用せられ、琉球を三省に區分して山南省・山北省・中山省と呼んでゐた、但此の場合の「山」は「島」の意で、つまり、島南省、島北省といふ意味である。

偖て今日の「村」は昔「間切」と稱し、今日の「字」を「村」と呼んでゐた。昔の「間切」は今日の「村」の二倍大位の地域であつたから、小さい郡に相當してゐたわけである。それが長い間に凡そ一間切が二つに分割せられてゐる。現今の村でも大低人口一万以上のものが多く、二萬内外の村も尠くない。それからすると昔の間切は、今では人口二萬三萬位の地域で矢張り一郡といつてもよい。又昔の「村」即ち今日の「字」でも普通百戸以上二三百戸、多きは五六百戸以上に及ぶものもあるから本土の一ヶ村に匹敵するものが多い。

抑も間切には古來「按司」といふ領主があり各々其の城地に割據してゐたが、四百年前尚眞王

は中央集權の制を布き、各間切には「按司掟（あんじおせて）」といふ代官を派遣して之を治めしめた。慶長年間より之を廢し、人民中功勞ある者を拔擢して「地頭代」を置いて間切の行政を司らしめ、置縣後も之を踏襲してゐたが、明治三十年に至り之を廢して「間切長」に改め、更に明治四十一年より町村長と改稱することになつた。

九、偕老同穴

琉球の墓は個々人の墳墓ではなく、一家一族の納骨堂といふ方が妥當で、下村海南先生の予に書き遺されし歌に左の一首がある。

赤瓦の軒並つづき倉のやうな
墓ちらばれり船那覇に入る

沖縄の墓は凡そ平地に築くのでなく、多くは自然の岩層を横に掘拔くのであるから、那覇附近など景物よろしき丘や森は皆墓だらけになつてゐる。祖先崇拜固より結構ではあるが、最早斯うなつては、大に反省し考慮する所がなければならぬ。田舍の墓は農閑を利用して自力で掘るのを普通とするから大金は入らぬけれど、都會地などではさうはゆかず何時の間にか一つの流行となつて次々と立派なものを營む習俗が出來、二三千圓以上の工費を要したものも尠くない。

沖縄では今の處火葬を忌むので、遺骸は棺に納めて墓内に置き、數年の後屍骨を洗ひ淨め、之を骨甕又は陶棺に入れて墓内の壇上に並べる。夫婦は遂に同じ甕に收まるのだから所謂、詩經の文字通りに偕老同穴の契を完うすることになる。

抑も墓のことが史上に現はれたのは六百五十年前英祖王が浦添城下に墓を築き極樂山と稱したとあるのが其の濫觴であり、之とても元は天然の洞穴を利用したもので後世になつて石壁を積み入口を設けたものらしい。現に縣下の津々浦々には自然の洞窟を使用した跡が著しく多い。著者が縣下全般に亘つて其の發達狀態を觀察する所では、古く第一期の墓とも稱すべきものは主として珊瑚礁など自然の洞窟を利用したもので、運天の百按司墓（ももやだ）一帶が其の好實例である。古生層等適當な地物のない地方では雜木林等に風葬してゐた所もあつた。次に第二期ともいふべきは、此の自然洞を奥へ掘つて廣めたり、又は前面に木戸を立て或は石垣を積んで近代の墓のやうに入口を設けたもので、今でも多く村墓、模合墓、一門墓になつて居り、之も運天や縣下到る處にある。

第三期と見るべきは、岩層又は斷層を横に掘拔いた儘何等飾り氣のないもので之は人口繁榮の結果村墓から分離して一族又は一家で墓を持つやうになつたものと見てよい。但之には間口を廣く奥迄方形に掘拔いたものと、入口は細く開けて內部丈け廣くした近代式のものと二通りある。

次に第四期とも稱すべきは其の構造法に於て最も進歩した亀甲式の墓である。之は掘拔式の上部を亀甲型に丸め、周圍や前面に技巧を施したもので、凡そ二百年程前蔡溫時代から流行したものといはれてゐる。外形は全く南淸廣東あたりの墓の模式をとつたもので、之を女陰の象徴と爲し、元に歸るの意だと解するは民間說であると思ふ。或は原地の廣東あたりでさういつてゐるかも知れぬ。それから亀甲式の外に家形式又は摶風型といふのがある。之は多く掘拔に適せざる土地や平地などに築かれたもので一體に新らしい構造と見てよい。

偖て此等の墓は大體生前の住民即ち人家に模したもので、時代の古いのは石で柱や廂、垂木の型を作つたものもあり、又尙侯爵家の靈御殿のやうに石造摶風の屋根に板葺の形式が施されて居り、しかも垂木が二重に表はれて二階の趣をなしてゐるのは板葺時代の首里城正殿を模したものであらう。

次に墓內は凡そ上下二三段に分れ、上段中央には始祖、左右は夫々世代の順に骨甕を配置し、下はシルヒラシ（液干らせの意）と稱し洗骨する迄骨を枯らせる所になつてゐる。

一〇、琉球の開闢神話

我が國の神話に依ると、天地開闢の始、天上の高天原に、天之御中主神といふ神樣がお出になり次に高皇產靈神、神皇產靈神の二神がお生れになつた。是れ即ち造化の三神である　或時造化の神は伊弉諾神、伊弉冉神に向ひ「あの漂へる國を固めなせ」と仰せられて、天之瓊矛をお授けになつた。二神は天の浮橋の上にお立ちになり、其の矛で海の中を搔き廻してお引上げになると、潮水が矛先からぽたり〳〵と落ちて大八洲の島々が固まつたといふことになつてゐる。

所が、之と同じやうな神話が昔から此の沖繩島にもあり、おもろさうしの中に「むかしはじめからのふし」として採錄されてある。

之を譯すると大體次のやうな意味である。

昔初まりに、日の大神樣があつて八紘に照り輝いていらつしやつた。或時日の神樣が、俯して

下界を見給ふに、どろ／＼として島にならうとするものがあつたから、即ちアマミキヨ、シネリキヨ二柱の神に詔して島を作れ、國を作れと命ぜられた。二神は詔のまに／＼降臨して多くの島々をお作りになり、次に地上の國つ民を作れと仰せられた。

此のアマミといふ名は奄美と同語で、琉球の人の祖先が九州より大島を經て渡來したことにも考へられ、又大分や德島あたりの海人部と同義語であらうともいはれてゐる。

一一、琉球の古神道

文學博士折口信夫氏は「琉球神道は內地の古神道と殆んど一紙の隔てよりない位に近い」と言つてゐる。琉球で氏神を祭つてゐる御嶽こそは實に佛敎の影響を受けなかつた以前の本土の神道の姿を如實に現はした神籬、盤境のそれに當るもので、之を地方の御嶽に當て嵌めるなら、イベノ前と稱して一般民衆の禮拜所になつてゐる所は今日の神社の拜殿に當り、御嶽の中にあるイベ即ち神聖なる神職のみの拜禮する場所が神殿に相當するのである。而して御嶽の自然木（神木と見做さるる蒲葵又は其他の大木）がヒモロギの原形と思はれるのであるが、神殿に當るイベは多く石を圍んで神の在所としてゐる。イベとはイミ（齋み）が轉訛してイビとなつたものであらう。現在沖繩方言ではイビと發音して居り之を字に書いてイベとしてゐるのである。此の盤境即ち石をめぐらして神座としてゐるのは首里城內眞玉森でも城外園比屋武嶽や中城城內各拜所又は今歸仁城內天繼之嶽そへつぎの嶽でも手近に見ることが出來る。

此の御嶽も首里那覇の拜所中にはいつしか內地の神社と其の形式を同じうする傾向を示してゐることは前記園比屋武嶽と辨之嶽のイベノ前に永正十六年（皇紀二一七九）八重山竹富島の人西塘をして石門の拜殿（二箇所共國寶に指定せらる）を築かしめて居り其他首里金城御嶽等のフェーディン（拜殿）を見てもわかる。彼の三輪神社では今でも神殿を設けず山頂の靈地を以て之に相當するものとし神の降臨し給ふ所と爲してゐる。之は本縣の御嶽に最も近い形式といふべきである。神社建築も佛敎の渡來後次第に其の建築の影響を受けて今日の如く完備の域に進んだのであらうが、古神道に遡つて見れば南島の御嶽は正に其の原形と見るべきものではあるまいか。

西洋人は山川草木を是れ物質だと輕視し、自然を征服することを文明と思つてゐる。しかし日本人は昔から山川草木、禽獸蟲魚にも神格を認め、神の造り給ふた此等の物を通して、神の尊さ

忝けなさを拜し隨つて山川草木をも禮拜してゐる。之が大和民族の神性であり神族たる所以である。崇嚴雄偉なる富士山を征服するなどといふ不遜な心境は日本人にはあり得ないのである。大和民族は古來富嶽の氣高さを拜んで神の御姿とし眞善美の情操が養はれて來た。大自然を畏れ之を尊敬し之を崇拜するのが日本精神である。西洋人のやうに個人主義、自由主義で唯我獨尊的に人間が偉い、否個人が尊いといつたやうな態度とは雲泥の相違といはなければならぬ。本縣に於ても部落の公事としては昔から御嶽を神社（或は氏神とし或は國魂の神 として尊敬し、ノロをして祭祀を行はしめて居り、一面又私事としては祖先崇拜をなし常に報本反始の志情を盡してゐる

南島では古來一貫して女人を神祭りの司人（つかさびと）としてゐる。之は今日の神社制度と比べたら符合しないやうであるけれども古くは人皇第十代崇神天皇の六年皇女豐鍬入姫（とよすきいりひめ）命が長くも 天照大神を大和國笠縫邑に祭られ、神器を遷させ給ひ始めて神宮と皇居の別を分たれたとあり、後第十一代垂仁天皇の御代に皇女倭姫命を笠縫に遣して代らせられ更に御鏡御劍を伊勢の五十鈴の川上に御遷し奉らせたとあり即ち今日の皇大神宮の起原になつてゐる。此の史實から見ても我國上代は女人の方が神の司を奉じて居られる。古事記の天岩屋戸開きの條を見ると天宇受賣（あめのうずめの）命が、天の香具山の日蔭の蔓（かつら）を襷に執り、眞拆（まさき）の蔓を髮飾とし天の香具山の笹葉を束ねて持物に執り、岩屋戸の前に空の槽を伏せて其上で踊つたとあるが、最近に至るまで琉球列島の女の神司人は頭に蔓を卷いて祭祀や神樂をなしてゐた。筆者は伊計島の神祭で事實之を見たことがあり、又其の蔓は神アシアゲの屋根に匐（は）つてゐた。現在は本島内では容易に之を見ることが出來ないけれど僻地又は離島の神祭りでは今に遺存してゐる風俗である。

それから琉球諸島（奄美大島以南）の司人が現在に至るまで勾玉を佩用又は捧げ持ちて神祭に臨んでゐる事實は全く上古以來の日本風俗其儘であり、神代の姿が眼前に展開せる驚くべき現象といふべきである。其の外南島では近代迄處女が米を噛んで神酒を釀してゐたことや現今でも七五三繩を御嶽や產室などに張り巡らして淨めとしたり、笹の葉などを束ねて魔除けの祓ひに用ひたりしてゐることなど執れも上古の遺風であらうと思はれる。

一二、出產の土俗に現はれたる我が國上代の遺風

神代の昔、豐玉姫が御產の時、產殿未だ成らざるに早や皇子が御生れ遊ばしたので鵜茅葺不合（うがやふきあへず）

尊と御命名になつた。此の方が神武天皇の御父君に當らせ給ふ彦火々出見尊である。古語拾遺に彦瀲尊の誕生のとき海濱に室を立つ。時に掃部連の遠祖、天忍人命供奉て侍り、箒を作り蟹を掃ふ。仍て職と爲し、號して蟹守と曰ふ。今俗に掃守なる者は彼の轉ぜしなり云々

とあるが、彼の萬延元年櫻田門外に於て水戸浪人の爲めに刺殺された大老井伊掃部頭直弼の掃部頭は即ち此の蟹守の職に出發した名稱が殘つてゐたのである。此の古事に因るお產の時產家を河海のほとりに建てた風俗は昔琉球でも行はれてゐたと見え、今より六百年前嘉曆三年玉城王の子西威が久高島で生誕した時、母方なる外間家の庭に產家を設けたといふので、其の家が數年前迄一間方き產家位の低い瓦葺の形になつて遺存してゐたのであるが、近年心なき人々が此の由緒深を毀して神殿風の建物に改めたのは惜しいことである。

現に琉球諸島に於て姙婦ある家で、家を葺く時はお產の濟む間屋根丈け葺き殘す習俗のあるが如きは、葺不合の故事と相通ずる古俗ではあるまいか。又赤子が生れた時蟹を三疋捕へ來つて、裸襁の上から匍匐せしむる琉球土俗とを見比べたなら思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

それから臍を切ることを「つぐ」と呼ぶのは言靈の幸ふ國では「切る」といふ緣起の惡い語を避けて「つぐ」と稱へて居り、之を切る時竹篦で三度かたをつけて後刄物で切取ることなども上代竹篦で切つたことを示して居り、臍を結ぶ糸は必らず麻又は苧麻を用ひることも同樣で後世外國から移入された木綿糸の如きものを用ひない所に祖先の傳統がある。麻が神事に用ひられてゐる事實から見ても其の最も古い纖維植物たることが推察される。

次に產兒の命名式の時、南島では男の子の時は桑の弓を作り、庭前に箕を立てて的と爲し之を射返して武運と狩幸とを祈り、女子の時は紡績具を備へ或は假植したオホバコを鉏で掘返す行事をして紡織と農の祈りをしてゐることも上古の習俗に違ひあるまい。甚だ長れ多い御事ではあるが昭和八年十二月二十三日　皇太子殿下が御降臨遊ばした日、宮中に於て御浴湯の儀を行はせられた。此の時の讀書鳴弦の御模樣を伺ふと、御浴殿の帷幕の前に於て白絹の御垂布の內で御產湯を召されるとき、讀書の本役文學博士市村瓚次郎氏が日本書記紀卷五の最も御芽出度き一節を朗々と拜誦し、鳴弦の本役海軍大將有馬良橘、子爵大給近孝の兩氏は弓弦を鳴らし、いとも嚴かな御儀式が行はせられた。とあり、市村博士の謹話に依ると、此の御儀は文武二道の御昌運を御祈念する意義深い御式で、弓矢は昔から第一の武器として重んじ、其の弦音のみでも惡鬼の魂を奪

ふと信ぜられると申してゐる。民間で弓を射るのは狩獵の祈とも解せられてゐる。かういふ上代の風俗が、九重の雲の上に傳はつてゐるのは實に恐れ多い極みである。

猶ほ南島では、子が生れた時川一つ隔てた所へ子供の生れたことを知らせるのに男兒なら「大女」といひ、女兒なら「大男」と反對にいふ習恰があり、之は惡魔に氣附かれぬ爲めにアベコベに言ふのだと傳へられてゐるが、之も亦我國上代の遺風らしく、今でも高貴な方々は男子の御方でもお少さい時は御髮も女兒のやうにオカッパで、御衣服なども振り袖又は元祿袖で女子の樣な御服裝を召される習慣になつてゐることなど恐懼に堪へない程の類似と申すべきであらう。首里城内でも藩政時代は矢張り男兒を女裝させたといふことであるが、之は土俗學的に申すと惡鬼に用心する上代の遺風であると恐察してゐる。

それから南島の出産には「川下り」と稱する仕來りがあり今では穢れを洗ひ淨むることになつてゐるが、之は上古に於て産家から直ちに川へ下りて母子共御禊して淨めたのが起りで、赤子を先に洗つて草の上へ寢かせ、次に母が行水をした古俗に出發し、其の間に蟹が赤子の上を這つたことが緣起になつたのではあるまいか、兎に角河海のほとりの産家を象徵する行事である。久高

島では産婦は一週間の間冷水で全身みそぎをなし、而して焚火に暖をとる風習が遺つてゐて上代の俤が最も髣髴としてゐるのである。

一三、面白い蛇除けの呪禁

新時代に相應はしくない題目ではあるが、本邦民俗學資料として爰に記して見ることにする。左に揭げる「蛇除け」の呪は若い時分に首里總地頭家の守役を勤めたといふ伯父から、山中蛇に出遇ふ時、一息に三遍口誦したら蛇除けになるといつて口授せられたものである。

一、藤原々々、除けなれ、さいなれ、蛇なら打ち据ゑ、うち曲げよう、ぐゝんじゃー、ちゅーぶー、かちしんて、千手觀音、あや斑、あや斑、吾が行く道に立つならば、山邊のあるじに語て聞かさうや、儀方。

之を解けば「俺は彼の三上山の大蜆蛭を射た弓の名人、田原藤太藤原の秀郷だぞ、除けどけ、毒蛇なら打ち据ゑ、打ち曲げるぞ（……不明……）吾が行く道に立つならば山の神樣に訴へてやるぞ、儀方」といつたやうな意味である。儀方とは佛語で、舊曆五月五日の朝、叶の文字を紙に認

め逆さにして柱に貼り付けて置くと蛇除けになるといはれてゐる。

猶ほ曩の呪文と大同小異のものも可成りにある。

一、あや斑、あや斑、我が行く先に立ち居らば竹鞭言世持つちょんどー、すぐゆんどー、叩ちゅんどー、除けなれ側なれ、儀方。

之は著者が大正十一年六月下旬沖縄縣廳在勤中、縣廳雇人ハブ捕專門の棚原翁（六十歳位）より採集した呪文である。次に

一、ぐわんじゃー、じゅーぶーかち、ちじゅくえんくわねん、ねんぴ觀音力、じんせう、じーいく。

多分之は佛教の經文より來た訛りであらう。一息に五回乃至七回繰返すといふのである。又

一、白佛言世尊儀方

を五回乃至七回繰返して誦するもよいといはれ、屋敷の四隅に立てあるのを見受けたこともある。

もう一つ此等と同一系統の本土の呪文を擧げるとこんなものがある。

一、蛇よ、蛇よ、鹿の子まだらの蟲ならば山さつ姫に、かくと語らん

一四、古事記と琉球の葬儀

本邦考古學の權威であつた故喜田貞吉博士は本縣古風の墓を調査して其の構造、外觀は我が國上古の横穴式古墓と同一であるといはれ、大寶令第九條に凡そ皇都及道路側附近葬埋を營むを得ずとあり、第十條に三位以上及分家の氏宗は墓を營むことを得るが、それ以外は該當せずとあつて庶民が一々墓を造ることを禁ぜられたのである。然るに琉球では一々墓を築いてゐるから南島の民は恐らく大化改新以前に本土より移住したものと思はれるといつて居られた。縱穴式横穴式が所謂墓で、武藏の人穴なども以前は穴居時代人の跡と思はれてゐたが今日では此の横穴墓といふことになり、現在內地に行はれてゐる地下に埋めて土を盛上げるのは寧ろ塚又は墳に相當するといふことであつた。

古事記に據ると、伊邪那美尊がおかくれになつた後伊邪那岐尊は女神にお逢ひになりたく思し召して黄泉國へ御行きになり「いとし我が妻の命よ、私が御身と共に作つた國はまだ出來上つて居ないから今一度現世へ歸つて下さい」と仰せられた。女神が御答にならるゝには「あゝ殘念なこと、速くお出にならないで、私はもう黄泉國の竈で煮た物を食べました。兎も角黄泉國の神に議

つて見ませう。其の間は決して私の姿を御覽下さいますな」と申して奥の方へ行かれたが、餘程長くたつても出て來られぬので男神は御角髮にお挿しになつてゐた爪櫛の親齒を一本闕き取つて一火を燭して中に入り御覽になると、蛆が湧き御身體中に雷が居り御樣子が餘りに恐ろしいので男神はお逃出しになると、女神は黄泉國の醜女を遣はして追つかさせられ、男神はやう〳〵黄泉ひら坂迄逃げ延びて來られた。女神は怒つて「いとし我が夫の命よ、あなたがそれ程になさるなら私は貴方の國の民草を一日に千人づゝ絞め殺しませう」と申された。男神は「いとし我が妻の命よ、御身がさうするなら、自分は一日に千五百の産家を建てよう」と仰せられたといふことである。

此のお話にある「黄泉ひら坂」といふ言葉のヒラとは現在琉球語で坂のことを言ひ、或は續けてヒラ坂とも呼んでゐる。正しく神代の言語が南島に生きて居る。又失くなられた女神の御姿を今一度見に行かれたといふことは、南島で死人を葬つた翌朝もう一度墓を開けていとしい肉親の顏をのぞいたらしい。それは「翌朝見」といふ言葉に殘り今は翌朝御墓參りをすることを意味してゐるが、文獻としては球陽遺老說傳の中に「往昔知念間切安座眞村の大神宮といふ人年一百二十にして死す、葬後三日俗に隨つて開き視るに只木葉の棺に滿つるありて、其の屍跡無し、裔族以て神仙と爲し、祠を村内に建て毎年四月十八日之を祭る」云々とあり此の記事では三日間も見たことになつてゐるが、南島で特例ではあるが、二十餘年前迄も或地方で五六才になる少女の屍體を翌朝母が墓を開いて抱いたといふ事實さへある。又未婚の若い男女が死んだ場合月夜など同輩の若者が墓を開けて歌をうたひ送別をしたといふ傳承もある。

此の翌朝見に於て死人が甦生してゐた事實もあつたらしい。蘇生の例としては琉球國舊記並鄧氏家譜の序に昔時兼城按司の一女子年十六の秋八月逝去し之を金峰（現在島尻郡南風原村國民學校の前方運動場より南十間餘の地点にあり）に之を葬つた。次後三日安平田なる一青年牛を牽いて墓邊を過ぐる時俄かに雨に遇ひ、暫時墓前に雨よけをしてゐた處墓の中より少女が手を出して安平田の髮をつかみ「吾は兼城按司の娘也寢睡の中に此に葬らる、早く吾家に報ぜよ」と賴んだので安平田は之をお城へ報らせた。家人は外間崎より桑枝及薄を取り來つて妖氣を祓つて連れ來り、後安平田を婿と爲した。國主此事を聞きて賀事と爲し以來王殿以下を桑薄を挿して妖氣祓となし、赤飯を炊いて祖先の靈前に供へることが風俗になつたとある。是れ南島に於ける舊曆八月九日の「柴挿し」の起原になつてゐる。

前記古事記の記事と思ひ合せ斯うした古俗の上から考察して我國上古に於て葬後墓を開き見る風俗のあつたことが領かれるばかりでなく、又墓の構造に於ても今日の土葬では到底翌朝見の俗は想像もつかぬのであるが、南島の横穴墓や自然の洞窟を利用した古墓に於ては首肯せらるゝことである。

此の兼城按司の家では恰度巫女に托して亡き娘の魂を招いて「亡者の口寄せ」を行つてゐる最中に蘇生の通知に接したとあるが、亡者の口寄せといふことも亦我國上古の遺風である。

一五、三線の地質より成る琉球アーク

九州台灣間に連鎖せる琉球列島は、三線の地質で縱貫されてゐる。

第一線は霧島火山脈で純然たる新火成岩を以て形成せられ、霧島山より櫻島・開聞嶽・硫黄島・諏訪瀬島・鳥島等より粟國島・久米島を經、台灣北部の大屯山より澎湖列島を貫いて南支那海に達する弧線即ち東支那海の内弧であり、

第二線は古生層の脈で中央線に當り大隅半島より屋久島・大島を經て沖繩島の大部分なる國頭郡全部及び中頭郡北部より石垣島を過ぎて台灣の中部に連なり

第三線即ち弧の外方太平洋面は、第三紀層で、日向の都井岬より起り、種子島・喜界島より沖繩島の東南に至り宮古の島々、西表島・與那國島等を經て台灣の東南部に達し、更に大陸へ續いてゐる。

沖繩島は南北蜿蜒四十里、恰も虬龍の洋上に浮べるが如く、船上より之を望めば頗る低平な感じがする。殊に那覇へ上陸すると、隆起珊瑚礁の丘は此處彼處に見えるが、附近には山らしい山が一つだに見えない。それが爲め全島が珊瑚礁であると早合点をしたり、或は全然山岳のない平坦な島であるやうに誤解する人が尠くない。然るに那覇より北へ六里、中頭郡の北部から國頭郡にかけて三十里の地域は殆んで山地で嘉津宇岳・恩納岳など海拔一千五百尺内外の山が連亘してゐる。沖繩島は面積六十四方里の内國頭郡だけで四十八方里を占め、其の殆んど全部と、之に隣接せる中頭郡の北部とは古生層を以て構成されてゐる。此の地帶は山脈重疊して背梁骨の如く分水嶺をなし、地勢嶮峻にして割合に平地は少ないが河川の流れが多く、灌漑の便を有してゐるから米・甘蔗・甘藷等を產し、山地は山藍・茶及び果樹を栽培し、最も畜產に適してゐる。

次に中頭郡の中部より島尻本島にかけては第三紀層を以て形成され、其の周邊又は台地に隆起珊瑚礁が被覆してゐる。三紀層は方言でヂヤーガルと稱し、灰色の埴土で有機質に乏しいけれど保水力があつて旱害に抗し、蔗諸及び園藝に適してゐる。只餘りに粘着方の強いため耕耘には少からぬ努力を要する。島尻本島の東南部や中頭郡の讀谷山其他三紀層及古生層上に珊瑚礁の被覆した土地も可成りにあるが之は面積の上から見ると一小部分といつてもよい。

由來珊瑚礁は熱帶圏内なる南洋諸島が其の本場で、我國では台灣の南端に發し、琉球群島を經て奄美大島の喜界島まで延長數百里に及んでゐる。それより以北の屋久島・種子ケ島・薩南の十島などは僅に島の周邊に点成して居り、鹿兒島灣内の櫻島でも珊瑚の枝石が採集せられてゐる。珊瑚礁は有機質に乏しい赤色粘土で、俗に島尻眞地と稱し、比較的貧瘠ならず、蔗諸及び五穀の栽培に適してゐる。

此の珊瑚礁の土地には普天間權現や金武宮の洞窟の如き大鐘乳洞があつて、一大奇觀をなしてゐるばかりでなく、地下深く石階を下つて飲料水を汲む穴川があり、更に那覇波上や恩納村萬座毛、ザンパ岬の如き斷崖や一大高原があつて絶景に富んでゐる。

南島の訪客は、東京帝大の神保博士を驚嘆せしめた此の鐘乳洞や大高原の特殊的風光を賞することを忘れてはならぬ。

本縣管内で現に噴火してゐるのは鳥島だけである。此の島は德之島の西方で其の位置大島郡に近いのであるが、現在採集しつゝある硫黄は琉球より支那への貢物の一になつてゐた關係で慶長後も琉球に屬してゐるのであらう。

一六、日本本土との交通

續日本紀に據ると、天武天皇の白鳳八年十一月倭馬飼部造連を南島多禰に遣はされ、十年八月歸京して多禰の國圖を献じたとあり、

其の國、京を距ること五千餘里（當時の一里は今の五町にて凡そ一千六百里に當る）筑紫の南海中に居り、髪を切りて草の裳を着たり、粳稲常に豊かなり、一たび菑ゑて兩度收む、土毛は友子莞子及種々の海産物多し

とあり、多禰とは種子島のことであるけれども交通不便、地理不案内の時代であるから之は寧ろ

種子以南の島々の總稱と解すべく、然かも其の國情を書いた記事を見れば沖繩のことを指してゐるやうにも考へられる。

それから元明天皇の和銅七年（皇紀一三七四）十月太朝臣、遠建治等南島奄美・信覺（石垣）球美（久米）の島人五十二人を率ゐて歸來すとあり、翌年奄美・夜久・度感・信覺・球美の人々來朝して方物を献じたと見えてゐる。是れ沖繩屬島の名か史上に現はれた嚆矢である。

孝謙天皇の天平勝寶五年十一年遣唐使歸航の時三船共に阿兒奈波島に漂着し、十二月初南風に帆を揚げ大島をさして出帆したが、不幸にして一船は安南に吹流され、仲麿は此の遭難で遂に歸國を斷念し安南都護の職を奉じて彼の朝に仕へて世を終つたといふ。

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

之は彼が長い間彼地に留學してゐて、明月に望郷の念禁ぜず詠んだ歌らしい。其後鎌倉時代迄は日琉の交通もあつたやうであるが、後醍醐天皇の頃より彼我の交通疎隔したが、之より後明の宣宗は琉球王尙巴志を介して、日本の來朝を促したので、巴志は使を京師に遣した。同年十二月將軍義教は使者を明國に送り、其後琉使は屢々室町幕府に方物を献じてゐた。

嘉吉元年（皇紀二一〇一）義教は島津忠國が謀叛者足利義照を誅せし功に依り其の賞として南海十二島を忠國に加賜した。是れ即ち琉球が島津氏に隷屬した始である。其後琉球王は凡そ將軍及び島津氏へ慶賀使、謝恩使、年頭使等を差遣することになつてゐた。

一七、爲朝は果して琉球へ來たか

初めて沖繩の土を踏まるゝ客は、何方でも「爲朝がこちらへ來たのは本當か？何か確かな記錄でもあるのですか？」といふ問を發するのが普通である。それは當地で最初に編纂された「中山世鑑」といふ正史に載つて居り、それよりも猶ほ古くから傳說として信じて疑ふ者なきは勿論、爲朝が娶つた大里按司の妹姫との間に生れた一子尊敦は琉球國王に推戴されてゐる。

又運天港は爲朝が沖繩へ向ふ時暴風に遇ひ、船は將に覆らんとしたが「運は天にあり何ぞ懼るゝに足らんや」と舟人を戒め、やがて一地に安着したので、運天と呼ぶに至つたと傳へて居る。これは民間語原說かも知れないが、南山城下には大里按司の妹と邂逅したと傳ふる和解森と稱ふ

る遺跡が靈地として殘り、爲朝が出帆して歸國したといふ牧港も浦添城下にある。

斯ういふ當地の資料だけでは物足りないから煩瑣ながら簡單に本土の學者の說を摘記して見よう。新井白石は南島志の中に、

爲朝……祖業を復せんと欲し海上に浮びて遂に南島に至る。乃ち其地を普くめぐる。…遺孤南島中に在るあり、母は大里按司の妹なり……長ずるに及び推されて浦添按司となる。云々

重野博士の「薩藩史談集」には、

平氏の一族で阿多忠景といふ人が島津氏以前保元平治の頃肥前から來て薩摩の阿多に割據してゐたが、爲朝十六才の時父に追はれ、自ら九州總追捕使と稱して跋扈したのは阿多が之を壻とし其の案內者となつて九州を征略したのである。當時琉球なども阿多の屬下であつたから爲朝が後日琉球に渡ることも起るのである。淸盛が權を恣にした後阿多は薩摩に居り切れず遂に島々を廻り歩いてゐたが始終爲朝に扈從して居つたとある。そして其の手で年貢を取つてゐたといふ。…世間では義經の蝦夷落と同樣に虛であらうといふ說もあるが爲朝が琉球を取つたといふことは頗る事蹟のあることで義經の蝦夷落とは比較されず其の証據がある筋に見える。云々

天保時代の學者伴信友は其の著に、

「その島に爲朝が渡り來れるは阿多が琉球に在ることを聞き及びて渡りたるにてもあるべし」云々と述べ

重野・久米・星野三博士編の國史眼には、

忠景益々薩隅を侵奪し窃に爲朝を迎へ鬼島(鬼界)に航りて之に據る。…沖繩の土豪大里按司、女を爲に妻はせ遂に全島を服す……

又前台北帝大總長文學博士幣原坦氏は其の舊著「南島沿革史論」の中に

鎭西八郎源爲朝が保元亂に伊豆の大島に流され居常快々として樂まず、永萬元年船に乘じて西南に向ひ沖繩島に至りたるは最早隱れもなき事實と余は信ずるを以て玆には悉しくは言はず…と論じ、史家平出鏗次郎氏も亦爲朝渡來說を肯定して「爲朝の琉球に入りて王統を垂れたるは事實なり」と述べてゐる。

猶ほ爲朝が奄美大島に居たことや、琉球へ渡つたといふ口碑等は南島雜話及び奄美大島民族誌の中にも記載されてゐるが此には省略することにする。

著者の調査する所によれば舜天の孫義本王の裔と稱する一族が中城村仲順に繁榮して居り、又舜天の母方に當る高嶺村大里の西銘（にしめ）のろ（神職）及下茂（しも）と稱する舊家では今日でも年中行事として爲朝の遺跡を祀り且つ北方を遙拜してゐる。

一八、南島に於ける平家の遺跡

肥後の山中にある五箇庄が平家の後裔であることは誰でも知つてゐるが、亦薩南十島より大島宮古島・石垣島・與那國島に至る迄平家沒落の遺跡がある。

硫黄島の長濱村に「御前山御墓地」といふのがある。導かるゝ儘に赴いて見ると、之は驚かされたり、畏くも安德天皇御陵を始め御子隆盛親王、經盛公長男中納言經正公、資盛公長男吉資公參議業盛、佐野內侍、左納內侍御墓と記したみすぼらしい碑石が點在してゐる。

舊察長濱權十郎（資盛の裔と傳ふ）所藏の古文書等に依れば、元暦二年壇之浦に敗れた平家の一族は安德天皇を奉じて伊豫國高島に遁れ、更に日向國細島に至りしに源氏の諸勢南下するとの說に脅かされ、此を出でて大隅國志布志を經、遂に種子島に下つた。之より再び大隅の內之浦に歸つたが土地狹くして敵を支へ難きのみならず今や力と賴む士卒も多く落ち延び船も亦散亂したので、資盛は　天皇を奉じて曩に種子島の大江澄遐より聞いてゐた要害の硫黄島へ渡つた。

かくて防禦の手配をなし、資盛の本陣は西丘城に、越中次郎兵衞は尾崎城に、上總五郎兵衞は靑尾城に、福原相模守秀長は高丘城に各分營を設けて守備に任じた。然るに文治三年賴朝は天野造景、宇都宮信房を遣はして鬼界島に於ける平家の殘黨を征伐させることになつた。竹島に警戒してゐた福原相模守の從臣は海上に出沒せる源氏の船を認めたとのことで、硫黄島の平家方は相議して建仁二年資盛、時房、經俊、景光、盛經等は口之永良部、七島を經て大島に、淸房、忠綱は益救に、宗親、通正は黑島に遁れ、主頭白尾大膳太夫以下四十餘人は　天皇を奉じて硫黄島に留つたといふことである。長濱、日高、安永の諸氏はいづれも平氏の裔といふ。

竹島には高丘城福原相模守が遺した見張番の後裔日高氏があり、黑島の西北にも「平家の城」と呼ぶ無比の要害があつて宗親、通正兩將の據つた遺蹟とし、全地日高氏も平氏の後裔と稱へてゐる。

口之島も亦平家の籠つた所で肥後休右衞門が豐前より來りて全島「平家の城」に據つたといひ

肥後、日高氏等即ち其の子孫なりと傳へてゐる。中之島には大將有盛の遺跡があり、肥後、日高氏は全じくその後裔と稱してゐる。

之より南下して臥蛇島に日高、肥後氏があり、平島では小松大貳の裔と傳ふる日高氏、寶島では資盛の後裔と稱する平田氏があり、惡石島、諏訪瀨島にも平家の裔と傳ふる人々がある由。

大島本島では名瀨町より北方浦上村に名瀨、笠利兩間切を領有してゐた平有盛を祀つた「有盛神社」といふ小祠があり境內には其の墓がある。猶ほ奄美大島民族誌によれば諸鈍(しょどん)には西間切、東間切、屋喜內間切を領してゐた重盛の二子資盛を祀れる大屯神社及び其の墓があり、又戸口には古見間切、住用間切を領有してゐた行盛の「行盛城」「行盛神社」がある。

天文十四年（一二〇五）琉球王尙淸は新殿を建て祝女(のろくも)をして平家の殘黨を追祀せしめたといふことが文獻に見えてゐる。

沖繩本島には全然平家の遺跡と傳ふる所はない。或は當時琉球は源爲朝、其子舜天王といつた按配に源氏側の勢力が張つてゐた關係で避けたかは知らないが、遠く南方宮古島狩俣は平家落人の聚落だと言傳へてゐる。狩俣は海中に突出した岬角で、其の形狀恰も武具の狩俣の如く、現に

仝地の舊家には古刀一鞘を秘藏してゐる。

又八重山石垣島大濱村の北端平久保にも平家上陸の傳說があり、其の人々の墓を倭墓(やまと)又はヤシマ墓と稱して居る。更に南端の與那國島にもヤシマ墓又は大和墓と稱する古墳があるとのことであるが今は只傳承の儘に採錄して置く。

京都輸出織物檢査所長の武富喬氏の祖先は平氏であるが、八重山武富島（今は竹富と書く）に漂流し、德川時代に至つて本土へ歸還した緣故に依つて武富姓を名乘つたといふことである。

次の百合若物語が南海の孤島に傳はつてゐるのもかうした因緣ではあるまいか。

一九、百合若物語

尋常小學國語讀本卷四に、百合若と題して次の樣な傳說が採錄されてゐた。

昔、百合若といふ弓の上手な大將があつた。或年外國の軍勢が澤山船で攻め寄せて來たので、百合若は天子樣の御命令で大きな鐵の弓と矢を持つて之を打破つた。百合若の軍勢は凱旋の歸途綺麗な島を見つけたので、百合若は家來の雲太郎と雨太郎の兄弟を連れて上陸したが、疲れ

が出て三日三晩も寢込んでしまつた。

二人の家來は主人が寢てゐる間に惡心を起し、百合若大將を其の島に置去りにして國へ歸り、天子樣に百合若は討死致しましたから私達兄弟の力で敵をすつかり迫拂つて參りましたと嘘を申し上げ、二人共大將になつて立派なお城に住んだ。それから何年かの後、百合若は漁師に助けられ、髮も髯もぼう〳〵として顏も手足も垢に埋まり、まるで苦が生えた樣な姿になつて國へ歸り、雲太郎兄弟の家で苔丸と名づけられて養はれた。明くる年の正月に雲太郎兄弟が家來を集めて弓の會を催した時、苔丸が笑つたので、生意氣だといはれ、弓を射よと命ぜられた。苔丸は一番强い弓をへしをり、昔百合若が使つた鐵の弓を與へられて滿月の樣に引きしぼり鐵の矢を兄弟に向け「見忘れたか吾こそは昔の百合若だぞ」といつて仇を討つた。

之は室町時代の文學「幸若舞の詞」に收められてある百合若大臣を童話化したもので、元寇の亂の事件を取扱つたのだといはれてゐる。然るに此の物語が圖らずも、宮古島と八重山の間絶海の孤島「水納島」に殘つてゐることが、先年沖繩縣視學官平野薫氏に依つて發表せられた。

那覇より宮古本島へ百七十浬、更に之より又三十浬離れて八重山島即ち石垣島との間に多良間

島があり、水納島は其の北に位してゐる。戸數僅に五十、人口二百五十、島圍一里半、白砂を繞らし中央に綠の丘があつて眺めのよい神秘的な島であるが、此處では此の傳說の主人公をユリワカ大臣といつてゐる。今其の梗概を述べると、

昔ユリワカデーズといふ大將があつた。彼は寢ることが大層好きであつた。所が其の友達にウスワカと云ふ者があつてユリワカの武勇を嫉んで之をなきものにしようとした。或時ユリワカのねてゐるのを雨戸に載せて海に流した。彼は七日七晩の眠からさめて見ると、見知らぬ美しい無人島についてゐた。ユリワカは山へ行つて木の實をとり、海へ行つて魚貝をとつて幾年かを過した。ユリワカの夫人は絶世の美人であつたので彼の友は之を誘惑しようとしたが、夫人は色々に言ひなして之を避け、日夜主人の身を案じてゐた。或日彼は鷹に主人の在所を探すやうに賴んで之を放した。鷹は遙々海を越えてユリワカの所迄飛んで行つた。ユリワカは深く感動し、指先の血で木の葉に自分の名を書いて之を空へ放した。鷹は數日の後夫人の許へ歸つた。夫人は再びたよりを鷹に托したが今度は不幸にして暴風に遇ひ死骸は海に浮んで水納の島へ漂着した。ユリワカは深く之を憐み墓を造つて葬つた。

其後一隻の船が水納の沖を通つたのでユリワカは聲を限りに救ひを求めやう〳〵國へ歸ることが出來た。しかし髪も髯も蓬々とのびてゐるので鄉里の人々は知る者もなく、懐しい夫人さへわからない位であつた。其の時昔の愛馬が主人を見て嘶いたので夫人もそれとわかり大そう喜んだ。そして人々を招いて宴を張り、ユリワカが踊つて見せようと、鎧を取出すと已に錆びてゐて赤錆が惡者の目に入つて遂に死んでしまつた。

今水納島には鳥塚があり、其上に一基の石碑が建ててあるといふ。

京の都から九百浬も離れた此の孤島に、かくの如く紛れもない百合若大臣物語が殘つてゐることは洵に不思議なことではあるまいか。（球陽外卷遺老說傳にも載せたり）

二〇、國主六たび變革す

正史に依ればアマミキヨ、シネリキヨの二神此の國土を形成せし後天孫氏世々相傳して國を治めたが二十五紀にして奸臣利勇の滅ぼす所となつたとある、然るに當時の事蹟等に就いては邈茫として何等知る由がない。沖繩の鄉土史は源爲朝の遺子舜天王以來七百年間の記錄に過ぎない。

琉球の王統は天孫氏以來尙氏迄六朝の變革があつた。

舜天王統　源爲朝の一子舜天は二十一歳の時義兵を興して逆臣利勇を滅ぼし、文治三年（一八四七）國主に推された。彼は國城の規模を擴張して樓殿を改築し、善政を布いて島民を綏撫した。其の薨後子舜馬順熙父王を繼ぎ義本に傳へた。然るに義本の治世饑疫流行して國中の人民半減し遂に位を臣英祖に讓つて隱退し爲朝の統は三代七十三年にして絕えたのである。

英祖王統　英祖は天孫氏の後裔伊祖城主惠祖の長子で二十五歳の時國主義本に召されて攝政に任ぜられ、政を執ること七年、天下皷腹擊壤し、萬民景仰すること父母の如く、文應元年（一九二〇）先王の禪（ゼン）を受けて國主となつた。彼は稅制を確立し、境界を正して農作を勸め、百度悉く擧つて國內太平に歸し、久米・慶良間・伊平屋・大島等の諸島皆風を聞いて入貢し、外寇元軍を防いで民を救ふ等治績大に擧つた。英祖在位四十年にして薨じ、大成・英慈・玉城・西威と次々に祖業を繼承したが、玉城の世、政務懈怠して、國中亂れ遂に中山・南山・北山に分裂して三王覇を爭ひ、子西威に至り五代九十年にして滅んだ。

察度王統　浦添按司察度は正平四年（二〇一〇）三十歳の時推擧せられて國主の位に就き、弊政

を改革したが、文中元年明主朱元璋の招諭に應じ初めて表貢を献じ、其の子武寧に至つて明主の冊封を受くるの端緒を開き以來廢藩置縣迄日支兩屬の狀態となつた。宮古・八重山が服屬したのは察度の時代で、支那交通開始の後であつた。此の統は僅に二代五十六年にして佐敷按司巴志の滅ぼす所となつた。

第一尙王統　琉球三山分裂して紛爭すること百年、人民塗炭の苦に堪へなかつたが、島尻の東部佐敷に沖繩第一の英傑「巴志」が興つて先づ西隣大里按司を伐ち、一舉にして中山武寧を滅ぼし次に北山を平げ、後亦南山を討つて遂に三山一統の大業を成就したので明主大に其の功業を賞し「尙」の姓を賜はつた。之より久しく杜絶したりし日本本土との通交を復活し、南蠻諸國との貿易を旺にして國富の基を開いた。之より巴志の子孫尙忠・尙思達・尙金福・尙泰久・尙德と七世六十四年間球陽を支配したが、尙德の代に世替り（革命）が行はれて其の統は絶えてしまつた。第一尙氏時代は最も南蠻貿易が盛に行はれ數多の社寺を建立した。然るに尙德王に至り二回の奇界島遠征によつて國帑の失費漸く多く王は遂に久高島參詣中世替の爲め廢せられて、次に尙圓王・衆民の推す所となつた。

第二尙王統　現尙侯爵家の始祖尙圓王は御物城、御瑣之側の重職に在つたが、尙德を忠諫して容るゝ所とならず、采邑內間に隱れてゐた。彼は寬仁大度德望高きを以て尙德王の薨後萬民に推戴せられ五十六歲の時國王の位に昇つたが、在位七年壽六十二にして薨じた。其子尙眞は古今の名君で十有三歲の若冠を以て國王の統を繼ぎ、屬島を鎭め、衣冠の制を定め、武器を撤廢し、中央集權を斷行して大首里を建設し、海外貿易を奬勵し所謂琉球の黃金時代を現出し、在位五十年尙王家四百年の基礎を安固にし六十二歲を以て薨じた。

尙圓より尙宣威・尙眞・尙淸・尙元・尙永・尙寧・尙豊・尙賢・尙質・尙貞・尙益・尙敬・尙穆・尙溫・尙成・尙灝・尙育・尙泰王迄十九代四百十年の長い間子孫相繼ぎ、日支兩屬の政策を把持しながら藩國の運命を誤ることなく、順調に之を統治し、明治十二年三月廢藩置縣となつた。

二一、悲戀に泣きし島の娘

昔から沖繩では日本本土のことを「大和（やまと）」又は「大和山城（やまとやしろ）」と續けて呼んでゐる。之は大和山城の朝廷を中心とした古い言葉である。

琉球の萬葉集とも稱すべき、おもろさうし卷十に旅行歌として

くすのきはこので　　やまとぶねこので
やまとたびのぼて　　やしろたびのぼて
かはらかひにのぼて　　てもつかひにのぼて

(楠の舟を造り、大和舟を作り、大和旅に上り、山城の旅に上り、かはら買ひに上り、品物買ひに上り)といふのが載つてゐる。

又、おもろに、

かつれんは、なおにぎや　たとゑる
やまとの、かまくらに、たとゑる

(勝連といふ所は何處にか譬へん　日本(やまと)の鎌倉に譬へん)といふ意味で、いづれも本土との交通のあつたことがわかる。現に爲朝の子舜天の居城であつた浦添城や彼の君臨してゐた首里城からは「癸酉年高麗瓦匠造」といふ銘のある朝鮮式の古瓦が發掘され、嘗つて伊波先生が東京帝大に鑑定を請ふたところ、鎌倉時代の瓦だといふことになつて居り、又勝連城からも、同樣類似の古瓦が發掘されることや、浦添城下に「大和山城船頭殿加那志」の墓を神嶽として祀つてゐることなどから見ても鎌倉時代本土交通のあつたことが推察される。昔から此の島の人達は「大和旅」又は「大和上り」といへば如何にも太平天國に上るやうに晴れやかな、明るい懷しい感じを持つてゐるが「唐旅」といへば「黄泉(よみ)の國」とか「死の國」とかを聯想する程に暗い暗示を持つてゐる。以前は父を亡くした子供をからかつて「お前の父樣は何處へ行つたか」といふと、其の子は「唐(から)へ行つた」といつて涙ぐんでゐたものであつた。

沖縄では本土の人がやつて來ると、青年男女が招いて歡迎したもので本土の男と土地の女とのローマンスも尠くない。其の史上に現はれたのが大爲朝で、其後渡來して島の娘を娶つた中爲朝や小爲朝は無數にある。然るに支那人や朝鮮人などとは第一言葉が違ふから意思や感情が疎通しないのでそれほど歡迎の氣分もなく、まして戀愛などの結ばれた話も餘り聞かない。イヤ只一つ丈け次のやうな傳說が殘つてゐる。

それは今から三百年も前のことらしい。唐人だとばかり支那人だか朝鮮人だか判然しないが、唐人の陶工師を招いて陶器の製法を傳授して貰つてゐたが、寂しくて歸國するといふのを琉球の

役人が「誰なりと御氣入の娘を妻にしてやるから暫らく留まるやうに」と歎願した。其後陶工は一人の田舍娘を見込んで是非彼女をと所望されたので、役人も約束の手前詮方なく官命なりと無理强ひに其の娘を彼に娶はせることにした。飛んだ災難を蒙つたのは彼女である。彼女は屠場の羊の如く曳かれて行つたものの朝夕哀愁の念に堪へず、いつも瓦竈の頂上に登り故郷の空を眺めて眼に涙を浮ばせてゐたが、遂に次のやうな琉歌を詠んだのである。

瓦屋頂のぼて眞南風向て見れば
島の浦ど見ゆる里や見らぬ

「瓦竈の頂に登つて南の方を眺むれば、村の浦海は見えるが戀しい殿は見えぬ」といふ意で誠に同情の念に堪へないものである。

かういふ事情から見ても琉球の人が昔から如何に本土に對して憧憬の念と思慕の情とを持つてゐたかを窺ふことが出來るであらう。

二二、琉球の群雄割據時代

戰爭を知らない國があるといつてナポレオンを驚愕させたといふ琉球は、昔から戰爭のない國ではなかつた。こちらでも本土と同じく群雄割據の戰國時代があり「いくさ花遊び」といふ俚言さへ殘つてゐる位だから隨分殺伐な時代もあつたらしい。彈丸黑子の此の島には百に近い小さい城址が殘つてゐるのを見ても當時の狀態を窺ふことが出來よう。

此等一城の主のことを昔は「世の主」とか「按司」とか呼んでゐた。世之主とは世を支配する主の意で凡そ本城の主を指して稱へたらしく、按司とは所謂一城の「あるじ」といふ意味の言葉らしい。近頃は俗に「あじ」と稱へ又「あんず」と發音してゐる。

沖繩本島に於ける城址を調査するに面積僅に十方里の島尻地方だけでも規模の最も大きい東大里城・豐見城・多々那城・南山城を始め・具志頭・佐敷・玉城・東大城・米須・眞壁・名城など五十近くもあり、又中頭地方でも浦添・中城・勝連を主として大小二十餘を算し、北部國頭地方では北山城を始め十數ヶ所あつて合計一百に近いのは驚くべきことゝいはねばならぬ。此等の中には單に郭だけあつて防壘といつた形のものも二三はあり、又比較的新らしいのは石垣低くして貴人の邸宅といつた程度のものもないではないが、大體に於て第一尙氏の後半期迄は殆んど各部落

に城塞を設けた形になつて居り、城内及附近よりはいづれも支那又は朝鮮、安南方面の青磁燒南蠻甕等の高台破片並に當時の琉球土器の破片を採集することが出來るので之を以て按司住居又は築城の年代を推測し得らるゝことは學界の喜とする所である。著者の採集したもの已に數十ケ所に及びすべて之を鄉土博物館に保存してある。

猶ほ餘談ながら此に附記して置きたいことは、此の按司の子孫より「のろ」と稱する女の神職を出してゐるが、其の數が凡そ城の數に比例し、島尻百四人、中頭六十四人、國頭四十四人合計二百十四人（之は附近の離島を併せて）になつて居り、之を以て當時の人居の繁榮と文化の普及とを想察することが出來ることである。

偖て琉球に於て戰國時代と稱すべきは、我が南北朝後醍醐天皇の御代、當地では玉城王の治世中政權荒怠し、遂に中山・南山・北山の三王分立して覇を爭うてより凡そ一世紀間が其の絶頂で明主太祖から左の如く戒告されたのを見ても分る。

「近頃使者歸つていふ、琉球國三王互に爭ひ、農を廢して民を傷く、朕之を聞きて憫憐に勝へず、今使を遣して之を諭さしむ、能く朕が意を體し、兵を息め、民を養ひ、以て國祚を綿れば天之を祐け、然らざれば悔ゆるとも及ばざるべし。」

五百年前尙巴志王に至つて始めて三山一統の大業が成就した。此の時明主成祖は詔を賜ひて、

「爾琉球國分れて人民塗炭すること百餘年、近頃汝が義兵復た太平を致すと、是れ朕が素意なり今より以後愼むこと始の如く、海邦を安んじ、子孫之を保せよ、欽めよや、故に諭す」

と訓諭された。

然るに夫より二十餘年を經て尙金福王の薨後其子志魯と叔父布里との即位爭があり、續いて阿摩和利の亂、二回の鬼界島征伐もあり、更に第二尙氏時代に入つても八重山赤蜂征伐、久米島出征もあつて尙眞王の晩年中央集權に至る迄は各按司は父祖の城地に割據してゐたので、三山分立より此に至る凡そ二百年である。

二三、久高島傳說「黃金の瓜種」

球陽附卷「遺老說傳」及び久高島由來記に據ると、

往昔玉城間切百名村に白樽（白太郎）といふ一人の少年があつた。資性温順にして至孝、玉城按

司深く之を愛し、長男ミントン按司の娘（孫娘）を娶はせて婿と爲した。或る日、白太郎夫婦は野に出て、東海に小島の隱顯するを見、此の附近は群雄割據して戰爭の絶間がないから、むしろ亂を避けて彼の島へ渡り、夫婦樂しく安穩に暮らした方がよくはないかと、相携へて渡海して見ると、清水は湧き、地は肥え、野は廣くして住み心地のよい土地であつたから、いよ〳〵庵を構へて此の島に住むことになつた。

（一）

二人は螺貝を拾つて生活を營んでゐたが、或日一個の白壺が海に漂うて來るのを發見した。白樽之を取らんとすれば波間に沒して見えず、妻之を悟り、屋久留川に至つて禊をなし再び行いて招くと白壺は搖られて手に入つた。蓋を開けば麥、粟、豆の種子が這入つてゐる。即ち地を選んで之を蒔きしに見事に麥が實つたので之を王城に献じた。王大に喜び給ひ直ちに神酒を釀さしめて神を祭り、次に臣庶に賜つた。之より海島五穀豐穰、子孫繁昌して遂に邑と爲り、名づけて久高と呼ぶに至つたといふ。

（二）

かくて二人の間には一男二女が生れた。次女の思樽は世にも稀なる麗人で、王城に召されて內宮に入り、王の寵愛を一身に集め、そのため諸妾の嫉む所となつた。思樽或時過つてお疵を出したので人々の排斥する所となり、遂に鄕里久高へ歸されることになつた。然るに其の時已に懷姙してゐたので月滿ちて玉の樣な男の子が生れ之を金松と名づけた。金松成長の後頻りに父親のことを訊ねて止まず、母も遂に事情を打ちあけて語り聞かせた。金松或時濱にて一個の壺を拾ひ開けて見たら中に黃金の瓜種子がはいつてゐた。彼は大に喜び直ちに登城して之を王に献じ而して申上ぐるやう「此の瓜種子は天から慈雨の降つた時、未だ一度も放屁せざる女をして蒔かしめ給へ、然らば黃金の實を結ぶに至らん」と、王笑つて曰く「世の中に放屁せざる人あらんや」と、金松いふ「然らば何故に過つて放屁せし母を退け給へるや」と、王、其の前非を悔い嗣子なきを以て他日金松をして後を嗣がせたといふ。

此の物語は恐らく隨分古い天孫氏時代のことであらうと思はれてゐたが、著者が、昭和十三年十月仝島に渡り、白太郎の子孫と稱する外間家を訪ね、金松王の御召物として傳へられてゐる絹物の遺品、緞子帶二筋、日月に叢雲を描いた羽二重袷一枚其他描繪の衣服數枚、衣裳、胴衣

長襦袢、下袴等合計十六点を借り受けて鄉土博物館に特別展覽を行ひ、且つ之を手がかりに調査を進めた處、首里城下に金松王の子孫と稱し「首里大根神」の神職を出してゐる惠姓久高氏一族があり、明の景泰年間（皇紀二一一〇—二一一六）首里王府より久高島地頭職を拜命し、後世屢々殊遇を賜つてゐる事實などが分り、此の金松王が、即ち名君英祖王五代の孫「西威王」であることが判明し、正平四年（皇紀二〇〇九）彼の薨去と共に五歳の世子は廢せられて久高島へ隱遁したことが判明した。

本書「出產の土俗」の項に述べた「最近迄殘つてゐた「產屋」とは今より六百二十年前即ち後醍醐天皇の嘉曆三年（皇紀一九八八）此の西威王の生誕した遺跡であつたのである。

二四、土地共有制度の久高島

世相が急激に變遷推移しつゝある今日、如何に南溟の小島とはいへ、未だに一千三百年前、大化改新頃の「班田收授法」が現存してゐると聞いたら驚かない人はあるまい。此の島では男は皆漁業に從事して各方面へ遠征し、農業は全く婦女子の職業となつてゐるが、彼女等は殆んど七十

歳位迄神に奉仕する身で汚穢を忌むが故に不淨なる肥料を運搬しないと聞かされたら珍奇と思はざる人はないであらう。時に、今でも風葬の古俗が殘り、產婦は一週間の間毎日冷水で禊をして焚火に暖まつてゐるに聞かされたら喫驚仰天しない人はあるまい。之が現在の久高島である。

すべてが古風な此の島はそれ程離れた絶海の孤島ではない。其の位置は沖繩本島島尻郡知念岬の東方三浬、中城灣の入口に横はつてゐる形狀細長く扁平なる島で、周圍一里、人口六七百、知念村の一字であるが、古來久高・外間の二つで一聚落をなし、兒童七十名ばかり收容した一小學校もある。

此の島こそはその昔沖繩人の祖先「アマミキヨ」が始めて降臨した所で、麥・粟・黍・菽などの、最初に出來た土地だと傳へてゐる。それで昔時國王は毎年此に渡海して天神地祇を祀り、麥の穗祭などを行ひ、又麥の黃熟する時は、先づ琉球最高の神官たる聞得大君が渡りて、初穗を收めて神前に供へた後でなければ人民は食膳に上せてはならぬ。若し脊く者あれば神罰立所に至ると信ぜられてゐた。然るに、慶長後琉球の民力俄に疲弊せしを以て經費節減の理由に依り、攝政向象賢の獻策があつた延寶元年より國王の久高島參詣を廢し爾來代官を派遣せらるゝに至つた。

久高島の結婚の時、唱和する謠に、

女神産さば、君の御奉公
男神産さば、首里かなし御奉公

「女の子を産まば聞得大君の御奉公を勵まさむ。男の子を産まば首里王の御奉公を勵まさむ」といふ意味である。事實久高の婦女は皆神に奉仕してゐる。

その爲めに十二年に一回、午年に「イザイホー」「ナンヂホー」などと稱する一種の貞操試驗が神アシアゲの庭前で行はれる。別に處女の貞操を試驗するといつた風變りのものではないが「二夫に見えざる女を以て尸となす」といふ思想に出發してゐるのである。先づ二十七八歳以上の婦女は三日間御嶽の中に神籠りをなして身を淨め、然る後、神に奉仕する資格の有無を檢定する。其の方法は神アシアゲの庭に形ばかりの橋を作つて之を渡すのであるが、不貞の女は必ず神が橋より轉落させて呪ひ殺してしまふ。といふ傳承がある。而して無事通過したものは眉間に朱肉で合格のしるしを印する。此の第一回の試驗を經たものを「イザイを受ける」といひ、十二年の後再び繰り返して合格した者を「ヤヂク」と稱し、更に十二年後の合格を「タモトアガリ」と呼び

七十歳の高齢に至つて神人の奉仕を免除することになつてゐる。肥料を取扱はぬといふ理由も亦此に存する譯である。

偖て最後に、土地共有制度に就いて略述することにしたい。

由來琉球では古くより村々に於ける百姓地は其村共有の土地で、人口等の歩率に依つて土地を各戸に配分し、數年乃至十數年（長きは數十年）にして地割替を行ふ制度になつてゐたが、久高島は之と趣を異にし、恰も我國上代、大化改新に於ける班田收授の口分と同じ方法が行はれてゐた。即ち男子十六歳に達すれば一地を貸與し、五十歳に至りて返還せしむるもので、男子のない家は半地を與へるのである。沖縄縣では明治三十二年より土地整理を行ひ、三十六年を以て終了し、勅令を以て地租條例を施行するに至つたが、獨り久高島では「男の決議は決議にあらず。土地は昔、神より農を司る妾共女へ授けられたのであるから男の勝手にはさせぬ」と頑張つて見事に男の決議を覆し遂に其の儘今日に及んでゐる。何處迄も神の國、女權の島ではある。

二五、琉球羽衣物語

今より六百年ばかり前、後醍醐天皇の御代琉球の王城より程遠からぬ所、鎭西八郎爲朝公が船出したと傳へられてゐる牧港のほとりなる大謝名と言ふ村に奥間といふ一人の青年があつた。彼は家貧しく農を以て業としてゐたが、或日、田を耕して暮方に及び、手足を洗はうと思ひ眞志喜の後、西森の泉に近寄つて見ると、此の世の人とも思はれぬ程容色の美しい姫様が一人沐浴してゐるのを發見した。奥間は之を見て驚くこと限りなく、吾が村には嘗つてかゝる麗人を見たことがない。之は必ず都から來たに違いあるまい。それにしてもこんな御上品な姫様がどうして一人此處で浴びてゐるのだらうと、不思議に思ひながら只夢心地で忍び寄り木蔭から窺いて見ると、これは又驚いたことには絢爛目を奮ふやうな羽衣が木の枝に懸けてあるではないか。

奥間は愈々怪しみ窃かに其衣を取つて草叢の中に隱し、それとなしに泉の所へ走り寄ると美人は驚き慌てゝ衣を著けようとした、處がどうしたことか見付からないので、せん術なく花の顏を掩うて泣き崩れてしまつた。

奥間は之をなだめるやうにして、姫君は何處より來られたお方なるかと問うた。

麗人の曰く、妾は天女で、下界に天降りしてみそきしてゐる間に大事な羽衣が盜られてないから

再び昇天することが叶はぬ。願はくば探し賜れよと。奥間は心中大に喜び、之を騙していふに、「姫君暫らく我が茅屋に休息せられよ、我征いて御衣を求めて進ぜんと」申すと天女深く其の厚意を謝して俱に奥間の草庵に入つた。

奥間は其の羽衣を倉の奥深く藏しおき、遂に同棲して一女一男が生れた。歳月は矢の如く數年にもなり、其女子は成長して羽衣の在所を知るに至り、或日弟の守をして遊んでゐたが何げなく次の様な歌を唱ひ出した。

いよーいく　泣くなよー
母君の飛び衣　母君の舞ひ衣
六つ柱の倉に八つ柱の藏に
稲束の下に粟束の下に
置き古みしてるよ　置き洒ししてるよ
ねんねんな　泣かなくばあげるよ
遊ばばぞあげるよ

母なる天女はそれを聞いて大いに悅び、夫の留守を窺ひ、穀倉の奥深く探し求むるに果して御櫃の中に納め、稻束の下に、栗束の下に隱してあつたので直ちに羽衣を取り出して身に纏ひ天高く舞ひ上つた。子供達は天を仰いで、アレ母君よ母君よと泣き叫んだので天女は恩愛の情にほだされて再三、再四舞ひ上り舞ひ下り、遂に淸風に乘じて雲の彼方へ飛び去り姿は消へてしまつた。

男の子は名を察度（さつと）と呼ひ聰明叡智であつたが、成長の後農事を勵まずして漁獵を好み四方を遊歷してゐたので父親は大層其の將來を案じてゐた。

時に勝連城主の姫に世にも名高い才色兼備の方があつたが、名門貴族の子弟が娶りたいと請うても姫君は之に應じなかつた。

察度之を聞いて勝連に至り城主に謁見して、愛姫を貰受けんと懇請した。姫は父に向ひ、此人容儀微賤に似たりと雖も凡人にあらず、他日必ず大成するならんと父敢へて咎めず筮卜に依つて吉凶を判斷せしめしに王者の兆ありと。城主大に喜びて之を許し、吉日を擇んで迎へよと命じた

察度拜謝して辭し、日を改めて迎へることにしたが城主其の貧苦を憐み、金品を贈らうとしたけれども察度之を悅ばず、妻に向つていふ、お前は驕奢の中に成長して美飾を習ふ、吾は貧賤にして敢て禮を修むることが出來ぬと。妻其の言に服し、命惟從ひ、華麗なる衣服を去り察度と相携へてその茅庵に入つた。

或夜燈明を焚く燭臺に薪炭を積み松油を灌ぎつら〳〵之を見れば黃金の器である。妻怪んで何故に之を柴燒の具に用ひらるゝやと問へは、察度のいふ、吾が家の田地にはこんな金屬が澤山あると、俱に行いて見るに果して金銀があつた。其の頃日本本土の商船鐵塊を載せ牧港に來つて交易してゐた。察度金塊を以て悉く之を買收し附近の耕民に與へて農具を造らしめた。之より產業頓に勃興し民力亦充實して人民彼を仰ぐこと父母の如くであつた。

察度は他日浦添城主に推され、境內大に治まり遠近彼を敬慕した。彼は三十歲の時遂に琉球國中山王に推戴せられて名君と謳はれ明國との交通を開始して支那文化を輸入し、宮古八重山諸島を服屬せしむるなど治績大いに擧り現位四十六年、壽七十五にして應永二年此世を去つた。

二六、支那との關係

琉球が政治的に支那との關係を生じたのは室町時代の初期即ち元が滅んで明國が勃興した頃で

ある。

南北朝の末、長慶天皇の文中元年（皇紀二〇三二）元を亡ぼして四百餘州を平定した明主太祖は當時の足利將軍義滿を招諭し「爾を封じて日本國王と爲す」の辭令を授けたといふことであるが、之と相前後して揚載といふ臣下か詔を齎らして琉球國中山王察度を招諭したのである。察度即ち其の詔を受け弟泰期を遣はし臣と稱して表及貢物を献じた。是れ琉球が支那に服屬した濫觴である。

當時の貢物を見ると琉球土産の物は馬・硫黄・螺殼・海巴・生熟夏布・牛皮・磨刀・石位のもので、それに日本本土産の日本刀・扇子・金銀製品や銅・錫などを買入れ、更に南蠻物の香類・蘇木・烏木・胡椒といつたやうな香料・染料・調味料等を取揃へてある。

琉球王が歴代明國の冊封を受け、進貢を行つてゐるのは全く支那貿易の方便であつた。支那は亦昔から明分を重んずる國であるから琉球國より献ずる僅少非薄の物質などはどうでもよいのであるが、古來世界の文華の中國として尊大を誇つてゐる丈け周圍の諸國が入朝して來るのを得意とし、海南琉球遙に來る。善い哉。といつた調子に、大に喜び屬國中朝鮮・琉球・安南・暹羅と

いふ順位で待遇されたといふことである。而して其の都度金銀幣帛等多くの御土産品を賜はり、船舶が古くなると新造船一艘を賜らむことを請ふことも屢々であつた。茲に於て琉球南山北山二王も亦中山に倣つて入貢の例を開いた。之より凡そ五六十年の後中山王尙巴志は南北二山を平げて所謂三山一統の大業を成就した。

當時の琉球人は支那の冠を被つた。日本人で只貿易の利潤を得て海島貧土の經濟を補塡してゐるに過ぎなかつた。支那貿易の利益の莫大であつたことは「唐一倍」といふ言葉や「知らぬ唐商ひより知つてる糠商ひがよい」といふ俚諺によつても十分に知ることが出來る。

そこで明國が亡んで清國が興つた時も朝覲の禮を修め依然として彼の冊封を受け、進貢を續けてゐた。支那の外藩に對する懐柔政策は其の冠服を給し、或は海舟を與へて遠人の歡心を買ふのであつたが、琉球入貢は毎年絶間なく、時には一歳二貢三貢の多きに及ぶことすらあるので支那も其の煩瑣に堪へず、遂に制限を附するやうになつた。

後花園天皇の永享七年尙巴志王の時進貢使の入京者二十人と定め、朝貢毎に二艘とし毎船百人乃至百五十人と限定され、土御門天皇の文明四年尙圓王代、琉球貢使の從人福州にて人を殺し財、

を掠めた廉により二年一貢の制と爲し一船百人と定められた。

尙圓の子尙眞王に至り、特に請うて毎歲一貢を許されたが、十四五年の後再び二年一貢に改められ、以來九十餘年間其の制が行れは、慶長十七年尙寧王代に至り島津氏の征服後は民力疲弊せるの故を以て、十年一貢に限定せられて一大打擊を蒙るに至つた。之より十年の後元和七年尙豐王代に至つて嘆願の結果漸く五年一貢を許され、寛永十年即ち二十二年に再び二年一貢に復活することを許された。

延寶六年尙貞王時代、更に貢船一艘を增して往來に使せんことを請ひ、幸に許された。是れ即ち接貢船の起原である。接貢船は進貢船の出航した年に當地を出發し、即ち貢使が北京より福州へ到着するのを迎へるために派遣せられる名義であるが、之によつて事實上一年一貢即ち毎年交易に行くと同じ結果である。進貢二艘の持歸る銀を換算すると一万四五十兩で其他澤山の貨物があつた。室町時代の明國交易は實に原價の五倍に達したといはれる位利益があつたが、慶長後は島津氏に壟斷されたので、途中の島々に拔荷をしたこともあつたが間もなく監督が嚴重になつて之も出來なくなり剩へ御糸荷といふ厄介な依托販賣迄させられてゐた。

二七、勇壯無比の爬龍舟

長崎と那覇の二港は藩政時代に於ける外國貿易の行はれる特殊地域であつた。隨つて支那文化並西洋文化は此の二港より輸入せられるものが尠くなかつたので此の二ケ所は相共通する幾多の文化を持つてゐる。

茲に述べんとする爬龍船が即ちこの一つである。琉球ではハリューセン方言ハーリーと稱へてゐるが、長崎ではペーロンと呼んでゐる。結局同名異字又は異音になつてゐるのではあるまいか。

長崎においては舊歷五月五日瑞午の節句を卜し、沖繩では舊五月四日に行はれる海の祭りで、今日のボートレースに當り、往時どちらも、南支那から輸入されたものであり、其の起原は汨羅の河に身を投じた義人焚の屈原の靈を慰むる爲めに始められた行事である。

當地では十數尋の細長い龍頭の舟を造り十數名（二十名位）の若者達が乘込み、三隻競漕して各々町の名譽の爲め命懸けに勝敗を戰ふので實に勇壯無比見物人が遠近から集まつて港の周圍を埋めて仕舞ふ賑やかさである。

定刻出發点に競舟の舳先が揃ふと、地元の女神職「のろ」の合圖で狹長快速の龍舟は矢の如く沖の標点目がけて一生懸命に漕出す。各舟胥頭取りの銅鑼の鉦鼓の音に合せて一絲亂れぬ統制の下に擢も折れよとばかり滿身の力を籠めて力漕する。各町を象徴した青・黄・黑三色の龍舟は百足（ムカデ）の如き形相で八卷をしめた漕ぎ手をのせ、町の旗じるしを海風に飜し、水煙立てゝ流汗淋漓たる若人達の肌を洗つて飛ぶ、舟は互に尺寸を爭ひ三龍相搏つが如く、鳴物の響、叱咤の聲、應援の叫びと粗呼應して全く天地を震撼せしめる程の一大壯觀を展開する。

かくて折返し点を回漕して元の決勝点に到達する。實に壯烈無比の南國競技で海國琉球を象徴した獨特の年中行事である。

其の起源は今より五百十年前豐見城按司汪應祖といふ人が支那福州から傳へたもので後世那覇久米・泊（黑）三町の人々が那覇港で競漕するのであるが、先づ最初に三隻共必らず豐見城ノロクモイを通じて豐見城城内の豐見瀨（とみせ）威部（いべ）といふ氏神に祭品を供へて祈願祭を執行し、乘組員一同城下の津屋に上陸して豐見瀨に拜禮をなし、了つていよ〳〵乘船し出發点に向ふのである。

創始者汪應祖は、後に從兄南山王承察度の跡を繼いだので、南山城下の入江糸滿濱に於ても亦今に此の競技が行はれ、しかも昔は南山大里ノロと言ふ神職が此の行事の祭祀を行ひスタートの合圖をなす仕來りになつてゐた。

二八、冠船の渡來と褌（ちんだし）

冠船とは、琉球王の衣冠を載せて來る支那の勅使の船である。

文中元年（一〇三二）中山王察度が、初めて明主の招聘をうけて連年朝貢の端緒を開き、其子武寧始めて冊封を受けしより以來五百年間歷代國王は繼統毎に一代一回前例に倣つて之を奏請するのであつた。此に於て明朝及び清朝では高官を以て正副勅使に任じ、絢爛華麗なる琉球王の冠服を携へて國に抵り之を王に授けて嚴肅なる冊封の典儀を行はしめるのであつた。

冠船が那覇に到着するや、沖繩は上を下への大混雜を演じ、國王は城を出でゝ那覇埠頭の恩迎亭に勅使を迎へ、天使館に於て之に面謁してゐた。

由來支那は名分を重んずる國であるから琉球は彼に對しては表面を裝うて隱蔽主義を執り、日本本土に對しては名を棄てゝ實をとり常に意志の疏通に努めてゐた。慶長後薩摩が琉球國の形式

を破壊せずして支那貿易を營ませてゐたことを考へると思半ばに過ぐるものがあらう。事實冠船渡來の時、薩摩の船舶は大騷動で那覇港や泊港から運天港あたりへ避難し、隼人の面々は急に那覇から其の姿を消して遠く運天港などへ隱れるのであつた。逃損つた船は合議の上燒却したことさへあつたといふ。

琉球では之と仝時に藩内に布令して、日本の言語・風俗・文字・器物等一切の日本風を隱蔽せしめ、或は寛永通寶の通用を禁止して鳩目錢と取換へるなど萬般周到なる心遣ひを以て表面を糊塗し、以て支那官員の目を塞ぐことに奔命した。左に當時の布達を掲げる。

一、冠船滯在中、道の島の船那覇に着いたし候はゞ、大和年號、日本衆の氏名、やまと書物其外すべて唐人見候て差障候品は里主御物城、大和横目、見しらべ取隱させ可申候

一、やまと歌、やまと言葉仕る間敷候、若し唐人どもやまと言葉にて、何か申聞候はゞ不レ通體仕るべく候

一、やまとめき候風俗無之樣相嗜むへく候云々（天保七年）

此のやまとめき候風俗とは色々あるが就中氣をつけてゐたのは支那人の最も忌む「褌」の取締で

あつた。何故か彼等はそれを「東夷の蠻風」と稱して非常に嫌つてゐた。或は褌一本眞裸な日本人が刀を閃めかして支那沿岸を荒して倭寇以來彼等は傳統的に、褌に對する恐怖心があつたのではなからうか？田舍から物賣りに那覇へのり込む男達はそろ〳〵町の屋根が見える所迄來たら荷物を下し、フンドシの上から更に携帶して來た半ズボン樣のハカマをはいて身支度をなし然る後荷物を擔いで町へ下りて行つたといふ滑稽な話もある。しかし支那官員は日支兩屬に就いては公然の秘密として之を知つてゐた。萬曆三十五年（慶長十二年）の書中に「貴國陰與二倭夷一爲レ市」の語があるやら亦福建巡撫の上疏中にも「況又有レ倭爲二之驅一哉」とあつて此の間の消息を物語つてゐる。

冊封使は大抵七八月頃南の貿易風で來琉し、翌年二三月頃北の貿易風で歸帆するのであるからその間凡そ半年も滯在してゐた。殊に隨員守兵併せて船艦二隻三四百名といふ大がかりであるから其の歎待費が莫大であるばかりでなく、支那人のことゝて各自物品を携帶して交易を迫るので巨額の公金を要し、數年乃至十數年準備金を積んで之を迎へなければならなかつた。或は現金がなく、士族の簪や銀の器を集め潰して之を購つたといふ事實もある。

何でも冠船渡來三年位前から那覇港一帶の魚獲を禁じて養殖を圖り、又美里・越來あたりの密柑も花の頃に摘みとり冠船渡來の年は枝もたわゝに大きな美果が實るやうにさせたといふ話も殘つてゐる。又伊波先生の話によると、冊封使を興に載せて普天間權現へ詣るのに、那覇からわざ〳〵西海岸の近道とは反對に那覇灣奥へ通り、識名園の前より首里の裏手をぬけ、浦添街道より案内してゐたといふ。之はその間六七里、一日の行程中全く海の見えないコースをとるので支那人も琉球の廣いのに驚いてゐたといふ。隨分苦肉な策もあつたもので琉吏の苦衷想察するに餘ありといはねばならぬ。

二九、石敢當と焚字爐

那覇や首里の市内を歩いてゐると、丁字形になつた道の突當りには必らず「石敢當」と刻んだ碑石が立てゝある。中には木や板に書いたのもある。全く沖縄名物の一といつてよい。セキガントウと讀むのが正しいだらうが、此處ではイシガントウと稱へてゐる。都會地程にはないが沖縄全島にあるといつてよい。しかし之は數が少ない丈けの差で、薩摩、肥後地方及び京都高辻天滿宮の社頭等にもあり、遠く東北秋田地方にも及んでゐる民俗である。

石敢當は一種の魔除けの作用をなすものらしく、此の習俗は勿論支那から傳來したもので、何でも西漢の頃の力士の名であるといひ、又晉の愍帝の頃の人だともいふ。元は石に像を刻み其下に「石敢當」の三字を勒してあつたともいつてゐる。石敢當平生凶に逢ひて吉に化し、侮を禦ぎ危を防ぐ。後人故に凡そ橋路衝要の處には必ず石を以て其形を刻し、其姓を書し、以て居民を護らしむ云々。田舍へ行くと奇怪な自然石を屋敷の隅角や道のつきあたりへ立てゝあるのを見受けるが之も矢張り魔除けで「無名の石敢當」といふべきか、して見ると、石敢當傳來の以前よりさうした民俗はあつたものと考察される。

石敢當の形體は簡單な石碑の如く、大なるは高さ三尺位もあつて、地に埋めてあるが、又石垣の中へ嵌め込んだのもある。

焚字爐　は道教から來たもので之も全じく支那から傳來してゐる。以前は文字を認めた紙を粗末にして踏み散らして歩くと罰が當つて足が膨大すると戒められたものであつた。それで公衙・寺院・學校等には大抵焚字爐を設け、反古紙を集めて此の塔の中で燒却以て善根を養ふ方便とし

てゐた。現今では餘り殘存してゐないが、首里圓覺寺の鐘樓の下には高さ三尺、半間四方位の屋根形の石塔が今に殘つてゐる。

三〇、黃金の島大琉球

室町時代に於ける琉球人は、脆弱な帆船に滿幅の風を孕ませて南北渺茫たる海洋を征服し、日本本土は勿論支那朝鮮・南洋諸國と往來し、此等諸國の物產を交易して莫大なる利潤を擧げ、以て自國の殷富を圖つてゐた。

殊に五百年前尙巴志王の三山統一後は南北朝以來久しく杜絕してゐた本土との通交を復活すると共に南蠻貿易は一大發展を遂げ、十五世紀の中葉即ち尙泰久王より尙眞王時代迄は其の絕頂に達し、琉球自ら「蓬萊嶋」と稱し、彼の葡萄牙人をして「黃金の島大琉球」と呼ばしむるに至つたリース博士論文の中に

琉球が支那と正當の交通を始めてから二世紀の後は島民の商業は既に莫大な彊に達してゐたといふことである。彼等が交易を維持した重なる國々では、著しい輸出のために銅貨の缺乏を感じ居り、通商上に不足を生ずるを卹つに至つた。

西曆一四五四年以來琉球王は其の首府を東亞貿易の一大市場にしようと努力したが、此の時一方では葡萄牙人がマラッカ以東有ゆる貿易港に現はれ來り、琉球人を目して貿易航海に於ける緊要なる敵手となした。云々

昭和十年發見した金石文拓本中「國王殿前に懸くる鐘の銘」に

琉球國は南海之勝地にして、三韓之秀を鍾め、大明を以て輔車と爲し、日域を以て脣齒と爲し此二の中間に在りて湧出する所の蓬萊嶋なり。舟楫を以て萬國の津梁と爲し、異產至寶十方に充滿す。云々（原漢文）

何といふ自信の强い表現であらう。之は四百八十年前尙泰久王の鑄造させた巨鐘の銘であるが、同王より尙眞王に至る凡そ半世紀の間に琉球八社中の大部分を始めとし崇元寺廟や圓覺寺・天王寺等多くの寺院を建立し、然かも寺鐘を鑄造して懸けたのから見ても如何に當時の琉球が海外貿易によつて國富を增してゐたかを想察することが出來る。

次に葡萄牙の貿易史の中には、「黃金の島大琉球」と記してゐるといふことであるが、台北帝大

小葉田助教授の話に依ると、

印度のバラモン教の中に「太陽の出づる直下に「金の島」があり、其の隣に「銀の島」があるといふユトーピアの思想があつて、それがいつの間にか西洋に傳播するやうになり、葡萄牙や西班牙其他の國々の海外發展熱はさうした思想に刺戟されて東へ東へと貿易の手を延ばすことになつたらしい。十四、五世紀はポルトガルの貿易全盛時代で、歐洲の最盛國と稱へられてゐたが、天文の頃彼等は琉球を「金の島」日本を「銀の島」と稱してゐたといふ。それは琉球人が日本から持つて來た金塊をマラッカあたりで取次をなし、しかも海外貿易の覇權を掌握してゐた事實より見て、彼等は琉球をテッキリ「金の島」と速斷したらしい。又當時世界は銀貨本位に進みつゝあつたし、日本の銀が盛に支那方面に輸出されてゐたので、日本本土を「銀の島」と考へたのであらう、いよ〳〵十六世紀になると、西班牙が葡國に代つて東洋貿易に進出し、次に和蘭・英吉利といつた順序に「金の島」探しが多くなり、漸次東へ東へと、小笠原島や北海道方面迄探險の鉾先を向け、それらの土地に自國の國旗を樹てたりしたが、探し當てない內に夜が明けて「金の島」の夢がパット醒めてしまつた。滑稽なことには彼等の書いた海圖の中に、日本の東海に當る島も

岩もない茫漠たる海の中に小島を描きそこへ英國領のしるしをしてあるといふ。萬一を慮つた未練の結果であらう。

因みに那覇港中に石壁を繞らした現在風月樓の地は當時南蠻貿易の公庫として築造されたもので那覇港浚渫の際出土した青磁燒は鄉土博物館に陳列してある。

三一、由緒も古い琉球八社

琉球には殆んど五百年に近い前室町時代から多くの神社を建立し、藩政時代には琉球八社と稱せらるゝ御宮が今日の國幣社のやうに國主及島民から崇敬されてゐた。此の八社の內波上宮は地の利を得靈驗亦あらたかで明治二十三年には官幣小社に列せられ御神威大に輝いて今日の如く縣民一般の崇敬厚く、社殿も漸次壯麗を極むるに至つたのである。

其他の七社は無格社であり、末吉宮（首里市）沖宮（首里那覇兩市の中間にあり）の二社は其の建造物が國寶に指定され、八幡宮（沖宮の隣）天久宮（那覇市高橋町西端にあり）識名宮（那覇市外識名）金武宮（國頭郡金武村）は昔日の如き光彩なく、普天間宮は有名なる珊瑚礁鍾乳洞

に鎮座し相當參拜者が多い。其他此等の末社として那覇に長壽神社、宮古・八重山に權現堂があり、猶ほ島尻に眞壁宮、國頭に伊江島照泰寺などがある。

就中歴史的に考察すると、最も古く建立されたのは長壽神社で、之は俗に「御伊勢様」と稱へられてゐる。

抑も今より五百年前迄那覇は浮島とも稱へられる一個の離島で琉球の開港場でもあり又冊封使の滯在宿館や親見世と稱する貿易館なども此に在つて船を以て首里と往來してゐたので其の不便尠からざるにより享德元年（皇紀二一一二）尙金福王冠船渡來の時、國相懷機に命じて那覇より安里に到る間の「長虹堤」を築造させたのである。

然るに海深く波高くして工事を進むること難く、依つて　天照大神の御神威を藉りて此の大事業を成就せんと欲し、即ち祭壇を設け、二夜三日祈願した所翌日より海水忽ち涸れて海底が露はれたので、官民婦女迄總出して土石を運び、七日間に之を築いた。而してこれ神靈加護の賜と深く感謝し即ち神社を創建して天照大神を祀つたのである。是れ琉球史籍に現はれたる神社の始で之より數年後、首里郊外に末吉宮を建立して熊野宮を勸請し本宮は伊弉冊尊、相殿は速玉男尊、事解男尊の三神を奉祀し、更に十餘年後尙德王が領內鬼界嶋征伐の時八幡之御神に武運祈願して出征し目出度凱旋したので恩謝のため八幡宮を建てゝ本宮に應神天皇相殿に玉依姫・神功皇后を祀ることになつたのである。八社の中此の八幡宮を除く他の七社はいづれも御祭神は末吉宮と同じく熊野宮を御勸請したものであり、創立の年代も多少おくれてゐる。

三二、琉球の貨幣

永く日支兩屬の觀を呈してゐた琉球のことであるから、その貨幣はいづれを使用してゐたであらうか？是れ大方の聞かんと欲する所であらう。

置縣前琉球に於て使用されてゐた貨幣の大部分は本土の寛永通寶であつたが、亦洪武通寶・永樂通寶など明朝時代の古い支那錢や乾隆・嘉慶・道光・咸豐など清朝時代の貨幣も散見するのであつた。それは明の初永樂年間に明朝より永樂錢を賜はつたといふことが史上に見え、其後も五百年間支那貿易が絶えず行はれてゐた關係上支那錢の流入したのは當然のことである。長祿二年（皇紀二一一七）尙泰久王は永樂・宣德の例に依つて銅錢を賜はらんことを請うたが許されの中

なかつた。それで泰久は大世通寶（全王を大世主（おほよぬし）と稱す）を鑄造せしめ、又其子尙德に至つて世高通寶（全王を世高主と稱す）を鑄造したらしいが、此等の古錢は近世之を琉球に於て發見することは出來なかつた。明朝以前は恐らく物々交換をなしてゐたものと思はれる。

琉球に於ける貨幣は前述の如く、日支併用であり近世多くは寛永通寶を使用してゐたのであるが國主一代一回冊封使渡來の時は公然の秘密とはいへ本土との關係を秘してゐた丈けに、寛永通寶の流通を憚り之をすべて市場より取隱させ其の代りに一種の珍らしい琉球錢を通用させてゐた是れ鳩目錢即ち支那人のいふ鵝目錢である。

此の鳩目錢は明曆二年（一六五六）大隅の人にて琉球に仕へた伊知地重陳等が造つたのであるが所謂鵝目錢の如き小錢を細い棕櫚繩に貫き、五十枚を以て寛永通寶の一枚即ち一厘に相當するもので、一繩二錢であつた。其の如何に輕小なりしかを察すべきである。沖繩で壹厘を五十文、二錢を一貫と稱してゐたのはさうした理由である。

此の鳩目錢は一貫毎に薩廳の封印を施し、冊封使滯在中寛永通寶の代錢に充て支那人が姿を沒すると同時に再び寶永通寶と兩替して薩廳に引上げるのであつたといふ。隨分苦しい外交政策であつた。猶ほ琉球に於て鳩目錢の鑄造より更に古く、之より大形の鵝目錢の行はれてゐたことは四百年前來琉した陳侃の使錄にも見えてゐる。曰く、

通商貿易惟だ日本鑄る所の銅錢を用ふ。薄小にして無文、十毎に一を折し、貫毎に百を折し殆んど宋李の鵝目錢の如し云々

之は現在でも舊家等に保存されてゐるが、事實は琉球に於て最初に鑄造されたものと考察される。猶ほ以上の外天保錢型や圓形の大型銅錢で「琉球通寶」といふのがあるが、之は近世薩摩が琉球の名を藉りて鑄造したものであつた。

三三、都人の度胸を拔いた琉球使臣

後土御門天皇の文正元年七月といふから彼是今から四百七十年位昔のことである。琉球國尙德王の使者が京都へ參り、方物（地方の物產）を獻上して退出する時、惣門外に於て鐵砲を數發打ち鳴らして都人士を驚顚せしめたといふ話がある。何でも室町幕府では南島から珍客が來たといふので大に歡待してやつた所、南蠻貿易で鍛え上げてゐる豪快な琉球人は饗應を受けて歸る時、

惣門の外へ出て祝砲を數發ズドーンと打上げたわけで、そんな大爆音を聞いたことのない都人は大に驚き、上を下への騒ぎを演じてゐたといふ。なる程ポルトガル人が種子ケ島即ち鐵砲を日本へ傳へたのは天文十何年かで、之より七八十年後のことであるから流石の都人もそんな音は聞いたことがなかつたに違ひない。

しかし琉球人は已にマラッカ海峽あたりで葡人と邂逅して居り、否當時葡人の東洋貿易に於ける唯一の商敵は勇敢なる琉球人であつたのであるからそれ程早く鐵砲を輸入してゐたかも知れない。或は本當の鐵砲ではなくして、支那から傳習して來た「火箭」であつたのではあるまいか。

いづれにしても本土人の知らない新火器を擔いで遙に京都迄のぼり、禮式の祝砲をあげて都人士の度胸を抜いた南島人は實に痛快なものであたに違ひない。

三四、琉球浦島物語

昔南風原間切與那覇村に穩作根子と呼ぶ氣品の高い瀟洒な一人の若侍があつた。

或る日、此の侍が今の與那原の附近なる與那久濱のあたりを逍遙してゐると一結びの漆黑な長い髪が眞白い珊瑚の砂の上に落ちてゐるのを拾ふた。彼は、之はきつと高貴な方の落しものであらうと思ひ如何にかして落主に返さうと其附近をしばらく歩き廻つてゐたが、其の主を見ず次の日亦彼は此の髪を鄭重に持つて與那久濱を彷徨してゐると果せるかな王女のやうな容貌美麗此の世の人とも思はれぬ御上品な姫様に逢つた。

姫様は「これは妾の落しもので探しに參つたのであるが貴公は眞に良いお方です。ついては御恩返しに御獄待申し上げたいから妾についておいで」といつて海底深く引いて行つた。侍はおそる〳〵ついて行くと、海は忽ち開けて大路となりやがて龍宮についた。

仰ぎ見ると首里城の様な殿閣が雲表に聳え御殿の中には神様が珊瑚の屏風を背にして坐し、侍を招いて其の側に坐せしめ、大いに酒席を設け海中の珍味一として備はざるものなく歌舞管絃の樂しみ比すべくものもなかつた。覺へず三月程滯留して色々のもてなしを受けたがついに故郷を戀ふるの情切なるものがあり暇乞を告げた。神様乙姫様の申すに「貴公此處にあることとすでに塵世三十三代を經てゐる。最早故郷に子孫もゐない。神となつて樂しみを此に享くるがよからう」と。侍は久しからずして愈々辭去することになつたので姫は紙包を授けて言ふに「貴公これを携

さへて歸られよ、向ふ所即ち開けて道とならん。若し故鄉に身を托するところ無くば再び之を携へて歸り來られよ。切に此の包を開くことのないやうに」と。侍は包を拜受して門を出でたるに忽ち大路開けしばらくにして與那久濱に到り、つひに產聲を上げた懷かしい與那覇の村にたどりついた。果せるかな里人たちは一人も相識るものがない。即ち鄉人に向ひ一宅を指さしてこれは「昔の我が住家である子孫は何方にあるか」と問へば、鄉人皆笑つて痴人となし、取り合ふ人もない。彼はせん術なく村の前なる一丘に登り携へて來た桑枝を坐側に挿し、しばらくの間休息してゐたが何かよい考へも浮び出るならんと思ひ出して包を開き見ることにした。

すると包の中から忽ち煙の如き白髮が飛び起つて彼の頭に附きこれと共に老衰極まりつひに立つことさへ出來ず死んでしまつた。里人集まつて即ち遺骸を葬り、後世その森を穩作根(おまねだけ)嶽と名づけ神嶽として尊崇し今にこれを祀つてゐる。琉球國由來記にオサン嶽神名コバッカサノ御イベとあるは即ちこれである。

著者の實地調査する處に據ると此の物語は凡そ五百年近い昔のことで、與那覇村の奥には今も「御殿小(ナドンクワ)」と稱す方一間半の小祠が殘つてゐて村で此の建物の葺替を營み「御サン子」の靈を祭

年間つて居り、澤岻(タクシ)、嘉手苅(カテカル)等の門中は正月三日と三月節句、御水撫(オミナ)での日など一門中此の小祠を禮拜してゐるのである。

三五、武備の撤廢と中央集權

曩に群雄割據時代の項に於て述べたやうに凡そ六百年前、玉城王の治世中政務懈怠して國政大に衰へ、下島尻世の主なる大里按司は遂に島尻の大部分を領有し、今歸仁按司は國頭地方を領して分立し、中山は僅に中頭地方と首里・那覇附近を保つに過ぎなかつた。

かくて一二代凡そ四五十年後中山察度（二十三年）が明の太祖の招諭を受けしより、大里按司は山南王、今歸仁按司は山北王と僭稱して同じく明國に通交し、三王覇を競ふこと凡そ百年に及んでゐた。處が英傑尙巴志が島尻東部佐敷の一角から興り一擧にして東大里城を屠り、應永十一年には中山王武寧を滅ぼして之を併呑し、更に十餘年の後山北王を討つて二山を合し、十餘年後又山南王を平げ遂に百數十年の禍亂を一掃して三山一統の一業を成就した。

けれども之より三十年の後には、勝連按司阿摩和利の亂があり、それから凡そ十年にして第一

尙氏の統は絶えてしまひ、次に現尙侯爵家の始祖尙圓王が推戴せられることになつた。

尙圓の子尙眞王は天資英明十有三歳にして父業を繼ぎ、五十年の長い間位にあつて政務を勵まし、治績隆々としてあがり、天下を太平に導くことに努めた。就中特筆すべきは金銀の簪及冠を制して貴賤の分を定め以て秩序を明にせしこと、武備を撤廢し然る後各采邑に割據せる諸按司を首里に聚居せしめ所謂中央集權の制度を斷行せしこと等であつた。

彼は先づ豪族や武士階級の所持してゐる刀劍・弓矢・槍等の武器を集めて之を藏め、次に首里へ移居を命じて大首里を建設し、專ら藝術の奬勵に努め音樂・繪畫・宴遊等に依つて臣庶を樂ましめ、外は海外貿易を旺にして經濟の基礎を鞏固にし且つ諸國の文物を輸入して獨特の琉球文化を創造せしめ、城廓を擴張して壯麗にし、殉死を禁遏して良俗に導く等空前の治績を擧げた。此の時代は琉球人が最も意氣潑剌、勇剛驍健の氣象に富み、史家の所謂「黃金時代」であつた。

さて武備撤廢・中央集權は行はれたが、南海の天下は未だ全く太平とまではゆかず、其子尙淸王時代に大島征討があり、又倭寇防禦のため那覇港口にヤラザ森城を築造したり、次の尙元王時代に倭寇の擊退及び大島征伐などもあつて慶長十四年島津氏の琉球入を最後の戰として爾來三百全く文字通り太平に歸し所謂「戰爭を知らざる國」になつてゐたのである。

三六、寶刀物語

古琉球に於ける武器はどんなものであつたか？といふ質問をよく受けることがある。それは日本本土と同じ弓矢・甲冑・刀劍・槍・薙刀の類である。然らば此等の武器は此の土地で製造したものであつたか、又本土より移入したものであつたか？といふのが第二の問になつてゐる。由來琉球には鐵を產しないので、其の原料たる鐵は牧港や與那原あたりで本土の商船が商つてゐたといふ文獻があり、海外貿易の品目中にも日本刀があるから甲冑とか名刀とかいふものは多く本土より移入してゐたであらうと思はれるが、亦當地で名刀を鍛えたといふ記錄もあり、南島獨特の製作らしいといはれてゐる寶刀もある。

北山王寶刀千代金丸　應永二十三年（皇紀二〇七六）尙巴志に滅ぼされた北山王攀安知（はんあんち）の所持してゐた累代相傳の寶刀「千代金丸」に就いて記して見ると

山北王今は是迄ぞ、今一度最後の合戰して心よく自害せんと……千代金丸として重代相傳の大

刀を佩き、兄弟一族只十七騎、三千餘騎の眞中に懸入り面も振らず火を散らしてぞ揉合ひける……去る程に山北王某を招いて二の丸へ引下り神代より城守護のイベとて崇め奉りし盤石あり其前にて宣ひけるは、今はイベも神も諸共に冥土の旅に赴かんとて腹掻切り、反す大刀にて盤石イベを切破り後様へ五町餘りの重間河へぞ投入れ給ふ。（以上中山世鑑）

百年の後流れて水漂溪に至り、光天を挿す。伊平屋島の人之を獲て中山に献ず、今王府第一の寶劍とす。（中山傳信錄）

此の千代金丸は現に東京尙侯爵家の所藏に係り其の實物寫眞は大正十四年十二月發行啓明會第十五回講演集の口繪に載せてある。刀身二尺三寸六分、明治三十二年小松宮殿下台臨の折、御感賞を蒙り其後も屢々御嘗をせられ給ひしといひ、又明治四十二年御手入の時斯道の諸大家より天下の至寶と激賞されたといふ。其の鑑定に依れば「室町時代の作にて、大功羽二枚完備せるは他に比類なき珍品なり、柄は短くして騎兵刀の樣式を具へ、頭槌形に成り能く握るに適す、柄卷の糸方古式にして頗る珍重すべし……頭菊紋の毛彫は想ふに琉球特有の作ならん、京都の作とは思はれず……之を要するに傳家の寶刀たるのみならず以て天下の至寶となすべし」云々

尙巴志の名刀　次に尙巴志王の佩劍に就いて球陽の記す所に依れば、

巴志幼年の時、嘗つて與那原に遊び鍛冶屋をして劍を造らしむ。鐵匠農具を造ることに忙しく劍を造ること甚だ遲し、巴志屢々往いて之を督促す、匠人詐つて巴志の面前に於て劍を鍛ふる眞似をなし、去れば即ち之を止め漸く三年鍛錬して成る。或日巴志此劍を帶び舟遊をなせるに忽ち大鱶躍上り舟將に沈沒せんとす。巴志直に劍を握りて突立つ、鱶怖れて逃去りしといふ。

其頃本土の商船鐵塊を載せて與那原に來り貿易をなす。即ち巴志帶ぶる所の劍を見て瀕りに之を求めんことを欲し、遂に滿載せし鐵塊を以て之を購ふ。巴志多くの鐵を得、兵器を造らず、悉く農民に分與して耕具を造らしむ、百姓感激せざるものなく、爲めに產業俄に興り民力充實するに至る。云々

寶刀治金丸　球陽尙眞王の條に云ふ、

嘉靖年間（皇紀二一八二——二一八六）王一寶劍あり、治金丸と名づく、其劍常に異なる、王京阿波根實基に命じ京都に赴かしめて之を磨かしむ、時に王后ひそかに其の劍樣を壁上に模寫して之を授く、實基命を奉じ高く此劍を捧げて將に王城を出でんとする時、君眞物の神出でて之を中

山門外に送る。彼京都に上り良匠を求めて劍を磨かしむ、磨匠その劍の鏌鋣（吳の國の名人）たるを知り密かに新劍を造りて之に換ゆ、實基之を悟らずして歸國す、此時神の出現なく人亦之を知らずして匣中に藏む。一日王后其劍を出して曩に模寫せし劍樣と相較ぶるに符合せず即ち此のことを王に告ぐ。王亦阿波根に命じ京に赴きて寶劍を還さしむ。彼再び京都に上り逗留すること三年、心を盡し力を竭し、多くの奇計を用ひて遂に寶劍を得て歸る。此の時女君神出現して前の如く中山門外に迎ふ。王大に悅びて深く之を褒嘉し、賜ふに采地を以てし擢んづるに顯爵を以てす。之より後威武偏く振ひ、名を中外に馳す。蓋し其の人と爲や性質敏捷にして剛直無私、勇力人に過ぎ局量宏遠なり、故に時人深く其の驍勇の凡ならざるを忌み、友交する能はず遂に人ありて王に讒言す。王之を殺害せんと欲すれども奈何せん斬誅の罪なし。是に由りて一日招いて王廷に入れ座及茶を賜ふの時、童子に命じ匕首を以て之を刺さしむ。實基手に寸鐵なく、只空手を以て童子の兩股を折破り、走りて城門を出で中山門外に至りて斃れて卒す。時に女君神あり、其人の罪なくして死せるを悲傷し、即ち其の尸體を收めて葬埋す。人其の尸の在る所を知らざるなり。今中山坊外石を堆めて墳と爲す、俗に京阿波根塚と傳ふ。或は亦然らん。

琉球國由來記に「眞和志森」此嶽中山門坊外にあり俗に虞姓京阿波根親雲上實基塚と云ふ。詳に考ふべからず。

首里城前守禮門側の尙眞王頌德碑に「みやこより治金丸こしみ玉のわたり候云々とあり。宮古史傳に、八重山赤蜂征伐の時の功勞者仲宗根豐見親が戰捷慶賀の爲め夫人同伴、中山に上りし時、寶劍治金丸と寶玉一顆とを獻上せり。此の寶劍は平良の內武太川（むたがは）の凹地に每夜光物現はれ豐見親の發掘せし刀なり云々とあり。

由來記に「キミコイシ嶽」安國寺圍內にありと見え、今師範學校長官舍の裏手に神々しい一本の蒲葵の生えてゐる塀の外が、此の嶽に當り、當時尙眞王の令妹「月きよらの君」なる聞得大君の御屋敷が即ち今の安國寺附近と官舍敷地とを併せた一帶の土地であつたやうである。

三七、面白い琉球の辭令

琉球より支那への文書は勿論漢文で、之は明朝時代琉球へ歸化した三十六姓の子孫なる久米村の人達が草案するのであつた。しかし薩摩及び江戸幕府に對する文書は、所謂候文で認めてゐた

のである。又藩内に於ける公文書等も候文を使用してゐた。茲に往時琉球政廳より發せられた辭令を掲げて見る。四百年前尙清王が南蠻貿易に從事する役人に與へた辭令書に、

しよりの御み事
たうへまいる
たから丸か
くわにしやは
せいやりとみかひきの
一人しほたるもい　てくこに
たまはり申
しよりよりしほたるもいてこくの方へまいる
嘉靖二年八月二十二日

「首里の御詔、唐へまいる、たから丸のくわにしや（官舍にて官職名）は勢遣富（せいやりとみ）といふ船の所管内の塩太郎といふ文子（職名）に賜はり申す、首里より塩太郎文子の方へ參る」といふ意である。

嘉靖二年は大永三年に當つてゐる。又更に一通には、

しよりの御み事
まなはんゑまいる
せちあらとみちくとのは
一人〇〇かひこほりの
まさふろてこくに
たまはり申
しよりよりまさふろてこくの方へまいる
嘉靖二十年八月十日

「首里の御詔、眞南蠻へ參る勢治荒富（せちあらとみ）號の筑登之（ちくどの）（位階名）は一人〇〇かね郡の一人眞三郎文子に賜はり申す、首里より眞三郎文子の方へ參る」の意である。嘉靖二十年は天文十年に當る。

今一つ神職に賜はりし辭令を掲げて見る。

しよりの御み事

きんまきりの
おんなのろは
一人もとののろのくわ
まかとうに
たまはり申
しよりよりまかとうか方へまいる
萬歷十二年　　月　　日

「首里の御詔、金武間切（郡）恩納村の、のろ（いのりを司る神職）は一人元ののろの子まかとうに賜はり申す。首里よりまかとうが方へまいる」萬歷十二年は天正十年であるから秀吉が關白に任ぜられる前年の發令である。

以上文書に依つて見ると、當時琉球の辭令は我が國特有の假名を以て書流してあり、拜受者の童名はあるが別に、大田・中村などといふ姓はないのであるから一國を一家とする大家族主義の精神が現はれてゐる。只年號が支那年號を用ひてゐるのは貿易の關係上毎年支那へ交通があるの

に比し、本土とは割合に疎遠勝な所から便宜之を用ひたのではあるまいか。尤も「寶文」など日本年號が使用されてゐるのもある。

此の辭令形式によつて考察しても琉球が古くから同文同種であることが分るであらう。

三八、琉球の位階と冠

諸按司を首里へ集中せしめた尙眞王は永正六年初めて金銀銅の簪を制定して貴賤の階級を區別した。又大永四年に至り六色の帕を以て貴賤を分ち、紫黃を貴とし、紅綠之に次ぎ、青を最下位とした。元和五年尙寧王代八卷冠を　　色を以て位を定め、諸官の等級を區別したといふ。

王　　子　　按司　　親方　　親雲上　　里之子親雲上
筑登之親雲上　　里之子　　若里之子　　筑登之　　筑登之座敷

而して王子の階級に二種ある一は王の子であり、一は殊勳を以て按司より昇進せるもの、例へば按司にして攝政職に昇進するものには王子の位を賜はるが如きそれである。按司は大名格であり、親方は上士、親雲上、里之子親雲上は中士、里之子以下は下士である。

次に位は正從の別があつて一品より九品に至り、王子は正一品、按司は從一品、三司官は正二品、他の親方は從二品、親雲上は三品より七品、里之子は八品、筑登之は九品である。簪は、國王は平素龍頭の金簪、一品の王子按司は金簪、二品の親方は金頭銀柄、三品の親雲上以下士族は水仙花形銀簪、平民は全眞鍮簪を用ひてゐた。

國王の冠は尙巴志王代以來明朝より賜はる皮辨冠を用ひてゐた。之を王御冠（たまうかぶり）と稱へる。皮辨冠を用ふる時は龍文金筋入りの皮辨服を着し、犀角白玉帶を用ひるのである。王世子は烏紗帽（さんもう）を用ひ、王子は金入五色浮織冠、按司は五色浮織冠、親方は紫冠、親雲上は黃冠、里之子以下は紅冠小吏は綠冠、平民は青冠であつた。

以前は一丈三尺の布を頭に八重に卷付けてゐたので之を帕（はちまき）と稱ふるに至つたが、尙寧王代元和五年より布片を輕木に卷き付けて帕を製し、等級によつて區別されたといふ。實物は鄕土博物館に就いて觀察せられたい。

三九、珍らしい古琉球の石碑

我が國でも石碑は全國到る處に建設されてゐる。しかし何といつてもその本場は中華民國であらう。流石は文字の國だけに、孔子廟其他史蹟等には碑林があつて盛觀を極めてゐる。由來石碑は昔支那から傳來したものと見えて、漢文で書かれることが相場になつてゐるといつてもよい。

琉球は五百年間明朝清朝との繫がりを持ち冊封使（勅使）の揮毫に成る名文達筆の石碑が多い。首里城瑞泉門の石龍樋泉を讃した石碑には、曰く中山第一、曰く暘谷靈源、曰く活潑潑地、曰く源遠流長、曰く靈脈流芬、曰く雲根石髓、曰く飛泉漱玉といつた調子に所謂堂々たる大文字の碑林がある。

支那は面子（めんづ）（面目）を重んずる國だけに外國へ派遣する使節は徒に官位の高きに拘泥せず必らず詩人で麗筆家であることが人選の標準になつてゐたと言傳へられてゐる。俗間傳ふる所によれば、寶曆六年（皇紀二四一六）尙穆王の冊封使全魁の如きは餘り達筆でなかつたので詩人で書家の聞えありし王文治（王夢樓）を隨員に加へ、彼をして代筆せしめたと言はれてゐる。しかし著者の事實に就いて觀るところでは詩人の詮議は別として筆は決してさうでなく、全魁も相當達筆で可成りに多くの筆蹟を殘してゐる。恐らく之は詩文も筆も隨員たる王文治は、彼以上だといふ

ことから誇大されたものではあるまいか。

偖て前置が隨分長くなつて仕舞つたが、此に述べんとする「珍らしい石碑」とはそんなことではない。琉球には支那は勿論、日本本土の何處に於ても容易に見ることの出來ない特殊な、否日本精神を發揚した珍らしい石碑を四百數十年の昔より此の方或は國王頌德碑、或は城塞築造碑、或は架橋碑、或は道路改修碑、或は官民墓碑として全嶋各地に建ててあるのである。

然らば日本精神とは何ぞやと問はれるであらう。それは漢文や漢字で書くべき石碑の型を破つて殆んどわが國字の平假名づくしで、然かも琉球で公文書に用ひられてきた御家流の達者な筆致で文章も和文並候文で認められてゐることである。猶ほ最も面白く力強く感ずることは剛健進取の氣象を以て海外に一大發展をなし、東亞貿易の覇權を掌握してゐたといはれる時代だけに、鼻柱が強く、此の和文や候文の中に何の憚る所なく、憶する所なく自分達の鄕土の方言を自由に使用してゐる一事である。左に其の例を擧げて見ると、崇元廟の下馬碑に（原文は御家流萬葉假名交り）（表）あんしもけすもくまにてむまからおれるへし（裏）「但官員人等至此下馬」とあつて漢文は裏面になつてゐる。

表の意譯（按司即ち一城のあるじも下司即ち身分卑き官吏も此處にて馬より下りるべし、の意）

次に、首里城前守禮門の側に建てゝある眞珠湊碑文は大永二年（皇紀二一八二）頃の建立と見えるが、御家流の假名及び草書にて

首里の王おきやかもいかなし天のみ御み事に　ま玉みなとのみちつくり　はしわたし申候時の

ひのもん

嘉靖元年みつのへむまのとし四月九日きのとのとりのへ（ひ）にきこえ大きみきみ〳〵のおれめしよわちへ　まうはらいの時に御せゝるたまはり申候……（下略）

此すみのことはは三人の世あすたへ（べ）

まかねたる　くにかみの大ほやくもい

まうしかね　かうちの大ほやくもい

たるかねもい　たくしの大ほやくもい

とあつて、「おぎやかもい」とは尙眞王の御名、「かなし」は、中古文にある「愛する人」のことにて此處にては「樣」といふ敬語、「きこえ大きみ」とは「聞得大君」にて王妹又は王女を以て任する

最高の女神官の稱「おれめしよわちへ」は「下り遊ばして」の方言「まうはらひ」は「祓ひ」のことに神に祈りて災難を祓ふこと「みせせる」は「神の御託言」

此のすみの文章の責任者は「三人の世あすたべ」即ち三司官（今日の書記官に當る）眞金太郎國頭の大やくもい（大やくもいは親雲上の語原なれど後の親方の階級に相當す）眞牛金河内（幸地）の親方、太郎金もい、澤岻の親方の三名が署名してゐる譯で、觀光客はよく此の拓本を土產に持歸られることを附記して置く。

四〇、驚くべき崇元寺の石門

那覇より首里へ行く舊道筋には國廟崇元寺や、琉球八社中の天久宮・八幡宮・沖宮などがある。崇元寺は舜天王以下歷代の王廟で今は尙家の私廟となつてゐる。廟に入る前に先づ注目すべきは外方から見た石垣で、中央の一段高い所に三個のアーチ型の門があり、左右に小さい通用門がある。如何にも大陸的で美の調和よろしく眞玉橋と共に、本縣石造建築中異彩を放つてゐる。伊東忠太博士は琉球隨一の美建築と推賞され、

此の門は規模大なら寸手法は簡單であるが、其の中央部と左右翼との取合せの自然なる、その相互の廣袤幅員の權衡を得たる、其の全部の輪廓の簡明にして要を得たる、其の線の少くして一も無駄のなき、數へ來れば限りなき美点が現はれて來る。一見素朴なるが如くにしてよく凝視すれば益々豐富である。一瞥粗野なるが如くにしてよく觀察すれば愈々高雅である。極めて無造作なるに似て實は苦心の作であり、甚だ淺薄なるに似て實は重厚深刻である。要するに獨創的意匠を試みたもので淸新潑剌たる氣分が橫溢してゐる。

と激賞して居られる。

廟は室町時代の創建で、和三漢七の混用といはれ、圓覺寺につぐ名建築だといふ。拜殿・神殿といつた二個の建物より成り、內部は松竹梅・唐草等支那式の繪畫を描き、赤い敷瓦をしきつめてあり冊封使渡來の時は先づ此の廟で先王諭祭の禮を修め、然る後冊封の儀典が行はれる。奧には壇を設け中央には爲朝の一子舜天王の神位、左右昭穆の配置によつて歷代封王の神位を祀つてある。廟域にあるテリハボク（方言ヤラブ）や五月頃火のやうな赤い花咲く梯梧の老木天を摩する數本の野椰子なども異國情緒をそゝる。

四一、琉球を經由した大陸文物

支那大陸の文化は、奈良朝以前より盛に我國に流入し、日本固有の文化と融合して花が咲き實がなつた。事實儒教にしろ、佛教にしろ或は其他の學術技藝にしても本家本元の支那に於てとうの昔に衰頽し廢滅したもので、我が日本帝國へ來て醇化され發達したものは數限りなくある。謂はゞ日本といふ島國は東西大陸文化の溫釀地といつても過言ではない。

而して此等の支那文化は多く朝鮮半島といふ漏斗の口から我國に注ぎ込まれたのであるが、亦一方南清より琉球を經由して傳播したものも尠くない。例へば甘藷の如きは他の府縣では薩摩芋と稱へ仝地から傳來したことを物語つてゐるが、以前サツマでは琉球芋と呼び、琉球では三百三十年前南清より輸入當時の「蕃薯」といふ名稱から「ハンショウ芋」と呼び又唐芋ともいふてゐた。之が薩摩に渡つた經路は、寶永年中（皇紀二三六四——二三七〇）前田利右衞門といふ人が山川港に移入したのと、一方元祿十一年（皇紀二三五八）琉球尙貞王から種子島彈正久基に贈つたのを仝氏が己れの采邑なる種子島に廣めたのと兩方ある。青木昆陽が幕府の命に依り之を關東

に移植したのは延享元年（皇紀二四〇四）で三四十年の後に屬する。又甘蔗や砂糖の製法も大抵同じ經路で、琉球に於て砂糖を創製したのは元和九年儀間親方眞常が家人を福州に遣して其の法を傳へたといふから之も凡そ三百年になつてゐる。

それから孟宗竹は曩に琉球の使臣が福建省から齎らしたものを元文元年三月（皇紀二三九六）琉球藩から二十顆を島津公に贈り磯の別邸に栽えしめたのが其の嚆矢で、漸次日本各地に播布するに至つたのである。薩摩芋や孟宗竹の我が國利民福に貢獻のあつたことは寔に甚大なものといはなければならぬ。

其他七島藺や西瓜なども琉球を經て本土へ移入されたものであり、三味線も正親町天皇の永祿年間（皇紀二二一八——二二二九）琉球より蛇皮張りの器を傳へ和泉國堺津の琵琶法師中小路といふ盲人が初めて彈出したといふことである。

三味線は元來埃及で創始されて東漸したもので、安南・シヤム及び支那では紫檀や鐵刀木（たがやさん）を用ひて作り、南方產の蛇皮で張つてあるが、琉球では三四世紀前から竿は國產の黑木を用ひ、胴は槇や樟などを以て作り、皮のみ南清より蛇皮を輸入して張つてゐる。しかし之を蛇皮線とは絕對

に稱せず、名稱は三線と呼び、胴の張り方を「蛇皮張り」と稱へてゐるのである。三味線は日本本土に傳來してから竿も長くなり、共鳴部の胴も大きくなつたので絃音が壯にしかも大きく鳴り大衆音樂向になつたのは一大進歩であらう。只數百年後の今日迄依然として「紫檀竿に花林胴」と稱し南國產の材料で製作することを本則としてゐるのは、傳來の歷史を物語るとはいへ聊か心細い次第ではあるまいか？

四二、琉球瘡の傳播

之は恐縮に堪へないことではあるが、醫學史の一頁として斯道の參考に記して置く。

單に「琉球瘡」といつても分りかねるが「黴毒」といつたら存ぜぬ仁はあるまい。

抑も之が始めて我國に傳播したのは永正九年（皇紀二一七二）で當時は之を「唐瘡」又は琉球瘡と呼んでゐたとのことであるから、此の名稱よりして略其の傳來の道筋を察知することが出來よう。

支那に於て黴毒が始めて流行したのは、明の弘治正德の間で、南洋へ出稼した所謂華僑の連中

がポルトガル人の病毒を感染して來て最初廣東地方に傳播し、忽ち揚子江方面から支那全土へ蔓延するに至つたといふことである。

琉球では之を「南蠻瘡」と稱して居り、又當時は尙眞王時代で南蠻諸國即ち安南・シヤム・爪哇・マラッカ等と交通貿易を盛にしてゐた事情から見て醫學界では琉球の航海者達が此等の土地で直接に仕入れて歸り、而して之を九州や京阪の諸港へ持込んだのであらうといはれてゐる。琉球の古謠オモロに、

しより、おわる、てだこが
うきしま　は　げらへて、とう、なばん、よりやう、なはどまり

（首里に居られる王樣が、浮島即ち那覇の港を修理して、唐・南蠻の船の寄合ふ那覇泊となした）

との意であり、又

まはへ、すづなりぎや、まはへ、さらめけば
たう、なばん、かまへつで、みおやせ

（眞南風がそよ〳〵吹くと、鈴鳴丸が、唐南蠻より貢物を積んで、吾が王に奉る……）

ともある。（前記・辭令の項參照）

其の頃ポルトガル人は漸く東洋貿易の覇權を握り頗る冒險性に富むと共に亦放逸遊蕩で、土人の婦女を弄ぶものが多かつたといふから、黴毒は彼等に依つて蔓延し、隨つて貿易上彼等の唯一の敵手たりし琉球人が之に感染せしものといはれ、而して當時の琉球人が交易してゐた土地は薩摩・博多・堺等の諸港であつたから右の病毒も最初此等の貿易港より各地へ傳播したものであらうと言はれてゐる。

四三、豪快な秀吉の書簡

天正十五年關白豊臣秀吉は島津氏を討ちて遂に九州を平定し、翌十六年島津義弘に命じて琉球を招諭せしめた、よつて島津氏は大慈寺の僧龍雲を遣はし、手書を尙永王に贈つて之を諭した。

文に曰く

方今天下一統し、海内風に向ふ。而して琉球獨り職を供せず。關白方に水軍に命じ、將に汝が國を屠るべし。今の時に及びて宜しく使を遣はして罪を謝し、貢を輸し職を修めば則ち國永く

寧からん。茲に告げ示す。

と尙永王之を諾し、方物を贈つて微忱を表はしたといふ。仝年王薨じ、尙寧入りて統を嗣いだ。

天正十七年尙寧王は天龍寺の僧桃庵を正使、安谷屋宗春を副使とし書翰及び土產を齎らして薩摩に至らしめた。島津義弘は琉使を率ゐ京都聚落第に參候して關白に謁見した。其の表文に曰く

日本六十餘州下塵を拜望し幕下に服し、加ふるに高麗南蠻も亦威風に偃すと、我遠洋の小國一禮に及び難しと雖も、島津公大慈寺の西院和尙をして仰せを豪らしむるに由り、天龍寺の桃庵を上せ、明國齎らす所の漆器及土物を進め一禮を爲さん。

と秀吉大に喜び、席を設けて使臣を饗し物を賜ひ、又使臣を大阪に留め義弘に命じて優遇せしめた。秀吉左の書翰を桃庵に授けて琉球王尙寧に贈つた。

玉章披閲、再三薫讀、殿閣を同じうして芳言を聽くが如し。抑も本朝六十餘州は尺寸の土地と雖も悉く我が掌握に歸せり。頃ろ更に雄志あり政化を異域に及ぼさんこと亦我が素願なり、會たま貴國の使節先づ來る。凡そ物遠きより得るを珍といひ、罕に觀るを奇とすべし。今遠方の珍奇を得る。何の悅びか之に如かんや、其地千里を隔つと雖も、今より以後深く交誼を執らば

異郷も亦四海一家の情あり。因て本邦の產物を贈り聊か以て謝を言ふ。餘薀は島津義久・天龍寺桃庵東堂に吻付せり。

此年の秋尙寧王は書を島津義久に贈り

關白八州に克つと聞く、爰に建善寺大亀和尙、茂留見里大屋子を遣はして之を賀す。弊邑困悴の故を以て方物を輸すこと能はず。且樂工を獻じ聊か以て儀と爲さん。公其れ我が爲めに辭せよと燒酎壹甕・太平布（宮古上布）二十端・苧羅貳端を献じて聊か微衷を表はした。

天正十九年、嘗て琉球に往來せし原田孫七郎といふ商人が秀吉の侍臣に向ひ「秀吉公明國征伐のことを通告せば琉球王も驚いて來聘するであらう」と勸めたので、關白其の說に從つて左の書翰を尙寧に贈つた。

吾卑賤より運に膺りて興る。威武を以て日本を定め、六十餘州已に掌握の中に入る。是に於て殊域遐方朝貢せざるなし。而して爾琉球自ら彈丸の地を擁し、險と遠とを恃み、未だ聘貢を通ぜず。今特に爾に告ぐ。我將に明年春を以て先づ朝鮮を伐たんとす。爾宜しく兵に將として之に會すべし。若し命を用ひずんば我先づ乃が國を屠り、玉石俱に焚かんとす。汝其れ之を思へ。

と諭し、又島津氏に琉球より征韓の軍兵を出さしめよと命じた。然るに琉球は久しく安を偷みて武に慣れず、寧ろ糧食を課するに如かずと、關白に稟請し、許可を得て七千人十ヶ月の兵糧を翌年二月迄に薩摩坊の津に輸送し而して高麗に達せしめよと命令した。

文祿元年、秀吉又島津氏をして琉球の兵賦を督促せしめたので、翌年尙寧王は天王寺の僧菊隱及び摩文仁親方に命じ、糧食を齎らして薩摩に送致せしめた。

之より五年の後太閤は薨じたが、後年此の兵賦の未納が物議を惹起し、遂に慶長十四年に至つて琉球は島津氏に征服せらるゝことになつた。

四四、古琉球人の詠める和歌

琉球でも室町時代あたりから已に國文が通用されてゐたらしく、尙圓流の書家もあつた。二百五六十年ばかり前に識名盛命といふ國文學者が現はれてゐる。彼が大隅の八幡宮霧島の御神に詣でし紀行に次のやうな歌がある。

○軒端の梅のさかりなるを見て

墨染の袖なつかしき梅か香や
こころのはなの匂ひなるらむ
○夜半鐘聲を聞きてねられぬ儘に
旅枕更けゆく空のさびしきに
こころくたくる鐘の聲かな

當時は諸國の關門嚴しく、僧侶の外は通行困難なりしに依り彼は剃髪し、瑞雲と號して京都へ遊學し、國文及和歌を學んで歸國し後三司官に拔擢せられた。其後も幾多の和文學者が輩出してゐる。

○名所を尋ねて　安仁屋賢孫（元文五年）
汲む人の心も涼し音すみて
名さへきよ田の山のやり水（許田の手水をよめる）
岩かねの松の梢をくくりきて
流れ絶えせぬ千代の瀧つ瀨（轟瀧をよめる）
○糸滿里主を憶ひて　惣慶忠義（寛永五年）

花と見し人の姿も夢なれや
うつゝにのこるあとしなければ
うきふしの數を身にそふ呉竹の
千代もといひし人にわかれて

二百年前尙敬王時代には傑出せる幾多の人才を出したが、國文學者平敷屋朝敏もその一人で彼は苦の下・貧家記・萬歳等名高い創作を遺してゐる。彼の歌は

○繼の歌よみける中に
しはしともいはれぬつらき色なから
またかへりみる山吹の花
いかなれや夢はかりなる手枕に
かはさぬ中の忘れかたきは
○年の暮を詠みて　國頭朝齋
旅衣いそく道にもしたふかな

さすかに年の暮るゝわかれは

○福州にて琉球の友どち北京のことを問ふに

海山のひろきかきりはいひしらす
夢路を辿るもろこしの空

○富　士　山　　讀谷山王子朝憲

人とはゞいかにこたへん言の葉も
及はぬふしの雪のあけぼの

○伏見の里に月を見て

いつもかく悲しきものか草枕
ひとりふし見の夜半の月かけ

○深　草　に　て

降る雪にうつらの床のうつもれて
冬もあはれはふかくさのさと

○脫

波風もをさまる君か御代なれは
みち遠からぬ日の本の國

○舊　宅　殘　花　　浦添王子朝薫

すみすててぬしはいくよの春ことに
あはれさくらの誰を待つらん

○品川驛にて雪を見て

武藏野の原とそきゝし古へは
いさしら雪の軒つつきなる

置縣後に至り御題に對し詠進して入選の光榮を荷ひし、護得久朝常の歌に

○田　家　煙

小山田の煙の末に見ゆるかな
としのみつきのあまりある世を

又本土人で優れた琉歌を詠んだ人も甚だ尠なくない。

四五、薩摩と琉球

島津忠國が謀叛者足利義照を誅した功に依つて將軍足利義敬より南海十二島を加賜せられたのは嘉吉元年（皇紀二一〇一）であつた。しかしそれは琉球王が將軍の繼統や島津氏の襲封毎に慶賀使を派遣する程度に過ぎなかつた。

然るに之より百五六十年後には秀吉の朝鮮征伐の時に課せられた兵糧の未進が問題の種子を蒔いて兎角薩琉の關係は圓滿を缺くやうになつた。當時琉球の三司官には明國に留學して來た謝名親方（唐名鄭迥）といふ豪傑がゐたが、彼は支那の强大を恃んで本土を輕視してゐたので、曩に兵糧の不足分は銀を薩藩から借りて之を補ひ、年々米を送つて償却しようと約束しながら之を履行せず、剩へ督促の使者を侮辱する等不法の行爲があり、又德川氏が三十年間廢絶してゐる明國交易の復活方につき琉球に依頼せるも固く之を拒みて從はなかつたので、島津氏は遂に德川幕府の許可を得て琉球征伐を斷行することにしたのである。

慶長十四年薩摩では義久・義弘・家久の三公議を決して樺山久高を大將に、平田增宗を副將に命じ、總勢三千餘人、戰船百餘艘、三月薩摩山川を發し、大島・德之島・沖永良部等を降し一路那覇港へ向つたが、防備嚴重なりしを以て船を運天港へ引返した。

尙寧王諸臣に議して和を結ぶに如かずとなし、三司官名護良豐等を今歸仁へ遣はし、只管罪を謝せしめたが久高等許さず那覇に於て對談すべしと之を除けた。かくて水軍は運天を發して中頭の大灣渡口へ着いた。

陸軍は運天に上陸し途中山林民家を燒拂つて進軍し、途中の琉軍を破つて大將久高の軍勢は遂に首里城を取圍んだ。然るに琉球は尙眞王以來武具を撤廢して已に一世紀を經て居り、しかも薩軍は火繩銃を携へて居るので到底敵對することは出來なかつたのである。

那覇はかねて海岸に柵を繞らし、防備を嚴重にして敵の上陸を禦ぎ、琉軍の將謝名は天妃城に據つてゐたが、薩軍の副將平田增宗の一隊、水路那覇に殺到し直ちに全城を襲うた。城兵能く防戰したけれども遂に敗れ、謝名は首里へ逃走中捕縛されてしまひ、那覇四町の軍士も勇奮身を挺して戰つたが力及ばず生殘つてゐた琉球武士は泉崎地藏堂の下で悲慘なる最後を遂げてしまつた。

此に於て那覇を平定した薩軍は破竹の勢で首里へ進擊し、樺山大將の本隊と合して愈々總攻擊を開始した。尙寧王は越來親方を大將とし軍兵を發して防戰せしめたが甲斐なく、遂に謝罪狀を捧げて降服を願出させた。大將久高は衆議の上之を許可することにし、やがて城下の軍を那覇へ撤退せしめた。

而して久高增宗は具志上王子並三司官を召して訓辭を與へ、後更に「國王以下謝恩の爲め薩摩に到るべし」と嚴命した。

愈々久高等は尙寧王以下琉球官史二百名の俘虜を乘せて鹿兒島へ凱旋した。

四六、尙寧王東上して將軍に謁す

尙寧王は麗城に入り、島津三公に對面、叩頭三拜して罪を謝し御馬代白銀千枚其他數々の方物を献じた。三公聊かも咎むることなく愉悅の色を表はし溫情を盡して之を慰藉し、且屢々饗宴を開いて旅愁を慰めた。

偖て捷報幕府に達するや、將軍秀忠手書を島津家久及び義久・義弘に贈り、前將軍家康公も亦感狀を家久に送つて琉球を管領せしめた。

薩摩の琉球征服には元より遠大の抱負を藏してゐるので、彼は聊かも琉球王國の形式を破壞することなく、「支那との通交は前例の通り之を取計ふべし」と達し、具志上王子等を歸國せしめて進貢の準備をなさしめ、明國使節の王舅には池城安賴（後三司官）を之に任命した。是れ實に意想外なことではあるまいか。かくて此年竿入奉行其他吏員百六七十名を琉球に遣はして全島の土地を査檢せしめ租稅の法を定めしめた。

慶長十五年五月家久は尙寧王以下二百餘名の琉人を率ゐて鹿兒島を發し、先づ駿河に至つて前將軍家康公に謁見し太刀一腰白銀千枚を献じて琉球を賜ふの恩を謝した。家康公散樂を設けて家久・尙寧を饗應し、令息常陸介賴宣（後の水戸公）鶴千代賴房（後の紀伊公）の二公子を舞はしめ以て歡待した。

之より家久等一行は更に駿府を發して將軍秀忠に謁し、尙寧より緞子百卷、虎皮十枚、大平布（宮古上布）二百匹、芭蕉布百卷、白銀一万兩、長光の太刀一腰を將軍に献上して恩を謝し、又儲君家光公に太刀一腰、緞子五十卷、大平布百匹、芭蕉布五十卷を呈した。

將軍、家久・尙寧の二人を賜賚し、且尙寧を慰懃して「琉球王一系相繼ぎて今に至る、他姓を立つべからず、速に國に歸り祖先の祭祀を奉ぜよ」と。尙寧大に喜び、家久を招き手親ら茶を點して饗應した。

尙寧の江戸往還に方りては、幕府は沿道の城邑に命じて道路を修め、橋梁を改修し、舟船を具し、人馬を給せしめたといふ。

翌慶長十六年八月家久、尙寧に歸國すべき旨を傳へ、大島・喜界・德・沖永良部・與論の諸島は琉球王國より分割して薩摩の直轄に編入した。

之より後琉球は每年薩摩に、芭蕉布三千端、上布六千端、下布一萬端、唐芋千三百斤、綿子三貫目、棕梠繩百房、黑繩百房、莚三千八百枚、牛皮三百枚を納むることとなつたが、後年に至り多くは之を黑糖に改めしを以て大阪市場に於ける琉球砂糖は殆んど薩摩の專賣の狀態となり、貢納布たりし宮古上布も今に薩摩上布と稱せられてゐる。

猶ほ家久は書を尙寧に授けて「明國通交復活」につき福建の軍門に贈らしめた。文に云ふ、

（前略）一は日本商船を明國に至らしめ、二は明國商船を琉球に來らしめて交易し、三は遣使をして年々物資の有無を相通ぜしめば兩國の民を富ましむるのみならず、明國も亦倭寇の爲めに兵備を嚴重にするの煩を免るべし。若し之を許さずば日本西海道九國數萬の軍をして明國に進寇せしむべく、明國數十州の日本に隣するもの必らず近憂あるべし。是れ日本大樹將軍の意なり、伏して冀くば軍門老大人其の一を許さば小邦（琉球）大に大明の德に浴し、且日本の夙志を遂げん。是れ天朝遠きを恤み、小を慈むの仁心なり、伏して鄙忱を伸べ仰いで尊炤を祈る。

と、尙寧止むを得ず之を諾した。

家久又家臣に命じ、條約十五ケ條を制定して尙寧及び三司官に授けた。重なる條件左の如し。

一、薩州御下知の外唐へ誂物停止の事
一、無職の人に知行を遣はさざる事
一、諸寺多く建て間敷き事
一、薩州免許なき商人許容すべからざる事
一、年貢公物定租等定規を違へざる事
一、琉球より他國へ商船一切遣さゝる事

一、日本京判桝の外用ふべからざる事

四七、沖縄の俚諺

君臣一、降ゆる雨や返されても、御君主の御恩や報さらぬ。
（降る雨は返せても君主の御恩は報い盡せぬ）
親子一、親の恩儀や毛筋も報らゝぬ。
（親の御恩は毛筋程も報いることは出來ぬ）
一、天の群星や數まれても、親の教訓や數まらぬ。
（天の群星は數へ盡すことが出來ても親の教訓は數へ盡されぬ）
一、子產ちんちど親の恩や知ゆる。
（子を產んでこそ親の恩はわかる）
一、子ど寶（子こそ眞の寶、の意、「ど」は「ぞ」の訛）
一、錢とや笑はらん、子とど笑はれゆる。

（錢を積んでも笑つては暮せぬ、子供とこそ笑つて暮せる）
朋友一、善人や千貫し買うても友人爲。
（善人は千貫文で買つても友達にしたがよい）
一、善者連れれば疊のへり踏むい、惡者連れゝば綱繩かゝゆん。
（善人と交れば疊の上で暮せるが、惡人と交れば捕繩にかゝつて獄屋で暮らす）
一、シュクやシュクの連れ、鯛や鯛の連れ。
（シュクは小魚の名、牛は牛づれ、馬は馬連れと同意）
一、片手さあいや音や出ちらぬ。
（片手では音は出ぬ。兩手合力して初めて音が出る）
親類一、宗家榮えど枝榮え。
（本家が榮えて初めて分家が榮える）
一、肉や切つちも寄合ゆん。
（肉は切つても又元の如く、寄合ふ如く骨肉の間柄は絶縁しても又何時かは交際する）

一、他人とや離かれゆすが、骨肉とや離かれらぬ。
（他人とは絶交か出來ても骨肉の間柄とは出來ぬ）
報恩一、恩儀忘れれば闇の夜。
（恩を忘れる樣では闇の夜に同じ）
一、犬猫も恩や知ゆん。
（犬猫でさへ恩は知つてゐる）

四八、琉球の疲弊

尙寧王は二年五ヶ月振りに歸國して見ると、國情全く一變して他國の感を抱いたといふ。之より二百數年琉球は名實薩摩の附庸となつた。しかし薩摩は琉球を征服したけれども敢へて之を破壞せず恰も幕府が長崎に於けるが如く琉球王國を利用して支那貿易を營ましめ、其の利潤を壟斷して自國の經濟的基礎を鞏固にした。他日薩摩が、長・土・肥の三州と共に討幕に參加して維新の大業を翼贊し奉るに至りしは其の經濟力の强大なりしにも依るべく、隨つて三百年間之に貢ぎ

し琉球は所謂椽の下の力持には過ぎないけれども、其の功績亦沒すべからざるものあるを認めなければならぬ。

爾來琉球は支那以外の諸國との貿易を禁止せられて、海外發展の雄志を挫かれ、爲めに昔年の勇敢な氣魂は漸次失せてしまひ、士族は自暴自棄に流れて遊惰の風冗長し、百姓も亦搾取に惱まされて勤勞を好まざる弊に墮し、此に於て古來勇剛驍健なりし民族性は漸次退嬰保守的となるに至つた。

然るに明治十二年廢藩置縣となり、一視同仁聖恩に浴し、再び自由の天地に飛躍するの環境を惠まれてより海外發展の意氣勃然として甦生し、今では十万近い同胞が萬里の波濤を蹴つて布哇南北アメリカ及び太平洋諸島等至る處に遠征し、祖業を恢弘しつゝある。しかし亦他の半面に於ては、薩摩は琉球の政治に干涉して其の內亂を防遏し、民人の疲弊及び財源の枯渴を豫防することに努めた。又慶長後は彼我の往來頻繁に趣きしため本土の文化が急激に南島に移入せられてよく同化されたことは看過すべからざる事實といはねばならぬ。

四九、支那の革命と琉球の態度

前述の如く琉球と支那とは何等民族的繋がりはなく、只名を進貢に藉りて貿易の巨利を得んとする經濟的關係のみであつたから別に彼に對して大義明分などといふ義理はなかつた。殊に慶長後薩摩が琉球に對する實權を握つて以來當地の爲政者は支那に革命が勃發して十數年乃至二三十年も渡唐斷絶する場合の非常處置として自給自足に根本を置き、薩摩への進上物はすべて琉球土產のみで間に合ふ樣平素準備すべきであると戒め、且め日本本土に對しては萬事苟且にしてはならぬと警告を發してゐる。

正保元年（一六四四）尙賢王は使者を明國に遣はして襲封を請うたが、折しも支那は革命の爭亂が起り、清の世祖は明を亡ぼして國號を大清と定め、元を順治と稱してゐた。當時明の一族が福建に依據して年號を武隆と呼び、中山王尙賢を招諭した。王は毛泰久（豐見城親方盛常）等を遣はし閩に赴いて隆武帝の即位を賀せしめた。一行が公事畢つて歸國せんとせし時、清朝の大將軍貝勒兵を率ゐ來つて隆武帝を亡ぼしてしまつた。是に於て毛泰久等は大に氣轉を利かし、部下

の久米人（明國歸化人の子孫）に命じ明服を清朝服に改めしめ福建に至つて貝勒將軍に謁した。而して將軍より北京に赴いて清帝に朝覲の禮を修むべきことを諭され、翌年四月將軍に隨つて京師に赴き世祖皇帝に拜謁した。清帝大に琉球の歸順を嘉し、物を賜ひ盛宴を催して慰撫欵待せられた。

右のやうな有樣で兎角琉球に於ては支那の動亂は對岸の火災も同樣で勝敗何れにあるにせよ敢へて關する所ではなかつたらしい。

五〇、勇敢なる通事林氏の話

今より三百三十年程前（慶長十五年）國主尙寧王の時代に明國への使者蔡堅（喜友名親方）東風平親方朝香などの一行が福州から北京へ上り、用務が畢つて歸國への途中颶風に遇つて、數日漂流したことがあつた。其の間渺茫たる海洋の中をさまよひ一山一島の影さへ發見せず舟人皆途方に暮れてゐたが、數日の後遙か彼方に島影を認めたのであつた。喜び勇んで船を近づけて見れば山高く綠樹鬱蒼として居る。喜友名は船中の人に尋ねたが誰も知らない。

さて永い間海中に漂ふたため飲料水が盡きて皆は渴ききつてゐた。そこで彼等は船を此の地に泊め、岸に登つて水を得ようとした。その時林氏眞志保通事が言ふには「水のないために今や我等は死に瀕してゐる。けれども此の國の名を知らず事情も知らないのであるから、若し水を得ようとして我々船員一同擒にでもなる樣なことがあつたら王命を誤り又多數の人命をも捨てることになる。それで私が一人で上陸し萬一のことがあつたら旗竿を振るから其の時は速に舟を去らしめよ、決して私一人の生命を顧みることなかれ」と言つて一人で上陸して行つた。

そして水を汲み入れようとしてゐる所へ鋒をもつて近づいて來る土人を見たので彼は一生懸命に旗竿を振つた。舟中の人々はそれを見て即時に錨を引き載せて去つてしまつた。眞志保通事は直ちに虜にされて其の國の都に曳いて行かれた。そこは朝鮮の京城だつたのである。彼は朝鮮王の前にて詳かに事の顚末を述べた。王は深く之を憫んで衣食を與へ其の上女人まで賜うて側に侍せしめた。後に北京へ護送されそれから轉じ翌年福州から無事歸國することを得た。

五一、貿易船の歸來と那覇港の騷動

支那から來る勅使の船を「冠船」といふに對し、當方より派遣する進貢船のことを俗に「唐船」といつた。然かも唐船は明朝以來連年聊かも懈怠せざるのみか、毎年二貢三貢敢へて辭する所でなかつた。かうなると先方が其の繁に堪へず根負けして遂には之が制限を設くるに至つたといふ。慶長年間薩摩から征服されて後の琉球は逐年疲弊の一途を辿るのみで困憊に陷りつゝあつたにも拘らず猶ほ進貢は怠らなかつた。明朝では「琉球新に破殘を得、財置きて人乏し自ら繕聚し、十年の後物力稍完きを俟ちて復貢職を修めよ」と、十年一貢を命じた。然るに琉球は一向破殘の色なく入貢又入貢して福建官吏の叱責に遇ひ、矢張り舊制の如く歲貢を請うて止まず、明國も遂に讓歩して五年一貢を許し、暫らく休養せよと諭した。之より二十餘年を經て嘆願の結果再び二年一貢に復したのである。

然らば貧弱なる琉球は何が故にかく頻繁に進貢を欲したか？是れ申す迄もなく名を進貢に藉りて貿易の利潤を得んとする魂膽なるは明々白々の事實である。

尙貞王以來は更に接貢船といふものを造つて進貢船出發の翌年那覇を解纜して福州へ赴き互市を營んで進貢船と一緒に歸つて來たから結局毎年派遣するのと同じ結果であつた。

さて唐船二艘の齎らし來る貿易品は金に換算して一万四五千兩といふ莫大なものであつたといふ。しかし夫れ程琉球の經濟と大きな交渉を持つ支那貿易ではあるが、颱風や低氣壓の絶間なき危險な海を航するので、例令君國の爲めとはいへ、再び生還を期し難く妻子眷族とも水さかづきをかはして出發するのであつた。

茲に於て一旦「唐船の歸帆だ」といふ聲が聞えると、全く死者が甦つて黄泉の國から來たといつた感じであつた。那覇の町は大火災以上のごつた返し、老若男女を擧げて倉皇埠頭へ飛出し忽ち人の黒山を築くのであつた。俗謠に

唐船どーい　さんてーまん　一さん走えいならんすや
若狭町の　瀬名波の爺様と久茂地の這ひ榕樹

といふのがある「唐船だ〳〵といつても、一所懸命走らないのは、若狭町の瀬名波といふ耳のつんぼで足のビッコな爺様と、久茂地町の石垣の上に這つてゐる榕樹と丈けだ」といふ意味である。

之は「唐船どーい」といふ音曲にもなつてゐるが最も勇絶壯絶な曲で、凱旋の心持を現はして居り、今でも凱旋兵や滿期兵外國移民出迎への時の道謠になつてゐる。

五二、伸びるいもづる

甘藷のことを本土では「さつまいも」と稱へ、薩摩では「琉球芋」と呼び、沖縄では現在只「いも」と稱してゐる。けれども以前は漢字で蕃薯と書いて「はんすういも」又は「からいも」と稱へてゐたらしい。

此の名稱の上から考察して、甘藷蔓は支那から琉球へ、琉球から薩摩へ、薩摩からだん〳〵全國的に伸びて行つたことがわかる。今日「いもづる」といふ語が薩摩の代名詞みたやうに使はれてゐるのも之に出發してゐるのである。

偖て支那へは果して何處から傳はつたのであらうか？それは明確ではないが、文祿三年明國人陳振龍といふ人が呂宋より移入したとのことである。

甘藷が琉球に渡來したのは、今より三百三十年程前慶長十年進貢船の事務に從事してゐた野國總管が南支那より歸國の際鉢植にして之を持歸り、自分の鄕里なる北谷間切野國村に試み、漸次附近の村々に播めたのである。其後儀間眞常が總管に請うて藷苗を求め、己れの領邑儀間村即ち

今の那覇市住吉町に植ゑ、更に政廳に献策して國中に廣めしめたといふ

由來琉球は土地狹少にして豐饒ならず、しかも頻年風旱の禍が絶えないので、以前は主要食糧たる米粟の收獲が少なく颱風一過すると野に生色なく直ちに食糧の缺乏を來し、富貴の人も錢箱を枕にして死んだといふ。沖繩では「饑饉」といふ語はなくて凶年のことを直ちに「餓死」と呼んでゐる。隨つて昔は人口も一進一退遲々として繁榮せず、加之饑饉疫癘並び行はるゝ時は人口全く半減することもあつたといふ。以て當時の悲慘なりし狀態を察知すべきである。

然るに甘藷の渡來後十四五年には所謂「いもづる」は伸びて全島に蔓延し、爾來人口は著しく增殖するに至つた。蔡溫の著「獨物語」の中に、

一、御當國前代は人居僅に七八萬人罷居候……當分二十萬人罷居候……自今以後十萬二十萬繁榮相增し都合三四十萬に相及び候とも御政道の本法（自給自足）を以て相治め候はゞ人居相增し次第衣食も出來、絶えて不足これなく御藏方（公庫）緩と相濟み申す積りに候

と述べてゐる。二百年の今日彈丸黑子の地に當時の三倍即ち六十萬に達せる繁榮振りを見たらマルサスならぬ彼も地下に一大喫驚をなすであらう。

國土は狹しといへども芋蔓しげみ

此の島人は飢ゑを知らずも（伊波普猷氏）

甘藷渡來後一世紀の後野國村地頭野國正恒は總管の功を追憶し、私費を捐てて其の墓に石壇を設け、石棺を築造して遺骨を安置した。又寶曆元年總管の後裔は野國の墓地に「總管野國由來記」なる石碑を建て、祖業を不朽に傳へることになつた。明和元年其の嫡流は祖先の遺功によつて士籍に列せられた。

昭和八年九月沖繩縣官民茲に相謀り、廣く資を募り世持神社を創建して、野國・儀間・蔡溫の三大恩人を祀り而して報謝の禮を修めることを申合せ、仝十一年五月內務省の創立認可を得、仝十二年十一月御鎭座祭典執行を見るに至つた。

甘藷の本土へ傳播した徑路を探るに、元祿十一年種子島彈正久基は琉球王尙貞より贈られた諸苗を熊毛郡西之表に植ゑしめ、それから方々へ普及するに至つた。久基は今栖林神社に祀られてゐるのである。猶ほ薩摩山川の人前田利右衞門は琉球より歸航の際諸苗を鉢植にして持歸り之を兒ケ水村に植ゑ漸次附近に播布したが仝地では明治十二年德光神社を建てゝ之を祀つてゐる。

之より後石見の代官井戸正明は甘藷を中國地方に傳へ更に之が植栽を吉宗將軍に獻策し「甘藷代官」の名を得るに至つた。

又青木昆陽は將軍吉宗の命を受けて諸苗を薩摩より取寄せ「蕃薯考」を著して關東に其の栽培普及を圖つた。東京目黒には「甘藷先生墓」と刻まれてゐる墓がある。明治三十一年に至り芝・麻布・赤阪の芋屋連「甘藷講」を起して目黒不動堂境内に「報恩碑」を建立した。洵に奇特の行爲といふべきである。

享保天明等の大饑饉には天下餓死するもの百万人に及んだが薩・隅・日其他關東など甘藷普及地にありては其の災を免れたといふ。今や甘藷は食糧及び飼料たるは勿論牧草としても珍重せられ「いもづる」は愈々世界各國に伸びることになつた。

五三、空手道の起原と其の沿革

拙著沖繩案内、風俗の章に「唐手」の一項を掲げて置いたが、之はカラ手に關する文献や資料に乏しき爲め、首里に於て發表せられた一部人士の研究を參考にして書いたので妥當を缺くが故に此に之を訂正して置く。

空手の起源に就いては未だ定論はないやうであるが、諸家の説を綜合して見ると、當地では昔から只單に「手」と稱し「空手拳頭」を以て敵を倒す武術があつたが、何時の時代にか「指頭掌力」を極度に練磨して偉大なる武力を發揮する支那拳法が傳來して所謂今日の「空手」に合流し四百年前尙眞王の武具撤廢後一段の發達を見たであらう。といふことに大體意見の一致を見たやうである。

若し正史の上に「空手」の文字を求むるなら、球陽尙眞王の條に（本書寶刀物語參照）

人、京阿波根實基の名望高きを嫉み、王に讒言したので、王彼を茶席に招き、童子に命じ七首を以て刺させた、實基手に寸鐵なく只空手を以て童子の兩股を折破り、走りて城門を出で中山坊門外に至りて斃る。

といふ記事である。或は是れ單に素手と云ふ意味であるかも知れないが、しかし徒手空拳の偉大なる力を發揮してゐることは事實である。其外史を按ずるに、

之より古く、凡そ五百年前文安五年（皇紀二一〇八）尙金福王の使者が北京に方物を貢し、後

其從人が會同館の門外に於て四川省長河西番の人と相毆ち有司此事を皇帝に上奏したので英宗命じて人を毆つて死に至らしめし者を死刑に處した。といふ記事や、其後文明四年（皇紀二一三二）尙圓王の使者武實等マラッカ國よりの歸途福州に於て船を修する時其の從人等人を殺し、此事憲宗に聞え遂に毎年入貢（貿易）を自今二年一貢に制限せられた。

といふことなど尠なくない。

由來支那人の喧嘩は文字通り喧躁するを普通とするが、日本人は二言三言の次にはすぐに手を出す癖があるので、當時の勇敢な琉球人は持合せの「空手」を發揮したのであらうと想像せられる。しかし、武の古代文字は戈止の合字で戈を止める意味から起つて居り、すべて空手道はナイハンチでもピンアンでも敵を防ぐといふ立前から始まつてゐるのは注目すべきことで日本の武士道精神と一致してゐる。

偖て空手を昔から單に「手」と稱へて來たことは前述の通りであるが、俗に「棒唐手」とか、「佐久川の唐手」とかいふ別の言葉があるのは此の古來のカラ手即ち單に「手」と區別しての名稱らしい。沖繩近代の武術家糸洲安通翁は、唐手は明人陳元贊（凡三百年前の人）の傳へたものであると話してゐたといふ。

曩の佐久川は首里赤田の人で二百年前支那より唐手を稽古して來て一般に廣めたと傳へて居り又首里の人潮平某の談に公相君といふ支那人が渡來して一種の拳法を傳へたといふ話もある。いづれにしても今日行はれてゐる

ナイハンチ三段・平安五段・バッサイ大小・公相君大小・五十四歩・チンティー・チントウ・ジッティ・ジーン・ジオン・ジューム・ワンシュウ・ワンダウ・ローハイ・ソーチン・十三・三戟・三十六・一百零八

などといふ名稱から見れば此等は支那より傳來して或は其儘、或は從來のカラ手拳法と合流したものであらう。ワンシュウなどは二百五十年前尙眞王の冊封正使汪楫の傳へしものではないだらうか？兎角冊封使の一行は數百人凡そ半ケ年も長滯在してゐたのだから其の隨員などが傳へたものもあるに違ひあるまい。

此の空手道の名人に明治の末頃迄健在であつた人には首里に糸洲先生（全四十年頃八十歳位の人）があり、那覇に東恩納先生があつた。空手も首里流と那覇流とは、多少趣きが違つてゐたと

いはれてゐるが、此の東恩納先生の高弟が今本縣に於ける權成者たる剛柔流の宮城長順氏であり糸洲先生の流を承けた人々も首里に多い。

抑も此の空手道が學校體育に取入れられたのは、明治三十八年當時陸軍少尉で首里の人屋部憲通先生が沖縄縣師範學校に、又仝年頃沖縄縣立中學校（一中）の體操教官たりし首里の人花城長茂先生が仝校に於て課外に教授せられたのを以て嚆矢とする。實に空手史上の二大恩人といふべきである。筆者は當時屋部先生の弟子として空手を學び亦高齢の糸洲翁も師範學校の囑託であつたので親しく先生の教へを受けたことがある。

其後空手は一進一退して今日に及んでゐるが、中央に進出して各大學の武道に取入れて貫ひ、而して今日の盛況を見るに至つたことに就いては松濤富名腰義珍先生を始とし、本部朝基、摩文仁賢和等諸先生の功勞を讃ふると共に、縣内に於ける宮城長順其他諸氏の功績を記して置く。

今や空手道は薙刀の採用と同様體操要目に取入れらるべく考慮中であり、不日其の實施を見た曉は愈々學校體育の正課として全國否海外にも普及されるであらう

五四、砂糖の歴史

琉球では甘蔗のことを「荻（をぎ）」と稱し、古くから栽培せられてゐたやうであるが、多分之は明國との通交後支那から移入されたものではあるまいか？四百年前來琉した冊封使陳侃の使錄には已に甘蔗のことが書いてあり、當時は果物として食用に供してゐたらしく、又其の汁を皿に盛つて客に薦めてゐたといふ。

由來甘蔗は熱帶植物で其の原産地は亞細亞の南方印度附近ならんといひ、之より漸次東西兩洋へ傳播せしものであるといはれてゐる。

沖縄で砂糖を創製した人は儀間眞常である。彼は元和九年（一二二八三）長史林國用等が使節として支那へ渡つた時福州に於て製糖の法を學ばしめ、初め自宅にて製造を試み遂に之を國中に奬勵して一大産物となすに至つた。今日沖縄の黑糖がカマス等に包裝せず樽に詰めてゐるのから見れば當時は恐らく結晶の不十分な飴狀のものであつたらうと思はれる。

兎に角從來全くの輸入品であつた砂糖が始めて琉球で製産されたことは我國産業史上特筆すべ

き事實であつた。かくして從來藥物扱ひにされてゐた砂糖がいつの間にか食用に供せられたのである。

砂糖の創製より二十四年の後（正保四年）には從來米粟で收納してゐた租稅の一部を砂糖に換算する所謂貢糖の制度が設けらるゝやうになり、一大輸出品として薩摩の市場を賑はした。此に於て役人達の間に一つの名案が浮び、即ち琉球が薩州から借りた銀九千兩は砂糖代で之を支拂ふことになり、遂に琉球黑糖は薩摩の專賣品みたやうになつて大阪市場に進出するに至つた。それから砂糖の私賣を禁じ、甘蔗の作付反別を制限する等政廳の政策となつて現はれ、寛文二年（二三二二）には砂糖奉行の設置を見たのである。

今日沖繩に於ける砂糖は價格一千數百万圓にして縣外輸移出品の約七割を占むるに至れるを見れば如何に糖價の騰落が直ちに縣下經濟界の振否に影響し、且砂糖が縣民生活と密接不離の關係を有してゐるかを知ることが出來よう。

儀間眞常は其他甘藷の普及、木綿織物の創製等實に本縣產業の一大恩人であつて、いづれ御贈位の御沙汰に浴することと拜察せられる。

前記の如く蔡溫及野國總管と共に世持神社に合祀して報本反始の志情を養はすことになつた。

話代つて甘蔗の品種は從來島荻（しまおぎ）中優良なる讀谷山種の普及に努めてゐたが、漸次品種改良の必要に迫られ大正十二年頃より農事試驗場及び農學士宮城鐵夫氏等に依つて大莖種を縣下に普及せしめ遂に今日の盛況を見るに至つた。

五五、果して男逸女勞か

「今でも男逸女勞の風があるか」などとよく問はれる言葉である。「今でも」といふ言葉の中には「以前はさうであつた」といふ肯定的の意味を包含してゐるやうに聞える。然らば昔はどうであつたか？以下聊か文献と實情とに依つて述べることにする。

那覇市中を歩いてゐると、市場で賣買に從事せる人は大抵中老の婦人である。成る程之では男は家で遊んでゐるのであらうといふ疑念を挾まずには居られぬ。しかし那覇の男は遊んでゐるのではない。それは廣い世間のことだから失業者がないとはいはぬ。只琉球の女が男に負けない程働いてゐることは確に顯著なる事實である。與謝野晶子さんの文章の中に「日本掃人が世界に誇

るべきものを持つて居るとしたら、それは最もよく働くことである」と書いてあつたが、若し然りとせば琉球の女こそは世界で最もよく働く女であり、就中那覇女と糸滿女とは殊に然りである。糸滿の女が魚の行商をして飛び廻つてゐるからつて、糸滿の男が遊逸に耽つてゐるとは誰が言はうか。如何に勤勞な糸滿女だつて漁り迄はしないから矢張り男が荒海を冒して漁業に從事してゐることは誰人も肯定するであらう。然るにそれが那覇男に限つて「男逸」といふ汚名を被せられることは氣の毒ではあるまいか。

然らば何故に那覇に限つて商業權は女が掌握してゐる形になつてゐるか？之は不思議な現象の一には違ひない。兎角此の風習は古くからの慣習になつてゐる。舊藩時代には那覇士族は夫々官途に就くべく所謂受驗準備をなしてゐた。例令就職しても薄給では共稼ぎせざるを得ない。それは今も昔も變りはない。さうした事情から妻女は夫が公職に就く迄は其の生活を支持しなければならなかつた。茲に於いていつしか士族の妻女は商業權を掌握するに至つた。斯くの如き事情の下では女の經濟的能力が必然的に要求され之が早婚の動機ともなり、其上同年輩以上の女を娶るといふ奇習も生ずるのであつた。殊に突如廢藩置縣に遭遇した當時は男子の失職者が一時に激成

された譯であるが、女子は相變らず堅實に商業に從事してゐるから此に明かに男逸女勞が實現した譯である。けれどもそれは一時的特殊現象であつて、今日迄殘つてゐるものでないことは勿論である。然るに婦女子の商業權は依然として存續してゐるから其の半面に男が遊んでゐるやうに見える。しかも此の狀態は那覇のみであつて地方にありては男女同樣に家業に精勵してゐる。農村に於ては甘藷を常食とするが故に毎日畑に收穫にゆく、之は多く婦女の任務になつてゐるから沖縄では婦女の屋外作業が多いのである。只此に諒解すべきは琉球の婦女が本土のそれよりも勤勞や即ち女勞であることは確かな事實であるが、さりとてその半面に男逸であるとは認められないことである。

次に文献に現はれた「男逸女勞」に就いて述べると慶長十八年薩摩の家老より三司官へ遣されし條々に、

一、此中耗作に專女を差出、男は大形の由候、自今以後は男女同前に可二入精一事

とある。之は島津氏征服直後のことにて薩吏が始めて那覇に來た時、例の婦女活動の實情を見て直ちに男逸女勞と認めたのであらう。しかし薩摩に征服された結果琉球の士族が自暴自棄に陷つ

たことや以來搾取に惱まされた農民に惰風が生じたことは明かなる事實であつた。そこへ甘藷が移入されて生活が保證されたから安易に流れたのではなからうか。男逸女勞は冊封使の記錄にも之を留めてゐる。今之を摘錄して見ると、

○女力二織作一、男反坐而食レ之……

○男子多仰給於婦人、司二牝鷄之晨一者、十室而九

○農習二于惰一、紝婦較二耕男一爲勤、家織二蕉布一、云々

然るに是れ前述の如く、彼等が目擊せし商工業地たる那覇と、奉職階級者の一部狀態であつて、皮想の觀察たるや疑ふ餘地もない。

五六、有名な白銀堂の傳說

糸滿町の入口、隆起珊瑚岩の屹立した中に近頃新らしく白銀神社といふ宮が建立せられた。その鳥居を入ると右方に小祠がある。此處は古來ヨリアゲ森（海幸寄り上げの意）と稱ふる鎭守の森で、町民の尊信厚く年中豐漁、海上安全、無病息災等を祈願する參拜者の絕ゆることがない。

此處には又昔から面白い有名な傳說がある。

往昔の世、兼城間切糸滿村の北に一つの岩があり、白銀岩と呼んでゐた。昔幸地村に美殿（みどん）といふ者があつたが糸滿村へ移つて來てそこに住居することになつた。美殿は漁業の資金にでも充てたのであらう、倭人（日本本土の人）から銀を借りたが仕事も思ふ樣にゆかぬので期限が來て數回催促を受けたけれども償還することが出來ず約束の日には遂に何處へか姿を隱して仕舞つた。或る日倭人が遙々訪ねて見ると美殿は影も形も見えない。倭人は大に怒り所々方々を探し廻つた揚句やつと之を海岸の岩下に發見した。彼は大に怒り忽ち刀を拔いて兩斷しようと身構へした。美殿は大に怖れをなし憐みを請うて曰く

私はどうして長く隱れてゐて貴殿を騙すことが出來よう。如何せん不仕合せのみ續き、仕事も順調に行かぬので調達すべき術がない。信用を失墜して心中寔に慚愧に堪へないので實は恐懼して此に隱れてゐた譯である。願はくば寬大以て一命を救ひ給へ、明年御渡島の節迄には如何なることがあつても再び違約は致さぬ。

甚だ失禮な申分ではあるが沖繩の諺に「勇氣（いち）の出（いち）らば手を引け、手の出（いち）らば勇氣（いち）を引け」とある

からそれを御記憶願ひたいと諫めた。倭人は之を聞いて甚だ道理に叶ふ言葉だと感激し、乃ち美殿の願を容れ再び來島の時迄期限を延ばすことを諾して引上げた。

偖て愈々順風に帆をあげ那覇の港を解纜して無事歸鄉、懐しい吾が家へ辿り着いたのは夜半であつた。暗い中に雨戸を開けて家に這入つて見ると、豈計らんや戀しい妻が姦夫と相抱いて寢てゐるではないか。彼は嫉妬の情炎々として烈火の如く怒り、忽ち此の惡むべき姦夫姦婦を一刀兩斷しようと身構へした。其の刹那ハット彼の耳朶に響いたのはあの美殿の言葉であつた。

勇氣の出ぢらば手を引け
手の出ぢらば勇氣を引け

燭を照らしてよく〳〵檢めて見ると姦夫と思ひしは吾が母が妻に添寢をしてゐるのであつた。それは母が、女ばかりの家であるから彼が遠い旅へ出かける毎に奸人の侵入を恐れ、男裝に扮して添寢をするのであつた。

彼は美殿の戒めに依つて母と妻の命を全うすることが出來たので非常に感激し、南の空へ向つて幾度か合掌した。

其後彼は琉球へ到り、早速酒肴を携へて美殿の家を訪ね、一語一什を物語つて恩を謝した。美殿も大に喜び前年の非を詫びると共に厚く禮を述べ、かねて用意の銀子、耳を揃へてつき出した。倭人は「イヤ此の金は母や妻の命拾をした御恩返しに汝へ遣はすから是非に受けて呉れ」と辭退する。美殿は又「前年は不首尾で申譯なかつたが今度は此の通り工面が出來た。自分は他人の金を借りて不義理をいたすやうな人間ではない。是非に納め給へ」と差出す。兩方讓り合うて始末がつかなくなつた。

茲に於て其の銀を岩下に埋めて兩人の志を永く後昆にのこすことにした。爾來人々之を白銀岩と名づけ拜所と爲して尊信するに至つたといふ。

五七、糸滿漁民は果して異人種か

新來の客は糸滿に就いて餘程の好奇心を持つて來るらしい。何でも「個人財產制度」で「イートマンといふ英國漂流人の子孫だといふではないか」などと何處から拾つて來たものか突飛な質問を發して土地の人を困らせることがある。もうこちらでも耳にタコの出來る程聞かされてゐる

から驚く者もない位笑止千萬な臆說であり、民間語源說である。しかし長い間の職業の關係で他の農村とは色々の慣習が違つてゐる点もないではない。

糸滿は那覇から三里、自動車で二三十分を要する。珊瑚礁の海に面した僅かな傾斜地に八千人も住んでゐる。業務の上からいふと、多少農工商もあるが男の過半は漁業者で、長さ三間幅三尺の刳舟に一命を托して河童の様に年中海に親しみ、沖繩三十六島の津々浦々は勿論、四國九州、九十九里ヶ濱を始とし、遠く安南・シヤム及南洋諸島方面迄出掛けて勇敢なる海洋生活を營み、地中海に於ける八阪丸引上作業に從事して世界を驚倒させたのも糸滿漁夫であつた。一本の銛を提げて魚類を逐ひ廻したり、鰹の尻に繩を結付けて引張り出したりする藝當は恐ろしいもので、タイ國あたりでは魚族絶滅の虞ありと爲し國法を以て其の漁法を禁止してゐるとは嘘のやうな事實である。

糸滿の女は至つて頑健粗野ではあるが美貌が多く、生魚を頭に載せて賣り歩く、以前は五六十斤ものせて三里の道を大手を振りながら那覇へ疾走したものであつた。主人が留守勝な所から一家の切廻し、子女の養育、世間の交際等一切主婦が引受けねばならぬ事情と、男が板一枚の下は地獄といふ危險な業に從事してゐる丈けに萬一のこともあるので、糸滿の女は少女時代から勤儉の精神に富み、嫁ぐ迄には凡そ四五百圓多きは千圓以上も貯蓄する。嫁の選擇には貯金の多寡を以て標準とするといはれてゐるが、其の理由を尋ねると、蓄積の多い女は第一に體格強健、第二に勤勉、第三に儉素にして堅實だからであるといふ。彼女等はスパルタ人を思はせるやうに思想堅實・貞節堅固である。結婚後と雖も婦女の經濟は夫とは別箇になつてゐる。此等の点に於て物質主義であり、個人主義經濟組織だといはれてゐる。けれども夫の病氣や子供の教育費等必要な場合には敢へて融通するを惜まぬ。夫君も亦安心して家事を托せるから後顧の憂がない。彼女等は生命を賭して其の貞操を固守する。うつかり巫山戯でもしたら。ひどい目に遇はされる。だから妙な噂などは仲々に立たない。

糸滿は昔お隣りの兼城間切の一邑即ち南山城下の漁民部落で縣下の方々から移住して聚落をなしたと傳へてゐる。

糸滿名物は陰曆五月四日古來の行事として行はるゝ爬龍船競爭である。町内三組に分れて競漕するのであるが、婦女迄が死物狂になり潮水の中に腓を浸して根限り應援する。方々へ出漁して

ゐる者も一年の中此の日だけは必らず歸鄕する例になつてゐるから、此の日に歸つて來ないものは最早龍宮祭りをされることになる。

因みに血淸學的に調査せる糸滿人の人種系數は其の隣接周圍人と比較して大差なき結果を示し別に異人種でないことを證明してゐる。

五八、異國風に見えるキリシタン帳

命題ばかり見たら如何にも異國情緒的なキリスト降誕祝ででもあるかのやうな感じのする年中行事である。之は藩政時代からの古いしきたりで、只單にキリシタン又はキリシタンチャウとも稱へ、今では殆んど其の跡を絕つてしまつたが、因習といふものは根强いもので島尻本島の喜屋武豐見城や、國頭郡久志村字久志・仝瀨嵩・大宜味田嘉里其他僻地の一部には今でも殘つてゐる。

此の行事は前年の舊歷十一月十日以後に出生した男女の子供を字事務所に伴ひゆき、酒肴を調へて字の親方や戸主の方々を招いておふるまひをなし、而して生兒の前途を祝福する祝で、今日では赤兒は伴はない。之は一種の「戸籍改め」なので、往時の戸口調査即ち今日の國勢調査に當るもので、前年の調査以後に出生した赤兒を村事務所へつれて行つて初めて戸籍簿に記帳させるといつた意味のものである。然らばどうして之にキリシタン帳などといふ名が付いたか？は、もう大抵何人も想像がつくであらう。

抑も德川幕府の切支丹禁制が何時琉球藩に布達せられたかは判明せぬが、元和八年（皇紀二二八二）南蠻船が八重山島に漂着した時、川平の人宮良親雲上が牛十頭を贈り且つ南蠻人を自宅に招いて敎を受けたといふ嫌疑に依り、彼の政敵であつたといはれてゐる石垣親雲上が首里へ上つて告訴したので、藩府は小祿親雲上等に命じて之を拘引譴責せしめ、實證を擧げたといふので宮良を火焙りの刑に處し、子孫兄弟殘らず波照間・與那國・宮古島・渡名喜島等の島々へ流罪に處したといふ史實があるのから見れば、慶長役後間もなく切支丹は禁制になつてゐたと見える。

之より十餘年の後寬永十三年島津氏は琉球に禁令を發し每年「鬼利死丹宗門改」と稱して全島の戸籍を調査編成して報告をなさしめ、翌年島原の亂後は其の禁壓いよ〳〵嚴しく、那覇埠頭にはいつしか十字架の踏石が備へられてあつたといふ。そして各間切島は年中行事の一として每年十一月には「切支丹宗門改帳」を作成し十二月迄に首里城內大與座と稱する戸籍課へ提出せしめ

てゐた。今左に著者の借覽した座間味間切公事帳の條文を見ると、

一、切支丹帳、例年の通り、生子死人差引、捉々（各字區長）より相調べ差出し候はば、間切中總帳相認め、大拐庫吏一人持渡り、惣地頭印押、十三日限り大與座へ差出候事

とある。要するにキリシタン帳は此の調査の首尾祝であつた。

五九、琉球藩の無線電信

今では日支通交の船舶は長崎・上海間を一路直通してゐるやうに大洋の眞只中を横斷してゐるが、昔は船が不完全なのと、航路標識や無電などの設備がないので彼の遣唐使の船でも、北は瀬戸内から九州を經、朝鮮沿岸を通つて行くのと、南は薩南の琉球列島を島傳ひ浦傳ひに行くのとがあつたやうである。琉球でも本土及支那への往來は、矢張り北は所謂「道の島」を廻り、南は「先島」を經るのであつた。處が海上の危險が伴ふばかりでなく、入港の際の準備等もあることとて船の到著を豫知する必要がある。然るに今日の如く海底電信や無電がない。此に於て極めて便利な通信方法を設けてあつた。是れ即ち茲に紹介せんとするもので「遠見番と烽火」の制度である。

之は正保元年（二三〇四）尙賢王時代に設置したもので、各島や方々の山上に「遠見番」なる見張を置き、船が見えたら「烽火」を擧げさせる。例へば唐船が支那から歸帆する時先島方面より通知があると、久米島で烽火をあげ、次は渡名喜島で之に應火し、座間味・渡嘉敷・前島と順々と之を受けて那覇附近の小祿に知らせ、小祿は直ちに之を首里城へ注進するのであつた。

又一方薩摩方面の航路に就いては先づ沖繩本島の最北端國頭の邊戸岬で船を發見したら烽火をあげ次々大宜味・今歸仁・本部・讀谷山・浦添といつた調子に之を傳へて首里城に達せしめたのである。しかも一隻なれば烽火一炬を点じ、二隻なれば二炬、又外國船發見の場合は三炬を照してゐた。實に便利な海島の無線通信法ではあるまいか。なほ前記の外、粟國・伊是名・伊平屋の島々にも之を設置してあつたが、若し其の職責を懈怠するものある時は嚴罰に處する掟になつてゐたといふ。

現今でも此等の諸島には「遠見番」又は「火立家」と稱する遺跡が判然と殘つて居り、其の職に任じてゐた者の子孫もある。

六〇、琉球の地名及び姓名

琉球の地名及姓名には隨分讀みにくいものがある。それは本土でも同様で、今日でも教ふればこそ容易く讀めるけれど、大和をヤマトと讀んだり、近江と書いてオーミと發音したり、又姓では勅使河原と書いてテシガハラと呼んだり隨分無茶なものがある。長谷川と書いてハセガワと讀ませるのも大體無理ではあるまいか。

由來姓氏は元々其の祖先の住んでゐた地名や領有してゐた采邑の名や或は其の職掌の名を採用したものが多く、川上・中村・下田などは地名であり服部・陶などは職業から來たものであらう。沖縄に於ても變りはないが、多くの姓は地名から來たものである。隨つて地名の發音が著しく訛つて後世それに當字をしたりした爲めに、重箱讀などが多い。

當字は多く萬葉假名の風である。安仁屋・宇久・伊是名・喜友名・屋比久など幾多の例がある。重箱讀では謝花・祝嶺などがあり、又東の音が訛つてヒガと發音する故に之を比嘉と當字をしたり、上里を神里、下里を新里と文字を方言の通り當てたのもある。

琉球では古くから氏族制度が判然として居り、士族は名乘り頭の文字で其の氏が明確にわかるやうになつてゐる。例へば名前に「朝」の字の附いてゐる朝信とか、朝光とかいふ名の人は尙侯爵家の一族で爲朝の「朝」を採用したのであり、盛清とか盛綱とか「盛」の字のついた人は義臣護佐丸の後裔毛氏か或は翁氏などであることを示し、良勝とか良明とかは凡そ馬氏といふことになつてゐる。

次に琉球史を讀んでゐると隨分人名の複雜になつてゐるのが氣に附く。それは琉球が久しく支那と通交してゐた關係で日本名の外に「唐名」があり、對支關係のある正史や文書などには大抵此の唐名が記されてゐる。例へば「蔡温」は唐名であり「志多伯文若」は日本名である。志多伯といふ姓は其の領地の名であるから昇進して具志頭の惣地頭に補せられると當然「具志頭文若」と改稱したのである。しかし當地では大抵其の人の階級を下に附けて「具志頭親方」と呼ぶのが普通になつてゐるから見樣によつては三種の姓名であるやうなわけになる。

慶長後は薩摩の下知がやかましくなり、本土の姓と同樣な文字を使用させないやうになつてゐたといはれてゐる。即ち德山・德川を渡久山・渡久川に、迫田・迫川・横田・奥田を佐久田・佐久川